

ば便ち過ぎ了る。順境界は直に是れ備が回避する處なし。磁石と鐵と相遇ふて彼此覺えずして合して一處と作るが如し。無情の物すら尙ほ爾り、況んや現行の無明の全身、裏許に在つて活計を作すものをや。此の境界に當つて若し智慧なくんば、覺えず知らずして、他の羅網に引入せらるることを被つて、卻つて裏許に向つて出路を求めんと要す、亦難からずや。所以に先聖云く、「世間に入得すれば、出世餘なし」と、便ち是れ這箇の道理なり。近世に一種の修行に方便を失する者あり、往往に現行の無明を認めて世間に入るとなして、便ち世間の法を將つて、強ひて差排して出世餘なきの事と作す、悲しまざるべけんや。夙に誓願あり、即時に識得破して主と作り得て、他の

を省みるの謂にして、省察をいふ。
宗鏡錄五十三に密嚴經を引けり。
現行とは、顯現行起なり、無明とは不了一法界の惑とて、本有の面目及び吾人の眞智を掩へる煩惱を指す、即ち現在吾人の上に現起して吾人の總てを支配せる煩惱の謂なり。全身とは全體に同じ。裏許とは順境界を指す。
他とは順境を指す、羅網とは生死の業報の脱し難きに喩ふ。若し之を覺知せば則ち出路を得べきなり。
卻つて等は、富貴高名の中に居して出離を求めんと欲し、却つて裏許に向つて出路を求めんと要す、甚だ易からずとなり。亦難からずやとは、一説は前の如し、又は、生死界に即して出離を求めんと要す、亦難からずやの義もあす、亦難からずやの義もあり。
所以に等とは、上に既に寶積經四、智度論三十九等を引いて之を辨せり。
出世餘なし等とは、全備の義、意は覺知するを以ての故に、順逆の中に於て轉ぜられず、即ち離染等の八風を把握して用ひて名字に著せず、直に本體を把握して用ふ、故に出世無餘といふ、是れ大力量の人。
近世は第四段、世間即出世間といふの邪解者を破す。方便とは善巧方便を得て世間の實相を知る人は、世間の縛を被らず、故に知論四十三に云々す、今は之に反す。
往往等とは謬解して、現行の無明三毒を以て直に佛法となす。又染着を離れ、如實に世間の相を知るを、入得すとい

牽引を被らざるを除く。故に淨名言へることあり、「佛増上慢の人の爲に、姪怒痴を離るるを解脱と爲すと説きたまふのみ。若し増上慢なき者には、佛は姪怒痴の性即ち是れ解脱なりと説きたまふ」と。若し此の過を免れ得ば、逆順の境界の中に於て起滅の相あることなうして、始めて増上慢の名字を離れ得ん。恁麼ならば方に世間に入得すと作すべし、之れを有力量の漢と謂ふ。已上の所説、都て是れ妙喜が平昔に經歷過せし底なり。即今の日用も亦只だ此くの如くに修行す。願はくは公、色の强健を、越ふて亦是の三昧に入れ、此の外は時時に趙州の無字を以て提撕せよ、久久にして純熟せば、豁然として無心にして、漆桶を撞破すべし。便ち是れ徹頭の處なり。

ふ、然るに智論に所謂五陰の性本來空寂なりと徹見せず、世相に認着して而も入るとなす、謬れり謬れり。
これは實に其の道理なきをいふ。
煩惱無盡善願斷なり。
三毒何ものぞ、業何物ぞと、其實相を識得すれば、決定して經となり得るなり。
他とは現行の無明なり。
第五段、淨名經を引いて上の義を證成す。増上慢とは、未得を已得といひ、未證を已證といふ人。法華方便品、楞嚴經十の注。
修惡即性惡なれば、實は離るといふも、即してといふも同じ、而し姪怒痴を認着して其故に今離るといふ、認着を離るれば諸法實相を知る是れ眞の解脱なればなり。
諸法無行經上に云く、「淫欲即ち是れ道、愚痴も亦復た然り云々」と。
此過とは三毒無明の過失なり。
逆順の境界に入りて、逆順の實相皆空なりと見得れば則ち逆順の中に於て……起滅とは憎愛をいふ。
世間に於て、出世間を打得する故に、蓮忍法師の安心法門。第六段、自行を引き證として勸勉す。
學地の時をいふ。即今等とは、大惠、昔しは勸めて精神せしも、今は已に熟す、故に自然に行するなり、大安の所謂露迥迥地にして遂に亦去らざるなり。
趙とは塵逐のいひなり。
漆桶等は疑團の破るるをいふ。
此章は、古徳の痛處を擧げて

又

① 日用の工夫は前書に已に葛藤すること少からず、但だ只だ舊に依つて、不變不動にして物來らば、則ち之れと酬酢せよ、自然に物と我と一如ならん。古徳云く、「放曠として其の去住に任せ、靜鑑して其の源流を覺せよ、證を語るときは則ち人に示すべからず、理を説くときは則ち證に非ざれば了せず」と。自證自得の處は拈出して人に呈似すること得ず、唯だ親證親得したる者は、略目前の些子を露せば、彼此便ち黙黙として相契ふ。此れより人の謾を被らず、錯つて工夫を用ひずといふことを示諭せらる。大槩已に正しく欄柄已に得たり。善く牛を牧ふ者の如き、索頭常に手中に在らば、争か人の苗稼を犯すことを得ん。驀地に索頭

① 錯り等とは人の射を學ぶが如し、的を得ずんば虚棄となす、今は既に見得するが故に錯らざるなり。

② 大槩の上に「公」の字を加へ見よ、大槩は大抵なり、正は眞正なり。

③ 善く等は、遺教經に云々。

④ 蕪地等とは、此れより前きは心の師となりて、心を師とせず、即ちいまは心の師となつて自然に自由にして觸犯せずとなり。鼻孔は、牛の鼻孔に曲木を施す故に爾かひふ。

⑤ 擲可把、沒巴鼻の境界、次第に純熟す、好箇の境界なり。

⑥ 平田は碧巖八十一則の垂示。

⑦ 慈明は正法眼藏、僧寶傳二十一、慈明。牧童の歌を作つて曰く云々。

⑧ 從前は他の苗稼を犯さんことを恐る、今は已に純熟する故

深維を下す。

① 第一段、來意を承知す。

② 境に對して轉ぜられざる也。

③ 法即ち人、人即ち法にして法と人と融合せるを一如といふ。彌燈三、嵩山破籠草、碧巖十の評に云々。

④ 第二段、自得自知を論ず、自得の境は別人に問はざる處に在り、然れども知識の證明を受けずんばあるべからず、故に之を引く。古徳とは、清涼鐵國大師澄觀なり、傳燈三十五に詳なり。放曠は、物に拘はらざるなり。

⑤ 靜鑑は靜寂鑑照なり、所謂止觀なり、これ自悟の境界をいふ。源流は本末又は體用なり、其の源を靜にし、其流を鑑みるのいひなり。

⑥ 略はすこしこの意。

⑦ 第三段、牧牛の法を教ふ。謾は一に驢の字に作れり。

を放卻すれば、鼻孔、擲模する處なく、平田の淺草、縱横するに一任す。

① 慈明の老人の所謂四方に放ち去つて、攔遏すること休れ、八面拘ることなく意に任せて遊ぶ、收めんと要すれば只だ索頭に在つて、撥すと。未だ是くの如くなること能はずんば、當に緊しく索頭を把りて且く與に順に摩摺すべし。② 淹浸の工夫既に熟せば、自然に意を用ひて隄防することを著され。③ 工夫急なるべからず、急なるときは則ち躁動す。又緩なるべからず、緩なるときは則ち昏怛す。忘懷し、著意せば俱に蹉過せん。④ 譬へば

劍を擲つて空に揮ふが如し、及ぶと及ばざるを論ずること莫れ。昔、嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何ん。」州云く、「放下着。」嚴陽云く、「一物既に不將來、箇の甚麼をか放下せん。」州云く、「放不下ならば擔取し去れ。」嚴陽、言下に於て大悟す。又僧あり、古徳に問ふ、「學人、奈何ともすること得ざる時如何ん。」古徳云く、「老僧も亦奈何ともすること得ず。僧云く、「學人は學地に在り、故に是れ奈何ともすること得ず、和尙は是れ大善知識なり、甚麼と爲てか亦奈何ともすること得ざる。」古徳云く、「我れ若し奈何ともすること得ば則便ち爾が這の奈何ともせざることを拈

に、放去すと雖も犯さざるなり。

② 撥は索頭を撥くるなり。

③ 當等とは心の師となりて、放逸せしめざるなり。摩摺はなでおろさるなり、此は心を安性するをいふ、若し逆毛を摩摺すれば心動亂するが故に。

④ 淹浸は打成一片の工夫を喻ふ。

⑤ 自然に苗稼を犯さざるなり。隄防とは心を制禁して放逸せざらしむるをいふ。

⑥ 第四段、直前の工夫を示す。躁動は闇亂なり、昏怛は心傷き黒漫漫地の謂なり、即ち擲擧昏沈をいふ。

⑦ 譬等は傳燈七盤山章。意は無心にして任運に物に應じて誤らざるをいふ。

⑧ 及と不及とは、物に應ずると物に應ぜざるとなり、意は是非得失に管せざるなり。管せ

卻せん。僧、言下に於て大悟す。二僧の悟處即ち是れ樓樞密が迷處なり。樓樞密が疑處は即ち是れ二僧の間處なり。法は分別より生じて還つて分別より滅す、諸の分別の法を滅すれば、是の法は生滅なし。細かに來書を觀るに、病已に去り盡きぬ、別の證候も亦生ぜじ、大段相近し、亦漸く力を省けり。請ふ只だ省力の處に就いて、放つて蕩蕩地ならしめよ。忽然として、碎地に破し、曝地に斷せば便ち了せん。千萬之れを勉めよ。

曹太尉に答ふ 功顯

某、年運つて往くと雖も、敢て勉強して方めて此の事を以て衲子の輩と激揚せずんばあらず。一日、粥後に牌子を撥して、一百人を輪して入室せしむ。間、命を負ふ者鉤に上

ざれば自然に恰好なり。此は工夫の用心を示し、有心無心に墮せざらしめんが爲にいふ。

第五段、款に依つて案を決す、傳燈十一。引く意は、一物不將來といふ、此には不變不動といふ、其見解同じきが故に之を引く。此は大慧、樓を贊して言ふ。嚴陽は趙州從諗禪師の法嗣。

又僧とは、傳燈十六。雲蓋山子元禪師なり、聯燈二十二に云云。

二僧は悟り去る、樓は未だ悟らず、故に迷處といふ。

疑處とは、意は他に對して不變不動の地位に至る、此れ是なりや否やと問ふ、これ光影邊の第二病の處に到り得る故に。

之れは學者を激發する親切の語なり、金剛三昧經下の文、

法とは一切萬法なり、即ち萬法は妄分別より生ず、生滅に別物の生滅なし。

諸法は元來生滅にあらず、然るに是が不是かと疑ふ便ち是れ妄分別に依る、不變不動は是にあらず不是にあらず、之に依つて修し去らば、自然に本分地に到り得ん、不變不動の處即ち是といふにあらず。細等、第六段、得道は遠にあらざることを示して、勉を勸む。

證候とは徵候に同じきか、これ病に從へて云ふ、醫して不變不動の處に到る故に餘の毛病生ぜず、然るに是を認めて可となさば、却つて大病とならん。

大段は大抵の様子なり、得道に近づくをいふ。

蕩蕩は、法度敗壞の貌。

碎は驚なり、上に出づ。

り來るあり、亦人を咬む師子あり、此の法喜禪悅を以て樂みと爲して殊て倦むことを覺えず、亦造物に憐まるのみ。左右は福慧兩ながら全し、日に至尊の側に在りて、而して意を此の段の大事因縁に留む、眞に不可思議の事なり。釋迦老子曰く、「勢ありて臨まざること難し、豪貴にして道を學ぶこと難し」と。百劫千生、曾て善知識に承事して般若の種子を種る得ること深きに非ずんば、焉んぞ能く是くの如くに信得及せんや。只だ這の信得及する處、便ち是れ成佛作祖する底の基本なり。願くは公、只だ信得及するの處に向つて戲捕せば、久久にして自ら透脱せん。然も第一には意を著けて安排して、透脱の處を覓むることを得ざれ。若し意を著けば則ち蹉過せん。釋迦老子

曹功顯の傳は宋史列傳百三十八。太尉は南宋第二主、高宗の時に此官を設く、事物紀原

四、初學記十一、下を安んずるを尉といふ、武事を掌る官なり。此章は始め居士の志を讚し、中間に維摩經を引き、後に邪見を擧げて居士の爲にす。師六十九の時の作なり。

第一段、自らの老いて化度を廢せざることを敘す。此時は師、育王山に住す。

一日とは或る日なり。

禪家にては朝の食事は粥を喫する故に之を粥座と稱す。牌子とは、禪門實訓に云く、「古入入室には、先づ牌を掛けしむ云々。入室」と大書せし札を掛くるをいふ。

輪とは、上位より漸次下位に至りて輪轉連接して絶えざることを車輪の如きをいふ。

命を負、命は命令、負は孤負

の義なり、謂く、太公望、釣に直釣を以てして謂く、「左せんと欲せば便ち左せよ、右せんと欲せば便ち右せよ、命を負ふ者は釣に上り來るなり」と。今の意は師家は、勘辨の機に乗せしむるを欲せず、左せんと欲せば左せよと、然らば學者之に乗じ來るなり。

人を咬むは、學者、勘辨の機に乗せざるなり。傳燈十一、趙州。

造物とは、猶ほ天公といふが如し。

第二段、道を信するの深きを歎す、意は佛者は福慧長するをいふ。優婆塞戒經二、莊嚴品。

至尊とは、天子を指して言ふ、是れ福全なり。意を此の段等とは、慧全を言ふ。

釋迦等とは、四十二章經の文なり。威勢ありて而も之を抑

又曰く、「佛道は不思議なり、誰か能く佛を思議せんや」と。又佛、文殊師利に問うて曰く、「汝不思議三昧に入るや。」文殊曰く、「弗也、世尊、我れ即ち不思議ならば、心の能く思議する者あることを見ず、云何んぞ而も不思議三昧に入ると言はんや。」我れ初め發心して、是の定に入らんと欲す、如今思惟するに實に心想の而も三昧に入るなし。人の射を學ぶが如き、久しく習ふときは則ち巧なり、後には無心なりと雖も久習せるを以ての故に、箭發すれば皆中る。我も亦是くの如し、初め不思議三昧を學せしとき、心を一縁に繫けき、久しく習ふて成就するが若きは、更に心想することなけれども常に定と俱なりきと、佛と祖師と所受用の處は、無二無別なり。近年叢林に一種の邪禪あり、目を閉ぢ睛を藏して、背盧都地にして妄想を作すを、之れを不思議の事と謂ひ、亦之れを威音那畔、空劫已前の事と謂ひて、纒かに口を開けば便ち喚んで今時に落つと作し、亦之れを根本の上の事と謂ひ、亦之れを淨極まりて光通達すと謂ひ、悟を以て第二頭に落在すと爲し、悟を以て枝葉邊の事なりと爲す。蓋し渠、初め歩を發する時より便ち錯り了れり、亦是れ錯なることを知らずし

へて下に臨まざる難し。豪貴の人は常に五欲の境に耽ける故に道を學び難しとなり。第三段、道は思議を容れざることを論ず。臨濟錄に云く、「求者すれば即ち轉た違し等」と。釋迦等とは華嚴經二十三、兜率偈贊品。又佛等は、大寶積經百十六の文、宗鏡錄四十五。入らんと欲せば、則ち是れ思議なり。此くの如く工夫をなして三昧に入る底、是れ無修の修、無學の學なり、然るに學入謬つて死語を認めて悟なしと道ふ、無事禪に墮するなり。後に等は、心を起して的中することを欲せざれども箭を發せば皆中る、所謂恰恰の用心の時、恰恰として無心にして用ふる是れなり。

て、悟を以て建立なりと爲す。既に自ら悟門なければ、亦悟ある者を信せず、這般底を之れを大般若を誇り佛の慧命を斷すと謂ふ。千佛出世すれども懺悔を通せじ、左右は人を驗する眼を具ふや久し。此等の輩の似き師子皮を披却して野干鳴を作す、知らずんばあるべからず。某、左右と未だ顔を承け論を接へすと雖も、此の心は已に默默として相契ふこと多年、此れより前答字極めて禮の如くならず、今専ら法空禪人を遣して代つて往いて敬を到さしむ。故に善思惟三昧に入るに暇あらず、只だ恁麼に手に信せ意に信せて、覺えず葛藤すること如許す。聊か不敏を謝するのみ。

榮侍郎に答ふ 茂實

心を留めて此の一段の大事因縁を究竟せんと欲すといふことを承はる。既に此の心を辨せんとならば、第一に急なることを要せざれ、急なるときは則ち轉た遅し。又緩なることを得ざれ、緩なるときは則ち怠墮す。調琴の法の如く緊と緩と中を得て、方に曲調を成すことを要す。但だ日用應縁の處に向つて時に觀捕せよ。我が道の能く人の爲に是非曲直を決斷する底は、誰が恩力をか承くる。畢竟して甚麼の處よりか流出するや

①心を不思議なる一緣境に專注するをいふ。
②第四段、邪師を斥く。
③背盧都地とは、正宗贊、風穴章の古解に云く、「坐して鼻端を守るなり」と。入天眼目章に「言はさずして言ふの貌」と。普燈錄抄に云く、「擲談なり、口を閉ぢて言はざるなり」と。
④根本の上とは、下の枝葉邊に應ず。
⑤淨極等は楞嚴經六。
⑥悟を以て等は、前に出づ。これ仰山の語を誤解するなり、謂く「悟といふは無事にして事を生ずるなり」と。
⑦師子皮等とは、身に佛衣を着し、心に外道の見解を作すをいふ。臨濟錄に云云。
⑧第五段、專使を遣はす意を叙す。
⑨專使は專使にて、餘事を雜へざ

と、観捕し來り觀捕し去らば、平昔の生處の路頭は自ら熟せん。生處既に熟すれば、即ち熟處却つて生るべきなり。⑤ 那箇か是れ熟處なるや、五陰六入、十二處、十八界、二十五有、無明業識にて思量し計較する心識、晝夜、熾熾として野馬の暫くも停息すること無きが如き底是なり。⑥ 這の一絡索、人を使ひ得て生死に流浪せしめ、人を使ひ得て不好の事を做さしむ。⑦ 這の一絡索既に生なるときは、則ち菩提も涅槃も眞如も佛性も便ち現前すべきなり。現前するの時に當つて亦、現前の量なし。故に古徳契證し得了つて、便ち道ふことを解す。⑧ 眼に應ずる時は千日の若くにして萬象、影質を逃るること能はず、耳に應ずる時は幽谷の若くにして大小の音聲足らずといふことなるをいふ。

① 法空禪人は、宗派圖、普燈、續傳燈、大意法嗣の下に之を載せず。
 ② 善思惟等とは卑下の辭なり、今此書を作るに善三昧に入るすとなり。
 ③ 不敬とは愚鈍の謂なり、此には失禮のいひなり。
 ④ 榮は宋史に傳なし、萬姓統譜五十四、師六十九の時の作。
 ⑤ 第一段、工夫の法を示す。
 ⑥ 此心を辨ずの辨とは、ものつきはつけてととのふるを首ふ。
 ⑦ 観捕とは把得の義、縁に應ずる處、把得し用ふるなり。我が道已下は観捕底の様子なり。我とは榮侍郎を指すも大惠代つて言ふの詞なり。
 ⑧ 此の如く自由自在なるは誰の恩力を受くとなり。
 ⑨ 第五段、凡夫の熟處を論ず。

⑤ 五陰は、色、受、想、行、識なり、六入とは眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の六根の事なり、十二處とは、六根と、色、聲、香、味、觸、法の六境とを合して十二處といふ。十八界とは、六根と六境と、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六識を合して十八界といふ。これ色心法の分類の異なり、即ち心に迷ふことの強き人の爲に五陰を説き、色即ち物質は常住なりと迷ふことの強き人の爲に十二處を説き、色心の二法に並び迷ふことの強き人には十八界と説くなり。
 ⑥ 二十五有とは、有は因果不亡の義とて、煩惱業の因に依つて人、天等の果を招き得、果中に復た因を造り藏す、其因に依りて復た次の果を引く等にて、要するに迷界の存在を

し」と。此くの如き等の事、他に求むることを假らず、他の力を借らずして自然に應縁の處に向つて活潑地なり。⑦ 未だ此くの如くなることを得ずんば且く這の世間の塵勞を思量する底の心を將つて思量不及の處に回在して、試みに思量して看よ、那箇か是れ思量不及の處なるや。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無き

有といふ。而して二十五とは、東、弗婆提、南、閻浮提、西、衛耶尼、北、鬱單越(以上を須彌四洲といふ)。次に地獄、餓鬼、畜生(已上を四惡趣といふ)。次に四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天(已上欲界の六天なり)。次に梵天(之れは實は色界初禪天中の一處にて大梵天なり)。次に初禪天、二禪天、三禪天、四禪天(已上色界の四禪天なり)。次に空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非非想處(已上無色界の四天なり)。次に無想天、五那含天(無煩、無熱、善見、善現なり)以上の二天は實は色界第四禪天の中にあるも、外道は之を誤り執して無生死の世界と想ひ、又前の梵天は外道之を認めて世界の創造者なり等と迷ふ故に、何れも迷界に

して生死を離れざることを影はして、別に開出して一の有と立てしなり。以上の二十五有を合すれば五道となり、五道を更に合すれば三界となるなり、今は一一を委しく解する能はず。法苑珠林八十七、近くは四教儀中卷、冠註に俱舍論を引けり、見よ。
 ⑧ 無明即業識にて、要するに迷妄の識なり、前に解するが如し。
 ⑨ 熾熾とは、閃爍の貌、生滅の絶えざるをいふ。
 ⑩ 道の一絡索とは、凡夫の熟處を指す。
 ⑪ 不好等は三番に依つて然り。
 ⑫ 道の一等は、第三段、悟後の境界を叙す。
 ⑬ 菩提とは梵語、覺と譯す、眞如の理等を照す靈覺の智慧なり。涅槃とは、圓寂、寂靜、滅度等と譯す、これ常住不變

の理なり、何れも上に解す、眞如とは、眞實にして虚妄を離れ、如常にて不生滅常住なるをいふ、これ宇宙の靈體に強ひて附したる名稱なり。佛性とは、佛陀の靈性にして吾人の本來具有せる本心、覺性にして、眞如、法性等と其體を同じうす。宗鏡錄十一、圓覺經疏一、大乘義章一等に出づ。
 ⑭ 現前等は、方處の指すべき無きが故に。
 ⑮ 古徳等は、高城和尚の歌なり、諸祖偈頌上、永明註心賦二。
 ⑯ 六道の神光明了なり、この道理を會得せる人は、内に塵垢なきが故に眼に塵する作用、物として照さざるなし。
 ⑰ 迷るとは、遺餘なきをいふ。
 ⑱ 靈妙の心性、妙用を發するも亦此くの如し。
 ⑲ 未だ等、第四段、本參を授けて

や。州云く、「無」と、只だ這の一字、爾に儘す甚麼の伎倆がある。請ふ安排して看よ、請ふ計較して看よ、思量し計較し安排し、以て頓放すべき處なうして只だ肚裏悶し、心頭煩惱することを覺得せん時、正に是れ好底の時節なり、第八識相次で行せざらん。此くの如きことを覺得せん時、放却せんことを要するも莫れ、只だ這の無の字の上に就いて提撕せよ、提撕し來り提撕し去らば、生處は自ら熟し、熱處は自ら生るべきなり。近年以來叢林の中に一種の邪説を唱へて宗師と爲る者あり、學者に謂つて曰く、「但だ只管 靜を守れ」と。守る者は是れ何物ぞ、靜なる者は何人なることを知らず、却つて靜底は是れ基本なりと言ふ。却つて悟ある底を信せずして、悟底は是れ枝葉なりと謂ふ。更に僧の仰山に問うて曰く、「今時の人還つて悟を假るや也た無や。」仰山曰く、「悟は則ち無きにはあらず、爭奈せん、第二頭に落在す」といふことを引く、癡人面前に夢を説くことを得ず、便ち實法の會を作して悟は是れ第二頭に落つと謂ふ。殊に知らず、滄山自ら學者を警覺するの言あることを。直に是れ痛切なり、曰く、「至理を研窮して悟を以て則とせよ」と。此の語又甚麼の處

- ① 一字とは、無の一字なり。
- ② 你に儘すとは、儘は盡と同じ、任なり、意は安排せんと欲せば、你、安排して看よ、你に任す、畢竟、安排することを得ずとなり。
- ③ 頓放は今置おくべき處なきなり。
- ④ 煩惱とは、今は普通にいふ所の煩悶のことなり。
- ⑤ 此の如きとは、肚裏悶を指す。
- ⑥ 第五段、邪解を擧げて破斥す。
- ⑦ 此の靜は是れ賊將なり。守る者とは之に使はるるなり。これ賊を認めて子となす、此れは賊を認めて主となすなり。
- ⑧ 悟は是れ殺賊者、枝葉とは靜底にて是れ基本故に。
- ⑨ 僧等、此の問答は、聯燈、會元、傳燈には載せず、禪林類聚五に之を載す、萬松老人の從容錄四。

に向つてか著かん。滄山、後人を疑誤して第二頭に落在せしめんことを要すべからざるなり。曹閣使も亦心を此の事に留む、其の邪師の輩に誤らるゝことを被らんことを恐れて、比に亦此くの如く書して切切怛怛として寫して與ふ。此の公は聰明も識見も、皆大いに人に過ぐる處あれば、決して錯つて方便の語を認めて實法の會を作すに到らじ。但だ某、未だ之れと目撃することを得ざれば、私に憂へ過ぎて計るのみ。老居士も亦之れと是れ道友なることを聞きて、筆に因りて覺えず葛藤す。無事相見せん時に試みに渠に問うて書を取りて一看せよ。方に知らん、妙喜が相期するとは、眼底にあらず、彼此氣義相投じ、又勢利の交に非ざることを。一紙を寫し了り、紙盡くれば又一紙を添ふ、更に形迹を事とするに暇あらず、此の書も亦是くの如し。前書に是れ箇の中の人なるに託す。故に曰く、「切に老老大大にして甚の來由をか著けんといふべからず、若し此くの如くならば則ち好事面前に在れども定めて放過すべきなり」と。寫す時卒易なるに似たりと雖も、然も亦機感相投じて、亦覺えず紙上に書在す。公の妙喜を信得及して、便ち把りて事と做すことを荷ふてなり。

- ① 仰山等、悟了して之を見れば、元來悟といふ、早く是れ功勳邊に落つ、然らざる時は皆是れ邪解なり。大品般若十九、不轉品に云云。
- ② 緇林實訓、滄山警策文鏡。
- ③ 至理等は、警策の銘の詞なり。緇門警訓に亦之を載す。
- ④ 第六段、曹閣使を誡むるの事を引く、これ強く榮侍郎を諫めんが爲に、下の文の張本となす、即ち他に對して言ひ難き事なれば書を以て寫與す、曹閣使は曹功顯なり、紹興二十七年閣使となる。
- ⑤ 私には心中の煩悶を憂といふ、過計は過失計度なり、意は未だ顔を承けず、恐らくは過つて計度せん、故に豫め之を告知せしむ。
- ⑥ 老居士とは榮侍郎なり。
- ⑦ 筆等とは、曹閣使に與ふ書をいふ。

日用應縁の處、便ち此箇の法門を恢張して、以て聖主の賢を求めて天下を安せんとするの意に報せば、眞に其の知る所に負かざるなり。願くは種種堪忍して始終只今日の如くに做し將ち去らば、佛法と世法と打して一片と作るべきなり。且耕し且く戰ふて、久久にして純熟せば、一舉にして而も之れを兩得せん。豈に腰に十萬貫を纏ふて鶴に騎りて揚州に上るに非ずや。

又

鐘鳴り漏盡くるの譏を示諭せらる。君上の爲に誠を盡し、下百姓を安んぜば、自ら絃を聞いて音を賞する者あらん。願くは公、凡事堅忍して逆順の境に當つて、政に好し力を著くるに、所謂此の深心を將つて塵刹に奉ず、是を

- ① 妙喜已下形迹に至るまで、曹閣使に答ふる書の意なり。
- ② 眼底等は、上の目撃に應ず、目前といふが如し、意は相見不相見を論ぜざるなり、俱に箇中の入故に氣義相投するなり。氣義とは氣志義交なり。
- ③ 形迹とは、外を飾るの謂なり、即ち貴官に呈する文書の體式をいふ、意は覆藏なく誠實を述ぶるなり。
- ④ 此の書等は彼此氣相投なり。
- ⑤ 前書、第七段、榮侍郎の深信を見て發し難きを發せしむ、前書とは榮侍郎の問書を指す、託すは榮侍郎自ら委託するなり。
- ⑥ 切に已下は諫言の詞なり。意は仕官即佛法、佛法即仕官なり。來由とは、大道を修行することなりと。考ふべし。
- ⑦ 寫す等、上は諫の詞、下は上書を寫す時の事なことをわる。
- ⑧ 然も、亦とは曹閣使に亦す、意は公も亦機應相投す故に此の如く言ふなりと。
- ⑨ 把るに足らずと雖も、然も把つて事をなすは則ち公の恩を荷ふなりと、荷とは感荷なり。
- ⑩ 日用等、第八段、仕官中に佛法を成すべきを示す。日用とは世法をいふ、應縁は政事に務むるなり。
- ⑪ 其とは天子を指す、意は天子その才賢を知りて擧げて仕官せしむ、而るに置仕するときは却つて天子に負くことなり。
- ⑫ 願くは種種とは、一切の事なり、年老いての仕官、想ふに煩勞なり。
- ⑬ 且耕等は、佛法を學ぶを喻ふ、又世法なり。
- ⑭ 一舉とは、凡そ事を成すを擧といふ、戰國策三、史記七十。兩得とは、佛法、世法自在無碍なるなり。

則ち名けて國恩を報すとす。平昔、學道は只だ逆順界中に於て受用せんことを要す。逆順現前するときに苦惱を生ぜば、大いに似たり、平昔、曾て箇中に向つて用心せざるに。祖師曰く、「境縁には好醜なし、好醜は心より起る、心若し強ひて名けずんば、妄情何れより起らん、妄情既に起らずんば、眞心、徧知に任す」と。請ふ逆順の境中に於て常に是の觀を作さば、久々にして自ら苦惱を生ぜじ、苦惱既に生ぜずんば、則ち以て魔王を驅つて護法善神と作すべし。此れより前老人大大として甚の來由をか著けんといふの説、言猶ほ耳に在り豈に之れを忘れんや。佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。以るに居士、前十餘載、閑なりしは、自ら閑

- ① 豈云々は前に出づ。意は佛法世法も萬事萬足なり。上るとは、一本には下に作る。
- ② 榮侍郎に答ふる第二書、大意は官途に在つて逆順閑忘一如の境界を鍛錬せんことを示す。
- ③ 第一段、老大を以て退屈すべからざることを勸む。鐘鳴り漏盡くは、魏志列傳二十六、田豫答へて曰く、「年七十を過ぎて以て位に居るは、譬へば鐘鳴り漏盡きて而も夜行して休めざるが如し」と、遂に疾と稱して中大大夫を拜し、年八十二歳にして薨す、即ち天曉けて猶ほ夜行するが如し。譏は人の老年にして致さずと譏るなり。
- ④ 自ら等、意は譏る者あれば却つて之を賞する者あり。列子に云く、「伯牙善く琴を鼓す云云。」
- ⑤ 政には、世法と佛法と一處に於て、政に好し力を著くるに。
- ⑥ 第二段、逆順の境を轉すべきを勸む。
- ⑦ 逆の上に「而るに」を加へ見よ。
- ⑧ 箇中とは、佛法を指す。
- ⑨ 祖師は四祖道信禪師。
- ⑩ 境即ち縁なり、六塵の影なり。好醜とは、逆順なり、傳燈四、牛頭融章。
- ⑪ 心とは妄心なり、分別なり、強ひて名くとは、逆順好醜なり。
- ⑫ 一心法界の故に。
- ⑬ 眞心徧知は、前の眼に應ずる時千日の如きの類に應ず、維摩九。意は佛の十號中の徧知の義に合す、故に引く。
- ⑭ 魔王とは仕官して政を乗りて而して置仕せざることを譏る者あらば、但だ此くの如く工夫せよ、魔却つて善神と作さんと。

の時節あり、今日 仕權手に在り、便ち忙底の時節あるなり。當に念ふべし、閑の時は是れ誰か閑なるや。忙の時は是れ誰か忙なるや。須らく信すべし、忙の時に却つて閑の時の道理あり、閑の時却つて忙の時の道理あることを。政に忙中に在りて當に 主上の公を起すの意を體して頃刻も暫忘るべからざるべし。自ら警し自ら察せよ、何を以てか之れを報いんと。若し常に是の念を作さば、則ち鑊湯鐵炭、刀山劍樹の上にも亦須らく 向前することを著べし。況んや目前些少の逆順の境界をや。公と此の道相契ふを以ての故に、情を留めずして、淨盡し吐露す。

黃門司に答ふ 節夫

書并に許多の葛藤を收む、意はざりき、便

- ③ 第三段、閑と忙と一如なるを示す。
- ④ 言等は、左傳杜預注八、文公七年の語なり。
- ⑤ 仕權は、仕官權柄なり。
- ⑥ 時時刻刻に佛性現するなり。
- ⑦ 道理とは佛性をいふなり、此の如く之を推忙の時却つて閑の道理あり、佛性は閑と忙との中に於て異なく別なし。
- ⑧ 第四段、忠を忘れざることを誠勵す。
- ⑨ 主上とは事物紀原一、冠註に之を引けり。
- ⑩ 體とは天子の心を以て、我が心となすこと。
- ⑪ 何を以て等とは、自ら省察の様子なり。
- ⑫ 向前は對向進前なり。
- ⑬ 黃門司は事物紀原五に云云、或は云く、黃姓にして門司は官名なりと。節夫は、妙德居士と號す、大惠の嗣なり。會

- 元二十、居士分燈錄下。宋史には傳なし、冠註に引けり。此書は、師六十九歳の時の作なり。
- ① 第一段、拈弄諸富なることを贊す。許多の葛藤とは、頌古拈提の類なり。
- ② 但等、第二段、引證。
- ③ 本分とは、此にては君に奉じ職を掌るをいふ、これ官人の本分なり。然るに自らの本分に依らずして拈弄參學甚だ無用なり。若し既に但此くの如くなれば、他の譏るに一任すと。
- ④ 他家とは大惠自らを指すなり、道人とは理に通達せる人なり。傳燈二十九、誌公の十二時の頌中の語なり。
- ⑤ 是れ曾ては、第三段、悟は情解卜度を容れざるを論す。
- ⑥ 響を聽くとは、推量卜度をいふ。

ち此くの如く拈弄することを解せんとは。直に是れ弄し得來つて活潑潑地なり、眞に是れ自ら證し自ら得するものなり、喜ぶべし喜ぶべし。但だ只だ此くの如くならば從 教人の這の官人 本分に依らずして亂説亂道すと道ふことを、他家に自ら通人の愛する有らん。是れ曾て證し曾て悟る者は方に知るを除く。若し是れ 響を聽くの流は他の 龜を鑽り瓦を打して 更に如來禪と祖師禪とを批判し得て、好し 儘に妙喜が拄杖を喫し得るに一任す。且く道へ是れ 伊を賞するか伊を罰するか、諸方の更に疑ふこと三十年するに一任す。

孫知縣に答ふ

修する所の金剛經を以て相示さるることを蒙る、幸に隨喜一徧することを得たり。近世の士大夫、肯て左右の心を内典に留むるが如くなる者は實に希有なりと爲す。意趣を得ずんば則ち是くの如く信得及すること能はじ、看經の眼を具せずんば、則ち經中 深妙の義を窺ひ測ること能はず、眞に火中の蓮なり、詳かに味ふこと之れを久しうして 疑無きこと能はざるのみ。左右諸の聖師の翻譯、眞を失して而も本眞を汨亂し、文句増減し

國譯大慈普覺禪師書 下

- ① 龜を鑽りとは莊子八外物篇にあり、瓦を打すとは、潛確類書八十二、巫占に瓦を龜に代ふと。此等の輩は計較卜度するに一任す。
- ② 第四段、再び拈弄葛藤を勸絶す。意は葛藤を拈弄するは猶ほ可なり、若し更に批判し得て恰好なるも飽まで大惠の拄杖を喫するに任すと。好しとは恰好の謂なり、儘は任なり、喫は黃門司に乘る、恣に多く喫するをいふ。
- ③ 伊とは黃門司を指す。
- ④ 孫は宋史に傳なし。此書は、師七十歳の時の作。大意は小知小見もて譯經の諸師を批判するを戒む。
- ⑤ 第一段、讚歎して縱奪す、修とは金剛經の註を修するなり。
- ⑥ 上の希有となすの語に應ず。維摩經、佛道品。

て佛意に違背すと証る。又云く、「始め持誦せしより、即ち其の非を悟り定本を求めて、舛差を是正せんことを欲すれども、而も習偽已に久しうして、雷同一律せり。京師の藏本を得るに暨びて始めて據依するところあり。復た天親、無著の論頌を考釋するに、其の義昭合す。遂に泮然として疑なしといふ。又長水孤山の二師は皆句に依りて義に違すといふことを以てす。識らず左右、敢て是くの如く批判せば、則ち定めて嘗て六朝に譯する所の梵本を見、譯師の翻譯の錯謬を盡し得て、方に始めて泮然して疑なけん。既に梵本なし、便ち臆見を以て聖意を刊削せば、則ち且未だ因を招き果を帯びて、聖教を毀謗して無間獄に墮せんことを論せざるなり。恐らくは識者之れを見て却つ

②第二段、總じて破す、下に三節あり、初に孫知縣の語を擧ぐ。
③舛は差なり、錯亂なり、舛差は過失なり、錯なり。
④習偽とは久しく偽謬を習ふ。
⑤雷同とは、禮記曲禮上の註に云く、「雷の聲を發する、物として同時に應ぜざる者なし云云」。一律とは、音曲の亂同なるに比す。
⑥京師とは、公羊傳に云く、「天子の居なり、京は大なり、師は衆なり、天子の居は必ず衆大の辭を以て之を言ふ」。
⑦天親、無著は名義集一、西域記五を引く、會元二に出づ。無著論は隋の達磨笈多の譯する所、十八段の疑を立つ。天親論は元魏の菩提流支の譯する所、二十七の疑を立つ。
⑧略合とは事相同じき者ないふ。

①長水は諱は子璿、普燈三、通載十八、佛祖統紀三十等に出づ。孤山は智圓法師なり、佛祖統紀十に出づ、人天寶鑑に出づ。
②識等、第二節、假に詞を設けて暫く許す。
③六朝とは、晉、宋、齊、梁、魏、隋を謂ふにあらず、六代の謂にして、一に後秦の羅什、二に後魏の菩提流支、三に陳朝の眞諦、四に隋の笈多、五に唐初の玄奘、六に大周の義淨なり。今傳ふる所は羅什三藏、弘始四年に長安阜堂寺にて譯する所のものなり。
④既に等、第三節、正しく實を論じて大集破す。
⑤未だ等は、謗法の因、墮獄の果なり。
⑥還等は、法華經普門品に出づ。
⑦古人等、第三段、斥破する所の意を叙す。

て左右の諸師の過を檢點するが如くにして、還つて本人に著すること有らんことを、古人言へることあり、「交淺うして言深き者は、尤を招ぐの道なり」と。某左右とは、素より平生に昧し、左右、此の經を以て印證を求めて萬世に流布して、衆生界中に於て佛種子を種えんと欲す。此れは是れ第一等の好事なり。而も又某が、箇の中の人たるを以て、箇の中の消息を以てして、形器の外に相期す、故に敢て上稟せずんばあらず。昔、清涼國師、華嚴の疏を造る時に、譯師の訛舛を正さんと欲すれども、而も梵本を得ざれば、但た之れを經の尾に書するのみ。佛不思議法品の中に所謂一切の佛に無邊際的身あり、色相清淨にして普く諸趣に入れども而も染着なしといふが如き、清涼

①素より等とは、未だ相見せざれば其識見の程度を知らずとの意。
②箇の中の人とは、佛法中の人の意なり。
③形器等とは、形骸を忘れて會見を期せんとなり、即ち僧、俗の形を忘れて印證を求む、實に道を以て交はると謂つべし。
④第四段、古人の猥りに改めざるを引く。清涼の傳は宋僧傳五、編年通論十八、佛祖統紀四十二等に出づ。清涼は澄觀、字は大休、唐の玄宗開元二十六年(日本聖武天皇天平十年)に生る、幼にして出家し、沙彌の時に已に九經十四論を講ず、其非凡推して知るべし。後に律、三論、涅槃、天台、禪宗等の奥義を究め、華嚴は賢首門下の異義者たる法旣に就いて修習せしも、遠く賢首

の正統を傳へて華嚴の行門を大成して功あり。貞元十一年般若三藏、勅を奉じて四十華嚴を譯するや、圓照等と共に潤文證義の任に當る、玄宗の開成四年に寂す、壽百二歳、身の長け九尺四寸なりき、傳法の弟子一百餘人、著書數百卷あり。
⑤華嚴の疏とは、八十華嚴の疏にして、之れ宗義復興の爲に撰述せしものにして、其年代は、宋高僧傳に據れば、唐第十代徳宗の興元元年正月に筆を下し貞元三年十二月に其功を畢へ、二十卷を成す、今之を大疏といふ、其後弟子の爲に再び筆を執り、大疏を解釋す、演義鈔四十卷是れなり、今はその大疏と演義鈔を經文に會し、更に科文を加へて一百卷となりて盛に世に流布せり。

但だ云ふ、「佛不思議法品の上卷 第三葉の第十行の一切諸佛とは舊諸の字を脱す」と、其餘の經本の脱落も皆之れを經の尾に注す。清涼も亦聖師なり、添入し及び減削すること能はざるには非ず、止だ敢て之れを經の尾に書することは法を識る者は懼るればなり。又經中に大瑠璃寶といふあり、清涼曰く、「恐らくは是れ 瑠璃ならん、舊本錯りて寫す」といふて亦敢て改めず、亦只だ此くの如く之を經の尾に注するのみ。六朝の翻譯の諸師は皆淺識の士に非ず、翻譯の場には 譯語の者あり、譯義の者あり、潤文の者あり、梵語を證する者あり、正義の者あり、唐梵相校する者あり。而るを左右尚は以て錯つて聖意を譯すと爲す、左右既に梵本を得ず、便ち妄りに刊削を加へ、却つ

①佛不等は、八十華嚴經の品名。
②但だ云等の文は今の本には削除す、惜むべし。
③十行、古は十七字を以て一行とすと、孤山の閑居編に見ゆ。
④清涼等とは、大惠の批評なり。
⑤經中とは、華嚴經六十六、入法界品無厭足本章。
⑥瑠璃は具には瑠璃耶、略して瑠璃といふ、此に不遠山、又は遠山寶と名く、寶珠の名なり、謂く、西域に山あり、波羅奈城を去ること遠からず、此寶は彼れより産出す、故に以て名く。其寶は青色にして鑿徹し光あり、凡ての物之れに近づけば皆同一色となる、玄應音義二十三、等に出づ。
⑦第五段、翻譯眞を失するてふ語を斥す。以下に諸役を列ねるは、證據の正しきことを言はんが爲なり。

⑧譯語は梵字を轉じて漢字となす、譯義は梵語の表はす若しくは含蓄せる義理を漢語に顯はす役なり。潤文とは、文章を潤色す、即ち語を譯し義を移したる後に、字句を添削増減して文章を潤飾す、梵語を其儘に譯すれば彼岸到となる故に、之を潤して到彼岸となるの類なりと。
⑨梵語を證すとは、梵漢を對照して、文字を加減して譯語に誤なきことを證する役なり。證義は義を譯して後に再び仔細に其義を正すなり。
⑩唐本と梵本とを相校合するなり。
⑪此くの如きは胡亂改作なり。
⑫第六段、長水を難するを斥す。
⑬其とは長水を指す。長水の子瑠なり、趙宋の世に出て、華嚴を興せし一人なり、仁宗の天聖八年に寂す。講人とは、

て後世の人の誦信せんことを要するは、亦難からずや。長水は句に依りて義に違すといふことを論するが如き、梵本の證なくんば如何しか便ち決定して、其れを以て非なりと爲んや。此の公は是れ講人なりと雖も他の講人と同じからず。嘗て瑠瑯の 廣照禪師に參す、因に瑠瑯に 首楞嚴の中の 富樓那、佛に問ふ、「清淨本然ならば云何が忽ちに山河大地を生ずるや」といふ義を 請益す、瑠瑯遂に聲を 抗げて云く、「清淨 本然云何が忽ちに山河大地を生ず」と、長水言下に於て大悟す。後に方に 襟を披いて自ら 座主と稱す。蓋し座主は 多くは是れ行を尋ね墨を數ふ。左右の所謂句に依つて義に依らざるものなり。長水は 見識なきに非ず、亦行を尋ね墨を數ふる者に非ず。具足相を以て

經論を講解する人の謂なり
①廣照は、廣燈十八、續燈四、會元十二等に出づ。
②首楞嚴とは、大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の略稱なり、唐の般若密帝の譯する所、十卷あり、今の文は四卷に出づ。
③富樓那は略稱、具さには富樓那彌多羅尼子(ぶらなるなまーいとらーやにーぶとら)といふ、滿慈子、滿願子等と譯す、此人は家兄に疎せられて商人となる、而も能く佛に供養し、精舎を建立し復たよく慈善行を爲す、後に釋尊に歸依して十大弟子の隨一たり、其の説法の巧妙なること衆中第一位にありしといふ。
④請益とは、法を問ふを謂ふ、他に辯ぜり。
⑤抗は激抗なり、これ機關なり。
⑥襟を披くとは、披は開くにて、

蘊奥を遺す無きを謂ふ。文選十三、宋玉賦、圓悟心要、中峰錄五に出づ。
⑦座主とは禪家より教家を稱する語なり、釋氏要覽上に出づ。もと學識高き僧を名けしが、本朝にて一の僧官となりし。
⑧多くは等とは、隋の道生、唐の義方等の名相に滯るを謂する故に多といふ。行を等は傳燈二十九、實誌和尚の大乗讚第九首に云く、「口内に經を誦すること千卷、體上に經を問ふに識らず、佛法の圓通を解せず、徒らに勞して行を尋ね、墨を數ふ」と、以て解すべし。
⑨見識とは、品字箋に曰く、目に見る所あり、而るに心に分ちあるをいふと。
⑩具足相等とは、第七段、孫知縣の異解を破す、下三節あり、初に大意を破す、此は但だ文字を増減するを詞す、佛意に

せざるが故に、阿耨菩提を得たまふと、經文の大段分明なり。此の文至淺至近なり、自ら是れ左右奇を求むること太だ過ぎて、異解を立てて人の己に従はんことを求めんと要するのみ。

① 左右、無著の論を引いて云く、「法身を以て如來を見たてまつるべし、相具足を以てするに非ざるが故に」と。若し爾らば如來は相具足を以て見たてまつるべからずと雖も、相具足を因と爲して阿耨菩提を得べしと、此の著を離れしめんが爲の故に。經に云く、「須菩提よ意に於て云何ん、如來は相成就を以て阿耨菩提を得たまふべきや、須菩提よ是の念を作すこと莫れ」といふ等とは、此の義は、相具足の體は菩提に非ず、亦相具足を以て因となすにあらざることを明す。相は是れ色の自性なるを以ての故に

違するが故に破すると謂ふに
 ならず。但だ大段分明といふ
 て其義を責めず若し佛意を害
 せば、豈に此れに止めんや。
 畢竟、羅什所譯の經文、無著
 の論文等各其理あり、猥りに
 文字を増減すること莫れとな
 り。

② 阿耨菩提は、阿耨多羅三藐三
 菩提の略なり、此に無上正等
 覺、或は無上正徧智と譯す。
 これ佛陀の智徳を稱する一名
 號にして、佛は絶待智者にし
 て、其の智以上の大なるもの
 無きが故に、無上といひ、萬
 法の一一を了悟せざるなきが
 故に、正徧智といふ。具足相
 とは、佛の具足したまふ三十
 二相をいふ、通じては清淨な
 る佛境界をも攝む。今の文意
 は蓋し長水は、如來は相好を
 具足する故に菩提を得たまひ
 しか、相を具することを認

識せざるが故に得たまひしと
 かの有無見を離れて、正直に
 如來を見たてまつつて居ると
 なり。

③ 此の文等は、大惠の批判なり。
 ④ 左右無等とは、第二節、錯つ
 て無著論を解すること破
 す、此論は北藏本は三卷、麗
 本は二卷なり、是れ經文を挾
 會せざるが故なり。

⑤ 法身等とは、佛の内證なる法
 身の理を通じて如來を見よと
 なり、凡夫は諸法を有なりと
 認むる故に佛に對しても、但
 だ佛の外相なる三十二相を見
 て眞の佛を見たりと爲す、故
 に今之を非とするなり。

⑥ 相具足、色相、音聲は是れ外
 塵なり、之を以て佛の覺體を
 見るべからざるが故なり。無
 著論の偈に曰く、「法を以て佛
 を見るべし、導師(佛)は法を
 身となす」と、これ分別を離れ

といふ。此の論も大段分明なり。自ら是れ左
 右錯りて見、錯りて解するのみ。色は是れ相
 の緣起、相は是れ法界の緣起なり。梁の昭明
 太子、「是の念を作す莫れ、如來は具足相を以て
 せざるが故に、阿耨菩提を得」と謂へることを、
 ⑦ 三十二分の中に此の分を以て無斷無滅分とな
 すは、須菩提の具足相を以てせずといはば、則
 ち緣起滅せんといふことを恐れてなり。蓋し須
 菩提は初め母胎に在りて即ち空寂を知り、多く
 は緣起の相に住せざればなり。後に功德施菩
 薩の論の末後を引けり。若し相成就是れ眞
 の實有ならば、此の相滅する時即ち名けて斷と
 爲さん、何を以ての故に、生を以ての故に斷あ
 ればなり。又人の會せざらんことを怕れて、
 又云く、「何を以ての故に一切法は是れ無生の

て唯だ自ら證知すべきを説き
 しなり。

⑧ 若し等は凡夫第二の疑なり、
 爾らば眞の如來は云々と。
 ⑨ 此の着とは、相具足を因と爲
 すを指す。

⑩ 此の義とは、前上の法身を以
 て如來を見るの文を解釋す、
 體とは相の體なり、此は差別
 門に約するが故に相の體と菩
 提の覺性と別となす、若し圓
 融門より云はば無差別なり。

⑪ 此論等、理を以て推すに、論
 は相は色の自性なりと明し
 て、別に相を排除して如來の
 覺體を得といふにあらず、而
 るに孫知縣は以て相を拂ふと
 なし、誤つて論は相と覺體と
 は別なりとなすと旨へりとの
 意なり。これ昭明太子の説を
 引くの本とす。

⑫ 色は等、色とは凡夫所見の色
 法をいふ。相の緣起とは事法

界なり、法界とは理法界なり、
 (實は理事と事とを含む)謂
 く、法性の理が活動せるを現
 象差別の事法界といふ、故に
 事の外に理なく理の外に事な
 く、理事本と圓融無碍なり、
 故に色は是れ等といふ。緣起
 とは、隨緣生起の意なり。

⑬ 梁書八、列傳二に云く、昭明
 太子統字は德施、高祖の長子
 なり云々と、著す所の書、文
 集二十卷、文選三十卷等多し。

⑭ 金剛般若經の内容三十二分に
 章段を分てり、其中此の第二
 十七分をとるなり。比功德施
 論に、菩薩は法の斷するを見
 ること無しと云へり、昭明は
 此の文に依つて無斷と云ひし
 なり。

⑮ 須の上に「佛」を加へて見よ。
 ⑯ 後に引けりとは、孫知縣の
 書中の後方に引用せるをい
 ふ。具には金剛般若波羅蜜經

性なり、所以に斷常の二邊を遠離す、二邊を遠離するは是れ法界の相なり」と。性と説かずして相と言ふことは、謂く、「法界は是れ性の緣起なるが故なり、相は是れ法界の緣起なるが故に性と説かずして相と言ふ。」梁の昭明の所謂無斷無滅といふは是れなり。此の段も更に分明なれども、又是れ左右、奇を求むること太だ過ぎて強ひて節目を生ずるのみ。若し金剛經以て刊削すべくんば、則ち一大藏教凡そ看ることある者は、各々臆解に隨つて都て刊削すべきなり。韓退之が論語の中の「畫の字を指して畫の字と爲し、舊本差錯すと謂ふが如き、退之が見識を以てせば便ち改めたるべし。而るに只だ此くの如く論じて書中に在くとは何ぞや、亦是れ法を識る者は懼るゝのみ。圭峯の密禪師、

破執着不壞假名論といふ、唐の地婆訶羅の譯、二卷あり。相成就とは、法界の相成就なり。眞の實有とは、凡夫の實有に同じて言ふ、法界の徳相は斷不斷を離る、若し凡夫所執の實有の如きを、相成就といはば、此相滅する時は名けて斷となさん、然れども法界緣起の法は本と生滅を離る。生を等、凡夫の認むる實有は生あるが故に、又滅あるなり。又人のより何を以ての故にまでは論文にあらず、論を發揮せんが爲に大惠之を加ふるなり。

て、一と一切と互に鑿融無碍、もと思慮の境にあらず、何の生滅と説き斷常と説かんや、是れ法界の眞相なり。性と説く等とは大惠が論の法界相の相の字を通譯するなり、性とは法性の理なり、相とは法界緣起の事相即ち宇宙萬有をいふ、法性の全體が隨緣生起して萬有となり、萬有の全體が法性にして、理事無碍なれば、性といふも相といふも俱に得たり、されど性と説かば、人の事相の外に別に理性ありと誤認せんことを恐れて相といひしなりと。既に一切法は事理無碍にして、生なく滅もなければ昭明が無斷無滅といひし所以なり。強ひて等、孫知縣の畫なき故に節目を生ずるの意を知る能はざるも、墨を以て之を推すに孫が功徳論を解して、相

圓覺經の疏鈔を造る、密は圓覺に於て證悟の處ありて、方に敢て筆を下す。圓覺經の中の一一切衆生皆圓覺を證すといふを以て、圭峯、證を改めて具と爲し、譯者の訛なりと謂へり。而も梵本を見ざれば亦只だ此くの如くに論じて、疏中に在いて敢て便ち經を改め正さず。後來渤海の眞淨和尚、皆證論を撰す、論の内に痛く圭峯を罵りて、之れを破凡夫臊臭の漢と謂ふ。若し一切衆生皆圓覺を具して而して證せずんば、畜生は永く畜生と作り、餓鬼は永く餓鬼と作らん。盡十方世界、都盧て是れ箇の無孔の鐵鎚にして、更に一人の眞を發して元に歸する無し、凡夫も亦解脱を求むることを須ひざるべし。何を以ての故に、一切の衆生は皆已に圓覺を具して亦證を求むることを須ひざるが故

を拂ふの義となす。然るに此論は相を拂除せず、これ孫の謬なり。第八段、重ねて古人を引いて、獨りに經文を削るべからざることを論ず。臆解は臆斷の義解なり。韓退之、唐書列傳第一に云く、「韓愈字は退之、荊州南陽の人なり、卒して禮部尙書を贈られ、諡して文と曰ふ云云」。論語等とは、公治長篇に出づ。此事は論語筆海に論ぜり。畫の字は誤、一に畫に作る。畫の字は誤、一に畫に作るを正とす。書中とは論語筆海を指す。圓覺經第四、懶勤章。疏に云く、「譯經の訛なり、應に諸の衆生皆圓覺を有りと證すと云ふべし。これ圭峯は決然として之を改むるにあら

す、文字の足らざるをいふのみ、然るに今の文に直截に證を改め等といふ、而して復た有を具とするは具有と熟して其義同じきが故のみ。渤海の名は諸傳に出づるも未だ其所在を詳にせず、按ずるに石門山の谿の名か、傳燈に洪州渤海といへり、然らば此は南昌府にあり、江西名勝志一。眞淨文禪師は僧寶傳二十三に出づ、又續燈十三。皆證論は今流傳せず。痛く等は、僧寶傳の眞淨傳に出づ、これ舒王、即ち王荆公の間に答へしなり。破等は、雲門録中に云く、此れは方言なりと、何孟春、餘冬序錄四十八に雲漢志を引いて云く、「醜惡、之を濼賴と謂ふ」と、破の音は濼なり、然らば此れは濼濼瀨のいひなり、凡夫とは生死海に迷濼流

に。左右、京師の藏經本を以て是と爲して、遂に京本を以て據となす。京師の藏本の若きは外州府より納め入る。徑山の兩藏經の如きも、皆是れ朝廷全盛の時に賜はり到らしむ。亦是れ外州府の經生の寫す所なり。萬一錯あるとも又卻つて如何んが改め正さんや。左右若し人我無くんば、定す妙喜が言を以て至誠なりとなして、必ず古今の一大錯の上に泥在せざれ。若し己見を執して是となして、決して改め削りて一切の人の唾罵することを要せんと欲せば、版に刊りて印行するに一任す、妙喜も亦只だ隨喜讚歎することを得んのみ。公、既に得々として人をして經を以て來りて印可を求めしむ、相識にあらすと雖も、法を以て親となすが故に、覺えず切々怛々として

轉するものを凡夫といふ、凡は庸なり、輕なり、輕賤の稱なり。膝は犬家の膏臭きなり。都盧は遊仙窟の註に云く、「大空の義」と、即ち全體の義なり、放光般若七に出づ。
 ④ 無孔の鐵鎚とは、用ひる處なきをいふ。
 ⑤ 一人等とは、楞嚴經九。
 ⑥ 第九段、孫知縣の但だ京師の藏本に據るを云ふ。
 ⑦ 外州府とは京師の外を指していふ。或は高麗、印度などを指すは鑿說なり。
 ⑧ 兩藏經とは、叢林東西の兩藏經なり。百丈清規下の知識に云ふ。
 ⑨ 全盛とは唐詩紀二十四に。
 ⑩ 經生とは、本邦に云ふ、筆耕の類なり。品字箋に云く、「生とは人の如し、俗に老人を老生、壯丁を壯生と言ふが如し」。元史列傳四十七に、「又唯

だ佛經を寫す、之を書生と謂ふ」と。
 ⑪ 第十段、他の取捨に任して許縱す、人我とは、實に人間なるものがあると認め、隨つて自己、おれが、心得て居るを人執とも我執とも、或は人我見などといふ、即ち五蘊が假りに和合して成れる人身の上に常一主宰の我なる者の實在せるが如くに思はば、自他を區別するをいふ。
 ⑫ 古今とは、古今の人をいふ、錯はやすりなり、摩なり、厲石なり。泥は滯なり。增韵に云く、執して通ぜざるなり。
 ⑬ 版に刊るは夢溪筆談十八、事物紀原七、揮塵餘話四。印行とは、普通には活字印行をいふ、此は板に鐫るをいふ。
 ⑭ 只だ等は、世間底の欣慕稱美の語をなし去るの意。
 ⑮ 得得は禪月詩集二十。

相觸忤す、公の至誠を見て所以に更に情を留めず。左右決して教乘を窮めて奥義に造らんと欲せば、當に一りの名行の講師を尋ねて一心一意に之れに參詳して、徹頭徹尾ならしめて、一等に是れ心を教綱に留むべし。若し無常迅速生死事大に己事未だ明めざれば、當に一心一意に一の自分の作家の能く人の生死の窠窟を破する者を尋ねて、伊が與に死工夫を著けて厩崖むべし。忽然として漆桶を打破せば、便ち是れ徹頭の處ならん。若し只だ是れ談柄を資けて、我れ博く群書を極めて通達せずといふこと無く、禪も我れ也た會せり、教も我れ也た會せり、又能く前輩の諸の譯主講師の不到の處を檢點し得たりと道ふて、我能我解を逞しうせんと要せば、則ち三教の聖人都て檢點す

① 相の字の上に「我れ元」を加へ見よ。
 ② 觸忤は碧巖四に出づ。忤は逆ふなり、戻るなり。
 ③ 第十一、一轉して生死事大を決了せんことを勸薦す。
 ④ 名行とは、名聲人に勝れ、行業の正しき師の意。梁僧傳の序。講師とは經論を講じ、學徒を提擲するをいふ。華嚴玄談一。
 ⑤ 教綱は教相の細目は且く措いて教門の大綱要旨に着眼せんことを教ふるなり。碧巖七八則の評に云云す。
 ⑥ 自分の作家とは、自己の自分を體得し法に自在を得て爲人度生する宗匠をいふ、作家とは作者の家の謂にして、衲僧家といふが如し。
 ⑦ 生死の窠窟とは、三界二十五有の迷界をいふ。
 ⑧ 死とは、痛切の辭なり、即ち

死は盡なり窮なり、身命を賤して努力工夫するをいふ。
 ⑨ 漆桶は前に出づ。
 ⑩ 第十二段、警策して結す。從容たる大篇此に到つて活機を以て活弄するなり。談柄は、晋書列傳十三、王衍傳に出づ。禪等とは、儒家の義は言ふに及ばず、禪も云ふなり。
 ⑪ 三教は、道の老子と儒の孔子と釋教となり。
 ⑫ 人の云云とは、上の印可を求むの語に應ず、而して其自ら言ふ所の辭を結歸す。
 ⑬ 放行とは、此は世間に流布すといふの義なり。
 ⑭ 張の傳は宋史列傳百四十八に出づ、三十八歳にして卒せり。萬姓統譜三十九。此書は師七十一歳の時の作。
 ⑮ 第一段、入道の用心を示す。
 ⑯ 方寸をして虛豁豁地とは、胸中に一物なく、知解情慮を絶

べし。亦必ずしも更に人の印可を求めて、然る後に放行せじ、如何ん如何ん。

張舍人狀元に答ふ 安國

左右、決して此の事を究竟せんと欲せば、但だ常に方寸をして虚豁地ならしめて、物來らば即ち應せよ、人の射を學んで外々にして的中が如くならん。見すや達磨、二祖に謂つて曰く、「汝但だ外諸縁を息め内心喘ぐこと無く、心牆壁の如くにして以て道に入るべし」といふことを、如今の人纒かに此の説を聞けば、便ち差排して頑然無知の處に向つて硬く自ら遏捺して、心牆壁の如くなることを得去らんと要す。祖師の所謂「錯り認めは何ぞ曾て方便を解せん」といふ者なり。巖頭云く、「纒かに恁麼なれば便ち不恁麼なり、是句も亦刻り

するをいふ。達磨等とは前に出づ。内心喘ぐとは疾息なり、是れ心の起滅するを、氣の出入する喘息の切なるに喩ふ。心牆等とは一物にも倚らず、虚豁地なるをいふ。頑然は痴なり、鈍なり。即ち諤つて方便の語を解して、強ひて心を遏捺し、頑然無知の處を以て虚豁地となさんとす。祖師とは六祖大師なり、六祖檀經、傳燈五、會元二。六祖旁出の信州知常禪師に示す六祖の偈に云く、「一法を見ざれば無の見を存す、大に浮雲の日面を遮るに似たり、一法を知らざれば空知を守る、遂に大虚に閃電を生ずるが如し、此の知見瞥然として興り、錯つて認めれば何ぞ曾て方便を解せん、汝當に一念自ら非を知り、

自己の靈光常に顯見すべし」と。錯り認むとは不見不知の處を認むるなり。纒かに等とは、今之を引き合に出すの意は、頑然無知の處に向つて心を牆壁の如くならしめんと欲す、これ此の恁麼の處なり。碎地等の語は前に出づ。これ大悟をいふ。此に因つて之を観るに、上に所謂是の句も亦刻る等は、是れ猶ほ方便にして未悟の時なり、されど既に言語の爲に轉ぜられず、況んや大悟の境界に到らんや。月を見る等は、傳燈三十、丹霞の翫珠吟の語なり、指と程とは並に方便に喩ふ、見道の後は入道の方便を用ひず、然らば張舍人が此位に到るといふにあらず、但だ公、此くの如くに看去れとなり。

非句も亦刻る」と。這箇便ち是れ外諸縁を息め、内心喘ぐこと無き底の様子なり。縦ひ未だ碎地に折し曝地に破することを得ずとも、亦語言に轉せらるゝことを被らじ。月を見て指を観ることを休めよ、家に歸つて程を問ふことを罷めよ。情識未だ破せずんば則ち心火熠熠地なり、正當恁麼の時但だ只だ所疑底の語頭を以て提撕せよ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや。」州云く、「無」といふが如き、只管提撕し舉覺せよ。左來も也た不是、右來も也た不是なり。又心を將つて悟を等つことを得ざれ、又舉起の處に向つて承當することを得ざれ、又玄妙の領畧を作すことを得ざれ、又有無の商量を作すことを得ざれ、又眞無の無の卜度を作すことを得ざれ、又無事甲裏に坐在することを得ざれ、又擊石火閃電光の處に向つて會することを得ざれ。直に心を用ふる所なく、心の之く所無きことを得ん時、空に落ちんことを怕るゝこと莫れ、這裏卻つて是れ好處なり。驀然として老鼠、牛角に入つて便ち倒斷することを見ん。此の事は難に非ず易に非ず、是れ夙に曾て般若の種智を種る得ること深うして、曾て無始曠大劫より來に於て眞の善知識に承事して、正知

情識、第二段、本參を授けて提撕せしむ。情の上に「然れども」を加へ見よ。心火等とは、凡夫の縁慮の心は念念生滅する故に智度論に蛇の舌に喩へり。左來右來して計較分別する莫れとの意。又玄妙は、意は若し深妙幽玄の解を作さば、便ち是れ鬼家の活計なり、此事元來青天白日の如きが故に。又有無は、趙州の無字の話をいふ。眞無等は、別に眞無なきが故に。無事甲裏とは前に出づ。擊石云々は頓機の處に無の字をみよ。老鼠は、俗語なり、前に出づ。此の事、第三段、得力の難易を論ず。靈識とは、第八識を指すと。

正見を熏習し得、靈識の中に在りて、境に觸れ縁に遇ふて、現行の處に於て、築著し、磕著して、萬人叢裏に在りて自家の父母を認得するが如くに相似たるを除く。恁麼の時に當つて、人に問ふことを著され、自然に求覓する底の心馳散せず。雲門云く、「説く時は即ち有、説かざる時は便ち無なるべからず、商量する時は便ち有、商量せざる時は便ち無なるべからず。」又自ら提起して云く、「且く道へ不商量の時、是れ箇の甚麼ぞ」と。又人の會せざらんことを怕れて又自ら云く、「更に是れ甚麼ぞ」と。近年以來禪に多塗あり、或は一問一答して、末後に一句を多くするを以て禪となす者あり。或は古人入道の因縁を以て頭を聚めて、商確して云く、「這裏は是れ虚なり、那裏は是れ

① 現行とは、顯現行起にて、今は現成受用なり。
 ② 萬人等とは、その獨露の處をいふ。意は夙慧あるが故に、本性を見得する難きにあらざるをいふ。
 ③ 人に等は、冷機自知の處。
 ④ 雲門等、下は易きにあらざることを論ず、雲門室中録に見ゆ。説く時等とは、口頭の禪にして眞實の禪にあらざるが故に、物物の上に受用する能はざる底を謂ふ。
 ⑤ 商量等の語は今世に流布する録中になし。
 ⑥ 更に等は、人謬つて云ふ、商量せざる時は便ち無と、故に云ふ、其無なる處、更に是れ甚麼ぞと看よと。
 ⑦ 近年等、第四段、邪師を破す。
 ⑧ 或は等は、是れ口頭禪なり、此れは問答を破するに非ず、問答其のものを以て禪とす、

故に之を訶するなり。
 ⑨ 古人等は、計較の禪をいふ、是れ亦人の爲に頌古を拈弄する等を訶するに非ず、今は明りに分別計較し、之を以て禪となすをいふ。
 ⑩ 商確とは、確は堅なり、正字通に權に通用して、相爭較するなりと註せり。俱舍麟記に云く、「商確は商量なり」と、今の意は勝負優劣を相争ふをいふ。
 ⑪ 是れ虚とは、方便をいふ、下の實に對す。
 ⑫ 代は代語にて之に二種あり、一は現前の衆に代る師家の垂語にして、衆に下語せしめて契はざる時は自ら衆に代つて語を下すを代語といひ、又は別語といふ、雲門録に其例多し、蓋し雲門に始まりしか。
 ⑬ 二は古人に代つて古則を擧揚して他の古人無語の處に代語

實なり、這語は玄なり、那語は妙といふて、或は代し、或は別するを禪とする者あり。或は眼見耳聞を以て和會して、三界唯心萬法唯識といふ上に在りて禪とする者あり。或は無言無説を以て黑山下の鬼窟裏に坐して、眉を閉ぢ眼を合して、之れを威音王那畔、父母未生の時の消息なりと謂ひ、亦之れを默而常照と謂つて禪となす者あり。此くの如き等の輩、妙悟せんことを求めずして悟を以て第二頭に落在すと爲し、悟を以て人を誑説すと爲し、悟を以て建立なりと爲す。自ら既に會つて悟らず、亦悟ある底を信せず。妙喜常に衲子の輩に謂つて説く、「世間の工巧技藝すら若し悟處なければ、尙ほ其の妙を得ず。」況んや生死を脱せんと欲して、而して只だ口頭を以て靜を説いて

するなり。
 ⑭ 或は別とは、古人の語に別するを別語といふ、即ち先徳の古則を擧揚せる中に、他の語を下せりと雖も、今我が意に契はず、別に一轉語を下す、之を別語といふ。例せば、古人の語を拈じて云く、若し是れ吾れならば便ち然らず、或は若し是れ我れならば是くの如くに道はん等と言つて別に語を下せるの類をいふ。今は只だ語言三時を以て禪となすをいふ。
 ⑮ 或は眼等は光影邊の禪なり、此事は見聞を離れず即せずして、而して之を認めて和會すとなり。
 ⑯ 僧寶傳九永明章に云云す。華嚴十地品に云く、「三界の所有は但だ是れ一心」と、十地經第六地に云く、「三界は虚妄、皆是れ一心なり」と、宗鏡錄二、

臨濟、會元十等。萬法唯識とは、唯識論七、同述記七に出づ。
 ⑰ 無言等、此は默照邪禪なり、これは仰山の所謂安禪靜慮ならずんば、這裏に到つて茫然たるの語を謬り認めて、心を閉塞するを以て禪となし、解會轉た深きが故に、邪に入ること轉た深きなり。
 ⑱ 默而等、永嘉集下に、優畢又云云と。
 ⑲ 誑はたぶらかす、惑はす、欺くなり。誑は誑なり、意は元來悟なくして而も悟ありと云つて人を誑すなりと。
 ⑳ 建立は方便なり。
 ㉑ 世間等とは、山谷詩集十に云く、「丹青の妙處は傳ふべからず」と、莊子の五に云云。
 ㉒ 況んや等は妙悟を拂ふを破するなり。
 ㉓ 口頭等は默照邪禪に當る。

便ち 收殺せん^①と要するをや。大いに 頭を埋めて東に向つて走りて西邊の物を取らんと欲するに似たり、轉た求むれば轉た遠く、轉た急なれば轉た遅し、此の輩を名けて可憐愍の者と爲す。教中に之を大般若を謗じ佛の慧命を斷する人と謂ふ。千佛出世すとも懺悔を通せじ、是れ善因なりと雖も返つて惡果を招ぐべきなり。寧ろ此の身を以て碎いて微塵の如くするとも、終に佛法を以て人情に當てじ、決して生死に敵せんと要せば、須らく是れ這の奈桶を打破して始めて得べし。切に忌む邪師に順に摩持して冬瓜印子を將つて印定せらるるを被つて便ち我れは千了百當すと謂ふことを、此くの如きの輩、稻麻竹葦の如し。左右は聰明にして識見あり、必ず這般の惡毒を受けじ。然れど

①收殺とは合殺に同じ、うたひどめ、まひどめをいふ、即ち事畢るをいふなり。
 ②頭を埋むとは、俗語なり、無分曉をいふ。寒山詩、圓悟心要下に見ゆ。東に向ふ等は、計較を以て計較なき處に到らんと欲するなり、若し之を求めんと欲せば但だ須らく計較安排を離るべし。
 ③是れ善因、傳燈二十八に出づ。計較安排を以て口に佛法を説くは惡業にあらず、是れ善因なり、而して默照禪を認めて妙悟を撥するは是れ惡果なり。
 ④寧ろ等とは大惠平生の誓願なり、此れは下の決して生死云云の語を起さんが爲に、先づ之れを言ふて、人をして深く其處にあらざることを信ぜしむるなり。
 ⑤冬瓜等とは、惡知識、杜撰の長老の説に印定するを冬瓜印子に喩ふるなり、碧巖九十八則の評に見ゆ。
 ⑥稻麻等とは、邪師邪徒の多きを喩ふ。法華方便品の偈、同戒環要解に云云す。
 ⑦第五段、如上の邪を開くの意を述ぶ。
 ⑧識見とは、目に見る所ありて、心に分別あるなり。物を知るに多ければ則ち識見增多なり。
 ⑨然れど等は、諸方の善知識に逼問するの時を謂ふ。
 ⑩千萬等、第六段、重ねて工夫提撕の法を示す。
 ⑪古徳とは、馮山を指す、警策の文なり。
 ⑫天花等、碧巖第一則の評、傳燈十七、雲居篇、唐僧傳六、法雲の章。
 ⑬癡狂等は、畢竟自己の事にあづからぬ意。

も亦用心すること切にして速効を求めんことを要し、覺えず知らずして他に染汚せられんことを恐る。故に筆に信せて葛藤すること如許す、明眼の人に覩見せらるれば、一場の敗闕なり、千萬相聽せよ。只だ趙州一箇の無字を以て、日用應縁の處に提撕せよ、間斷することを要せざれ。古徳言へることあり、「至理を研窮して悟を以て則と爲せよ」と。若し説き得て天花亂墜すとも、悟らすんば總に是れ癡狂外邊に走るのみ。之れを勉めよ、忽にすべからず。

①湯の傳は、宋史列傳百三十二、丞相は杜氏通典三十一に云く、「秦悼武王二年に始めて丞相の官を置く、乃至金印紫綬、天助を承けて萬機を理むることとを掌る、秦に初に左右あり、二世に至りて中丞相あり、丞相の月俸錢は六萬云云」。日本の左右大臣に當ると、有云く、三公丞相にあらず、此は左右僕射をいふと。師七十一歳の作なり、年譜に紹興三十二年の處に湯丞相の韻に和するの偈あり。
 ②第一段、用心を示す。
 ③缺減界とは、娑婆世界のことなり、吾人の住する現世界は精神的にも、物質的にも満足を得ること難く、事物物が希求通りならず、淨土の果報の満足なるに同じからざるが故に缺減界といふ。缺減に三種あり、居家必用集に出づ。
 ④機は發動の義、樞機等と落字す、根は物の根源にして能生の義、即ち人類の佛教を修行し證悟し得る能力をいふ、今の文意は吾人の遭遇すべき逆境若しくは順境、其の他見聞覺知の一一は、皆本具の佛性覺體を開悟すべき能力を開發すべき好箇の時節なれば、平常ぼんやりとして日を過ごすなどの意なり。
 ⑤分に等とは、前の樞機密に答ふる書に云く、「但だ一切時に臨み縁に隨つて酬酢し、自然に道箇の道理に合著す」と、此意なり。
 ⑥第二段、工夫の法を示す。
 ⑦生死の心とは、念念起滅の虛妄の心なをいふ、これ次下に華嚴を引かんが爲に先づ之れを言ふ。
 ⑧第三段、強め悟後の境界を示す。

き底の事は 分に随つて撥遣し、境に觸れ縁に逢ひ、時時に話頭を以て提撕せよ。速効を求むること莫れ、至理を研窮して悟を以て則と爲せよ。然も第一に心を存して悟を等つことを得ざれ。若し心を存して悟を等たば、則ち等つ所の心に道眼を障却せらるることを被らん。轉た急なれば轉た遅し、但だ只だ話頭を提撕せよ、驀然として提撕の處に向つて、生死の心、絶するときは則ち是れ歸家穩坐の處なり。恁麼の處に到ることを得たらば、自然に古人の種種の方便を透得して、種種の異解自ら生ぜじ。教中に所謂心の生死を絶し、心の稠林を伐り、心の垢濁を洗ひ、心の執着を解くといへるものなり。執着の處に於て、心を動轉せしめ、動轉の時に當つて、亦動轉する底の道理あるこ

① 古人の話則因縁をいふ。
② 教中とは、華嚴經六十三入法界品、解脫長者章。
③ 心の稠林とは、斷常等の異見をいふ、華嚴經三十八に十種の稠林を説けり、十地論十一。法華一、方便品に云く、邪見の稠林に入り、若しくは有若しくは無等、此諸見に依止して六十二見を具足す云云。科註に云く、五見交加はりて稠林の茂密なるが如し、若し有に著せば是れ常見、若し無に著せば是れ斷見なり、此の兩に因るが故に、所以に六十二見を出生するなり」と。心とは、第六意識なり。
④ 心の垢濁とは、吾人の意識には貪瞋癡等の煩惱の垢が附着して同時に作用をなせり、故に所縁の境を實の如く取るこゝと能はず、妄境に執着し隨つて境の爲に支配せられ束縛せ

られて、自由を得ざるなり、故に其垢濁を洗除し、執着を解説するを要す。
⑤ 心を等、此は大慈は一回此の田地に到りし人なれば、此の如くに言ふなり。
⑥ 亦等、動轉するものはれ何物ぞと、纒かに覺醒すれば動轉底の道理なし。
⑦ 自然等は、傳燈十七、雲居章。
⑧ 珠等とは、拘泥執着せざるをいふ。
⑨ 撥は發なり、之を轉するなり。
⑩ 南陽等、第四段、邪師を轉破す。傳燈五、會元二、六祖旁出の忠國師なり。説法等とは、謂く、邪師は實法を與ふなり、邪師自ら實法を認め以て眞の歸處となす、故に之を以て人に與ふ、これ唯だ自ら迷ふのみならず、又人を迷味するなり。野干鳴とは説法を指す、佛藏經北藏四。

となく、自然に頭々に明かに、物物上に顯れて日用應縁の處、或は淨、或は穢、或は喜或は怒、或は順、或は逆、珠の盤に走つて撥せざれども自ら轉するが如くならん。這箇の時に到ることを得れば、拈出して人に呈似するこゝと得ず。人の水を飲んで冷煖自知するが如し。南陽の忠國師言へることあり、「説法有所得なる是れを野干鳴と爲す」と。此の事は、青天白日の一見便見するが如し、眞實自ら見得する底は、邪師も、走作せしむること得ざるなり。前日亦嘗て面言して、此の事は傳授あるとなし、纒かに奇特玄妙ありと説かば、六耳謀を同じうせずといふの説、即ち是れ相欺くことを。便ち好し拽住して劈面に便ち睡するに。書生より宰相に做到る是れ世間法の中の最尊最貴なる

① 青天白日とは、黑白分明なるをいふ、意は邪師の正不正を見わけること白日に物を見るが如しと、一見便見はこれ擇法眼なり。
② 走作とは突出して事を作すをいふ。意は湯丞相、此の境界に到らば亦此の如しと。
③ 此事等は、邪師の傳口令を破す、上に死語といふ是なり、總て言語には作用なき故に死語といふ、看經の眼を具すべしと言ふ如く、今傳授なしと云ふ底意には有の義あり、然し直に有と云ふべからず、故に無しといふのみ、故に六祖は黃梅の忍大師の處に於て三更入室す、心大師は袈裟を以て遮圍して、人をして説法をきかしめず、此等は是れ傳授の處なり、然らば一向に傳授なしと謂ふにあらず。
④ 六耳云とは、意は但だ自ら

知るべきをいふ。此れは耳語密談をいふ、譬へば密計せんと欲せば、三人同處に在る時は必ず其事漏れ易し、故に漏れざらしめんと欲せば、則ち或は但だ兩人相對して密に謀るべきなり。耳とは、耳に附して語るなり、六耳相集りて俱に謀らざるの謂なり。古云く、多人相會して計略せば其事漏ると、而し此の如き事は今の要にあらず、今の畢竟の意は若し自悟自證にあざれば、本分の田地に到る能はざるをいふ。拽住とは大惠を……。
⑤ 第五段、有漏の善業は眞の佛法にあざること論す。書の上、「公は」を加へ見よ、書生とは、史記百二十一儒林傳に辯す。宰相とは、此れは三公中の宰相にあらずと。杜氏通典二十一。
⑥ 此の事とは、出世間法なり。

者なり。若し 此の事の上に向つて了却せずんば、即ち是れ虚しく、南閻浮提に來つて 打一遭す。收因結果の時には一身の惡業を帯び得て去らん。教中に説く、癡福を作すは是れ第三生の宛なりと謂ふ。何をか第三生の宛と謂ふ、第一生には癡福を作して 性を見ず、第二生には癡福を受けて慚愧あることなければ、好事を做さずして一向に 業のみを作す。第三生には癡福を受け盡して好事を做さざれば、殺漏子を脱却する時、地獄に入ることを箭を射るが如し。人身は得難く、佛法には逢ひ難し、此の身、今生に向つて度せずんば更に何れの生に向つてか此の身を度せん。此の道を學せんに須らく決定の志あるべし。若し決定の志なくんば、則ち聲を聞いて卜する者の 人の

④南閻浮提とは、此世界を云ふ、前に之を註せり。法苑珠林四、名義集三等に出づ。
⑤一遭とは、一周の義なり、前に出づ。
⑥收因結果とは、諸事の成就するをいふ。今は此の世を去らんとするの時をいふなり。
⑦教中とは、未詳、金剛經判定記。癡福とは、此事に回向せずして護に有漏の善事をなすを謂ふ。
⑧性とは、人人本具の佛性なり。華嚴離世間品。
⑨業のみを作すとは、惡業を作すをいふ。
⑩殺漏子は此れ第二生を離れて將に第三生に到らんとする時なり、俗語なり、五尺の形骸をいふ。徒然草にいふ、かららきやうときへのにすてて云云、此れ殺漏子を指す。
⑪地獄、正に是れ第三生なり、
⑫此身等は洞山价和尚、母に贈る書中の語なり。諸祖偈頌下。
⑬第六段、決定の志を立てんことを要す。決定等とは、實智慧を以て邪正を辨別すれば、人惑を受けず、又妙悟を以て決定をなすの義なり。聲を聞

東と説くを見ては便ち人に隨つて東に向つて走り、西と説けば便ち人に隨つて西に向つて走るが如くならん。若し決定の志あらば則ち把得住して主宰と作り得。熾融の所謂設ひ一法の涅槃に過ぎたるあるも、吾は説く亦夢幻の如しと。況んや世間の虚幻不實の法をや。更に甚賤の心情あつてか、之れと交渉を打せんや。願くは公、此の志を堅うして以て手に入ることを得て決定の義をなさば、則ち縱使ひ大地の有情盡く、魔王と作つて來つて惱亂せんと欲すとも、其の便を得る處あること無けん。般若の上には虚しく棄つる底の工夫あることなし。若し心を存して、上面に在かは、縦ひ今生に未だ了せずとも亦、種子を種る得ると深からん。臨命終の時に亦業識に所牽を被つて諸の惡趣

くとは、上の黃門司に答ふる書中に出づ。
⑬人の等とは、東西とは喻なり、猶ほ此事を説くに彼事を説くと云ふが如し。めなし、どちとち、聲について、ましませで、般若を以て定量となさずんば皆此くの如し。大論三十に云云。
⑭熾融は傳燈牛頭章。此は邪師が種種の奇特支妙を説くと雖も、而も彼の惑を被らざるなり。大論五十五等。
⑮況等は、邪師傳授の法に況す。之とは、邪師の口耳の上の傳授を指す。
⑯魔王とは、邪師を喻ふ。大般若四百六十六に、大地、魔王となる云云と。
⑰第七段、心を般若に寄せて失せざることを論ず。虛等とは華嚴五十二、如來出現品に云云。意は一切處一切時一切事

に於て小善根を種うるも存心の工夫なるが故に、盡しく棄つるなしと。大慈經三善根品に云云。
⑱上面は猶ほ面前といふが如し、上に出づ。
⑲成佛の種子。
⑳殺漏子とは、將に今世を捨てんとするの時なり。
㉑後世の人趣に出頭し來るをいふ。我底とは本來の人を指す。
㉒契は萬姓統譜二十三に出づ。提刑は事物紀原六に云云、景德四年六月、眞宗筆記六事の一に曰く、提點刑獄と、七月詔して官を擇び諸路の刑獄公事を提點す等と。此章は禪道佛法一如の義を明かにし、其の根本に達するの要徑を説く。
㉓第一段、佛事と禪語と異なきことを示す。蓋し契提刑は、六度萬行を以て佛事となし、

に墮せず。④穀漏子を換却して、頭を轉じ來るとも亦我底を味すこと得じ、之れを察せよ。

⑤樊提刑に答ふ 茂實

能く佛事を行すれども禪語を解せずと示諭

せらる。能くすると解せざると別なく同なし、

但だ能く行すと知る者、即ち是れ禪語なり。禪

語を會して而して能く佛事を行せずんば、人の

水底に在つて坐して渴すと叫び、飯糶裏に

坐して飢うと叫ぶが如く、何ぞ異ならんや。當

に知るべし、禪語は即ち佛事、佛事は即ち禪語

なることを。能く行すると能く解するとは、人

に在つて、法には在らず。若し更に、箇の裏に

向つて同を究め別を究めば、則ち是れ、空拳指

上に實解を生じ、根境法中に虚しく捏怪す。

却き行じて而も前まんことを求むるが如

無義味の語を以て禪語と爲す、これ言迹を解するを得ざるなり。故に大惠の意の謂く、根元を截断せば則ち解せざるなり。

①禪語を會すとは、來書に云く、能く佛事を行じ等と、これ然らず、此れ亦來書の佛事を行す云の句に反影して、一邊を借りて言ふ。

②水底に在るとは、佛事を行するに喩ふ、坐して渴すと叫ぶとは、禪語を解せざるを喩ふ。

③糶とは竹を以て造りし籃なり、飯糶とは、佛事を行するに喩ふ、意は實に飯糶裏に坐し、實に水底に在らば何ぞ飢渴せんや、今も眞に佛事を行せば何ぞ禪語を解せざらんや、當に知るべし、禪語即佛事、佛事即禪語なることを。

④法とは、能く行じ能く解すと

知る者を云ふ、前の汪狀元に答ふる書中に、順背は人に在りて性にあらす云と、其の意同じ。

⑤箇の字、一本に道に作る、箇は此に同じ、法を指す。

⑥空拳指上とは、能く行じ能く解し、行せず解せずを指していふ。此事は能行能解等の上にあらざる故に。

⑦根境法中は、能行能解等が此れ根境法なり、者裡に此事なし、故に虚しく捏怪といふ、終日解し終日脱くとも終に此法にあづからざるが故に。怪の字を一に怪に作れり。

⑧却行等は、淮南子九に出づ。意は能行能解を以て佛事を求めば、却行して前まんことか求むるが如し、能行能解は佛事にあらず禪語にあらず、故に終に斯事にあづからず、これ其理にあらざるをいふ。

①急と遲と相背くの詞なるも、疎と遠とは同義なり、故に疎は恐らくは親の字の寫誤。②徑截、第二段、妄解を捨て實工夫をなさんことを勸む。意は眞に佛事を行せば、必ず禪語を解すべしとなり。③他方等、計較卜度する者を他方世界に掃却し終れば、掃ふべからざる物現前す、これ有にあらす無にあらす、同にあらず別にあらす、一切なき處、これ達磨の所謂心牆壁の如きの類なり。④心思とは、心想の絶する時に自ら證悟すべしとなり。六祖の不思議不思惡、正與麼の時、那箇か、これ明上座の父母未生已前の本來の面目と抄す、是れ掃ふべからざるの處なり、大應錄下、九十六丁、支提禪人に示す法語に云云す、皆一轍にして冷煖自知の處なり。

①普燈錄十六、温州龍翔の竹庵士珪禪師にして、佛眼遠に嗣ぐ、政和の末、法を天寧に開く、會元二十、大惠の法從姪なり。②第一段、世俗を濶略して斯道を荷擔せんことを勸む。心を存して相照すとは庫司邊の事を照顧するをいふ。撥置とは、之を收めて一邊に除き置くをいふ。人事とは、世俗の事務なり、意は食輪は既に轉すれば、但だ當に法輪を轉すべしとなり。③佛事とは、今は佛法商量等をいふ。④第二段、本分を以て、學者を接すべきを示す。⑤子細等とは、第二義門の處に於て學者を接すべからず、第一義本分の處に於て接すべきをいふ、曠待者は、我が國師の會下に在つて二十五度、打

し。①轉た急なれば轉た遅く、轉た疎なれば轉た遠し。②徑截に心地豁如たることを得んと要せば、但だ能くすると能くせざると、解すると解せざると、同なると同ならざると、別なると別ならざると、能く是くの如くに思量し、是くの如くに卜度する者を將つて、他方世界に掃向せよ。却つて掃ふべからざる處に向つて看よ、是れ有なるか是れ無なるか、是れ同なるか是れ別なるか、驀然として、心思意想絶すれば、恁麼の時、當つて自ら人に問ふことを著ひざるべきなり。③聖泉珪和尚に答ふ④既に外護者の心を存して相照すことを得、自ら人事を撥置して、頻に衲子の輩の與に佛事を作すべし、久久にして自ら殊勝ならん。⑤更に望むらくは室中之れが與に、子細にして

人情を容るることを得ざれ、伊と共に落草することを得ざれ。直ちに之に似すに本分の草料を以てして、伊をして自語自得せしめば、方には是れ尊宿、人の爲にする體裁なり。若し是れ伊が遅疑して薦まざるを見て便ち之れが爲に注脚を下さば、但だ他の眼を瞎却するのみに非ず、亦乃ち自家本分の手段を失却せん。人を得ざれば即ち是れ吾輩の緣法只だ此くの如し。若し一箇半箇の本分底を得ば、亦平昔の志願に負かざるなり。

鼓山の速長老に答ふ

專使來つて書并に信香等を收めてより、開法、出世して道を石門に唱へ、從來する所を忘れず、岳長老の爲に拈香して楊岐の宗派を續ぐことを知る。既に已に箇の事を承

出せらる等の人情を容れざる處、運つて大慧懸なり。落草とは、向上より地上に下りて人に接し、心と説き性と説くをいふ、碧巖三十四則前に辨す。體裁とは、體格風裁なり、格式といふが如し、十八史略の註に「體裁は猶ほ風致といふが如し」と。之とは學者を指す。若し落草し注脚を下さば、枝蔓上に枝蔓を生じて、心を以て悟を等つに至るが故に。橋門警訓下に出づ。人を等、第三段、吾家は人を得るは多きにあらざることを論す。緣法とは、因緣の法にて緣とは禪宗の機縁を指す、法は法則なり、恰爾具眼の士を得ると否とは宿縁に由るをいふ。志願とは、傳法度生の願なり、

當す、須らく卓卓地にして徹頭徹尾ならしむることを做すべし。平昔の實證實悟底の一著子を以て、丈室に端居し、百二十斤の擔子を擔うて、獨木橋上より過ぎて脚蹉き手跌へば、則ち自家の性命と和に保つべからざるが如くせよ。況んや復た人の與に釘を抜き楔を抜いて、他人を救濟せんをや。古徳云く、「此の事は八十の翁翁の場屋に入るが如し、豈に是れ兒戲ならんや。」又古徳云く、「我れ若し一向に宗教を擧揚せば、法堂前草深きこと一丈にして、須らく人を倩うて看院せしめて始めて得べし。」巖頭毎に云く、「未だ肩せざる已前に向つて、一たび戯て便ち眼卓朔地なるべし」と。晏國師の石門に跨がらざる句、睦州の現成公案、欄に三十棒を放す。汾陽の無業の莫妄想、魯祖の

開演するをいふ、出世とは佛の出世に準じていふ、法華方便品。岳は前記の思岳禪師なり、普燈十八、汝達の宗派圖大惠法嗣の下に出づ。拈香とは、舊說鈔に云く「拈は燒の義、唯だ佛祖の前に燒香す、これ拈香なり」と、備用清規達磨忌に曰く「住持拈香の佛事を擧す」と。即ち徹悟の人に對してすることにて、報恩、賞養等の意あり。楊岐は舟峰補備傳に。箇の事とは、普通には本分を指していふ、今は道を唱へ人の爲にするをいふ。承當とは荷擔するをいふ。卓卓地は、獨立の貌、委委隨隨地ならざるをいふ。徹頭等は碧巖三十一則に。百二十斤とは、丈室内に於てなす爲人度生の極めて重大なるをいふ、百二十斤とは此れは但だその重きなをいふのみ。史記五十五、留侯世家に云云。獨木橋とは、これ但だ其語勢を假るのみ、傳燈九、長慶章のと其意別なり。自家等とは、萬仞の懸崖に墮して自ら尙ほ度すべからず、況んや他人を救濟することをやの意。古徳、第三段、廣く古人を引いて證す、八十の翁等は前に註す。又古徳等、前には不好事に之を引く、今は好事に之を引く、已下師家の峻峻を引く。此語は諸傳の巖頭章に之を載せず。未だ肩等とは、未だ言句を吐露せざる以前をいふ。一たび等とは、一見便見の靈利の漢をいふ。晏國師は雲峰存の法嗣、會元七。鼓山の神安章に云く「鼓

凡そ僧の門に入るを見ては便ち轉身面壁して坐す。人の爲にせん時は當に ① 這般の體裁を味さずして、方に從上の宗旨を失せざるべきのみ。

昔、瀋山、仰山に謂つて曰く、② 「法幢を建て宗旨を立するは、一方に於て五種の緣備つて始めて成就することを得」と。五種の緣とは謂く、

③ 外護の緣、檀越の緣、衲子の緣、土地の緣、道の緣なり。聞く 霜臺趙公は是れ汝が請主なりと。致政司業、鄭公は汝を送つて入院せしめしと。二公は 天下の士なり、此を以て之

れを觀れば、汝は五種の緣に於て稍備はれり。衲子の ④ 閩中より來る者ある毎に、法席の盛

なると、檀越の歸向せると、士大夫の外護せると、住持に魔障なきと、衲子雲のごとくに集

まるとを稱歎せざるもの無し、以て色方未だ衰

山尋常の道、更に一人の石門を跨らざるあり、須らく石門を跨らざるの句あるべし、作廢生か是れ石門を跨らざるの句。傳燈九。

⑤ 陸州は陸州龍興寺に居し、述を晦まし用を藏す、常に草履を製して密に道上に置く、乃ち陳蒲鞋の號あり、師、僧の來るを見て云く「現成公案、汝に三十棒を放す」と、僧云く「某甲、是の如し」と、傳燈

十二。公案式目上に、三十棒を喫すべきの罪禍現成して之れあり、然るに今之を放過するなり。

⑥ 無業は馬祖の法嗣、僧俗歸嚮す。凡そ學者の問を致すあらば、師多く之に答へて云く、「莫妄想」と。傳燈八。魯祖も亦馬祖の法嗣、池州魯祖山の寶雲禪師なり、傳燈七。門に入るるとは室中に入るの門也。

⑦ 這般の這は者に作るを是とす、事を指すの辭なり、事苑二に之を辯す。體裁は格式なり。

⑧ 第四段、緣の備足することを喜ぶ。

⑨ 法幢等は、一方に於て法幢を建て宗旨を立つるの謂なり、楞嚴一。證道歌に曰く「法幢を建て宗旨を立つ、明明たる佛教曹溪是れなり」と。五種の緣とは出所不明。

⑩ 外護の緣とは、官人等之を守護して魔障ならしむるをいふ。檀越の緣とは、衣、食、住の窮乏せざるをいふ。檀越とは、南海寄歸傳一、事苑五、名義集一等に出づ。正しくは陀那鉢底(Dānapati)といふ、施主と譯す、布施の主なり、寺院の信者を檀徒等といへるに同じ。施に財施、法施等あり、財物を施して他の窮乏を

へざるの時を趁ふて頻りに衲子の爲に箇の事を激揚すべし。⑦ 手を垂るゝの際、須らく精彩を著けて、莽齒なる

ことを得ざるべし。蓋し近年以來、一種禪販の輩あり、到る處に

一堆一擔の ⑧ 相似の禪を學得す。往往に宗師も ⑨ 造次に放過して

遂に ⑩ 虚を承け響を接して、遞に相印授して後人を誤り賺し、正

宗をして淡薄にして單

致政は、禮記註疏十三、同十

一曲禮上、白虎通六。司業は、もと仕ふる所の官なり、事文新集三十一。鄭公は未詳。

① 天下の士とは、天下高顯の士の謂なり。史記二十三。

② 閩中は鼓山の所在地なり。法席の盛は、土地の緣に當る、他は知るべし。

③ 住持等は道縁に當る、魔障とは師家と學者と融和せざるをいふ。小品般若十六、不離合

④ 霜臺は杜氏通典二十二に云く、御史、風霜の任となり、不法を彈料す、百僚震恐す、官の雄峻なる之れに比するな

⑤ 垂手不垂手とは是れ洞家の呼稱、碧巖四十三則の評に、學者の爲に泥に入り、水に入る

⑥ 莽齒は事苑に云く「不分明の貌」と、莊子八則陽篇に云云す、君、政をなすに齒莽する

⑦ 法席の盛は、土地の緣に當る、他は知るべし。

⑧ 相似禪とは、取相實法に依つて説くをいふ、前の汪狀元に

⑨ 造次は、形容して似たることを得、形容して似たることを得るも、却つて見す、却つて悟らざるを怕る」といふ是

⑩ 虚を承け響を接して、遞に相印授して後人を誤り賺し、正宗をして淡薄にして單

を用ひざるなり、滅裂は輕易なり。

⑤ 第五段、猥りに印可するを斥す。

⑥ 禪販は小販(ふれうり)の謂、惡學邪解の者の法を賣弄するをいふ。楞嚴六、同釋要鈔。

⑦ 一堆一擔は、臨濟錄に曰く、「三重五重、覆子につつんで人をして見せしめず」と、是れなり。大鏡子上に死老漢の語を抄すと、即ち經教の語を鈔録する等をいふ。

⑧ 相似禪とは、取相實法に依つて説くをいふ、前の汪狀元に答ふる書に「説いて似たることを得、形容して似たることを得るも、却つて見す、却つて悟らざるを怕る」といふ是

⑨ 造次に放過して後人を誤り賺し、正宗をして淡薄にして單

傳直指の風、幾ど地を掃はしむることを致すに至る、子細にせずんばあるべからず。五祖師翁、白雲に住せし時、嘗て靈源和尚に答ふる書に云く、「今夏諸莊の顆粒、收めざれども以て憂とせず、其の憂ふべき者は一堂數百の衲子、一夏に一人の箇の狗子無佛性の話を透得するも無きことなり。佛法の將に滅せんとするを恐るるのみ」と。汝看よ主法底の宗師の心を用ふるは、又何ぞ曾て産錢の多少、山門の大小を以て重軽と爲し、米鹽の細務を急切となし來らんや。汝既に出頭して箇の善知識の名字を承當せば、當に一味に自分の事を以て方を接待すべし。有ゆる庫司の財穀は因を知り果を識る。知事に分付して、司を分ち、局を列ねて之れを掌らしめて、時時に大綱を提舉せよ。

①造次等は、論語里仁爲美の朱註に出づ。放過とは容易に許可するをいふ。
②虚を承くとは、不實なるを喻へいふ。
③正宗記十二に云云、又宗門と稱すは多く禪門に限る、宗鏡録一。單傳直指は達磨宗なり。碧巖第一則。
④幾どは絶無なるをいふ。
⑤五祖等、第六段、財法の輕重をいふ。會元十九、聯燈十六、五祖法演禪師は綿州の人、白雲の端禪師の法嗣なり。相承を示さば、五祖一圓悟一、大惠。故に今大惠より師翁といふなり、白雲は舒州に在り。
⑥靈源は、會元十七、續燈二十六、僧實傳三十、普燈六等に出づ。此語は靈源筆語に出づ。
⑦産は五穀をいひ、錢は金錢なり。
⑧大小等は、大利を重んじ、小

利を輕しとするなり。
⑨細務は孟子盡心篇上に云く、「知者は知らざるることなし、當に之れを務むべきを急と爲す」と、朱子の註に云云す。
⑩汝等、第七段、寺務の處分を論ず。
⑪一味は餘味を雜へざるなり、猶ほ專一といふが如し。
⑫方來は、四方より來る者なり。孟子滕文公。
⑬知事とは、釋氏要覽下に、主事に四員あり、一は監寺なり、監は總領の稱なり、寺院の主と稱せざる所以なり、蓋し長老を推尊す。二に維那、悅衆と譯す、授受の人をいふ。三に典座、次を典し、牀座を付す。四に直歲は、直は當るなり、一切の作務を掌る役なり、即ち年中寺内の修理を掌り、門窓等を修補し、動用の什物器具を修換し、山林田園の裁

僧を安ずること必ずしも多からざれば、日用の齋粥、常に後手をして餘あらしめ、自然に力を費さざるべきなり。衲子室中に到らば刃を下すこと緊しからんを要せよ、泥を挖き水を帶ぶることを得され。雪峯の空禪師の如き、頃にかすして是れ箇の佛法中の人なることを知る、故に一味に自分の鉗鎚を以て之れに似す。後來に自ら別處に在りて打發す、大法既に明め、向の所受、過底の鉗鎚をば一時に受用することを得て、方に知る妙喜が佛法を以て人情に當らざることを。去年一冊の語録を送り得來る、造次顛沛にも臨濟の宗旨を失せず、今衆寮の中に送り、衲子の輩に看せしむ。老漢因に筆を擲つて其の後に書して特に爲に發提し自分の衲子

種を提舉す、此等を知事といふ、即ち心、法道に通じて諸有に著せざる身を撰んで知事となす。
①局は「やくやく」なり。
②後手の手は助語なり。餘あるは之を以て不時の用に充つるなり。
③第八段、本分を以て人を接すれば利益あることを證す。
④渤海の草堂清禪師の法嗣、福州雪峯の東山惠空禪師なり。會元十八、普燈十。
⑤雲居等は上に出づ、此れは海昏の雲門なり。建炎三、四年にして、師四十一、二歳の時。
⑥別處とは、靈源の省禪師の處なり。
⑦過は助字なり、大惠下に在つて受けし所の鉗鎚を受用するなり。
⑧其後に書すとは、大惠、其の語録に跋するなり。

⑨發提は、其語録の語を助證するをいふ。此時、師六十五歳なり。
⑩所以等、第九段、引證して上の意を結ぶ。古人とは、傳燈十五、洞山章に云云。
⑪若し已下は香巖の語意、同じきが故に、今合せ用ふるなり。
⑫道箇等、古人の傍觀者、べし、泥を挖き水を帶ぶると莫れ。
⑬只本分等、前の張侍郎に答ふる書には、衆生の機を備さして機に隨つて接化せよと云ふ、これ前と矛盾するに似たり、然し佛祖の人の爲にするや、或は推し、或は控く、曾て一準ならず、實法の人に與ふるなきが故に、畢竟隨機はこれ權、本分を以て接するは是れ實なり、學者に利根の者少なるが故に、或はままた其機に隨ふのみ。

をして將來の説法の式と爲さしむ。若し老漢をして初め渠が爲に挖泥帶水して、老婆禪を説かしめば、眼開けて後、定めて我れを罵ること疑なけん。①所以に古人云く、「我れ先師の道德を重んぜず、只だ先師の我が爲に説破せざることを重んず。若し我が爲に説破せば豈に今日あらんや」と。便ち是れ這箇の道理なり。趙州云く、「若し老僧をして伊が根機に随つて接せしめば、人自ら三乘十二分教の他を接し了るあり。老僧が這裏は、只だ本分の事を以て人を接す、若し接不得ならば、自らは是れ學者の根性遲鈍なるなり。老僧が事に干からず」と。之を思へ之を思へ。

國譯大慧普覺禪師書下 終

①大慧禪師、説法四十餘年にして、言句天下に滿つ。②平昔參徒の編録するを許さず、而も衲子私かに自ら傳寫して遂に卷帙を成す。晩年に衆の方めて請ふに因つて乃ち流通することを許す。然れども、在會に先後あり、見聞に詳略あり、又賢士大夫の得る所の法語、各自に寶藏して盡く觀るに縁なし。今の收むる所殊に未だ盡さずと爲す。更に採集して別に後録を爲らんことを俟つ。文昌、謹んで白す。

- ①三十七歳にして開悟に見えて大悟す。
 - ②四十餘年は實は三十九年なり。
 - ③平昔は猶ほ平生の如し。
 - ④卷帙は、書卷なり、増約に、舒卷すべきを卷といひ、編次するを帙といふこと。古には書は皆卷となす、後に方冊となせしなり、故に今尙ほ古に順じて卷と稱す。松亭語一。
 - ⑤在會は大惠の會下に在るなり。
 - ⑥見聞は衲子の見聞なり、略は功を用ふる少きを略といふこと。
 - ⑦法語とは、論語子罕篇に法語の言能く從ふなからんかと。
 - ⑧俟つは天下の人に俟つなり。
 - ⑨終に一言す、以上の註解は主として寫傳「大惠書法」に據る、予其作者を知らずと雖も、願はくは後昆の眼目を開け。
- (譯註者 齋藤探玄識す)

大慧普覺禪師書上

參學 慧然 錄

淨智居士黃文昌 重編

答曾侍郎 天游 問書附

開頃在長沙得圓悟老師書稱公晚歲相從所得甚是奇偉念之再三今八年矣常恨未獲親聞緒餘惟切景仰某自幼年發心參禮知識扣問此事弱冠之後卽爲婚官所役用工夫不純因循至今老矣未有所聞常自愧歎然而立志發願實不在淺淺知見之間以爲不悟則已悟則須直到古人親證處方爲大休歇之地此心雖未嘗一念退屈自覺工夫終未純一可謂志願大而力量小也向者痛懇圓悟老師老師示以法語六段其初直示此事後舉雲門趙州放下著須彌山兩則因緣令下鈍工常自舉覺久久必有入處老婆心切如此其奈鈍滯太甚今幸私家塵緣都畢閑居無佗事政在痛自鞭策以償初志第恨未得親炙教誨耳一生敗闕已一一呈似必能洞照此心望委曲提警日用當如何做工夫庶幾不涉佗塗徑與本地相契也如此說話敗闕亦不少但方投誠自難隱逃良可愍也至扣。

承叙及自幼年至仕官參禮諸大宗匠中間爲科舉婚官所役又爲惡覺惡習所勝未能純一

做工夫，以此爲大罪，又能痛念無常世間種種虛幻無一可樂，專心欲究此一段大事因緣甚愜病僧意，然既爲士人，仰祿爲生，科舉婚官，世間所不能免者，亦非公之罪也。以小罪而生大怖懼，非無始曠大劫來承事真善知識，熏習般若種智之深，焉能如此。而公所謂大罪者，聖賢亦不能免，但知虛幻非究竟法，能回心此箇門中，以般若智水滌除垢染之穢，清淨自居，從脚下下一刀兩段，更不起相續心足矣。不必思前念後也。既曰虛幻，則作時亦幻，受時亦幻，知覺時亦幻，迷倒時亦幻，過去現在未來皆悉是幻。今日知非，則以幻藥復治幻病，病瘥藥除，依前只是舊時人。若別有人有法，則是邪魔外道見解也。公深思之，但如此崖將去，時時於靜勝中，切不得忘了須彌山，放下著兩則語，但從脚下著實做將去，已過者不須怖畏，亦不必思量，思量怖畏卽障道矣。但於諸佛前發大誓願，願此心堅固，永不退失，仗諸佛加被，遇善知識，一言之下，頓亡生死，悟證無上正等菩提，續佛慧命，以報諸佛莫大之恩。若如此，則久久無有不悟之理，不見善財童子從文殊發心，漸次南行，過一百一十城，參五十三善知識，末後於彌勒一彈指頃，頓亡前來諸善知識所得法門，復依彌勒教，思欲奉覲文殊，於是文殊遙伸右手，過一百一十由旬，按善財頂曰：善哉善哉，善男子，若離信根，心劣憂悔，功行不具，退失精勤，於一善根，心生住著，於少功德，便以爲足，不能善巧發起行願，不爲善知識之所攝護，乃至不能了知如是法性，如是理趣，如是法門，如是所行，如是境界，若周徧知若種種知，若盡源底，若解了，若趣入，若解說，若分別，若證知，若獲得，皆悉不能。文殊如是宣示善財，善財於言下成就阿僧祇法門，具足無量大智光明，入普賢門，於一念中，悉見三千大千世界微塵數諸善知識，悉皆親

近恭敬承事，受行其教，得不忘念智莊嚴，解脫，以至入普賢毛孔，利於一毛孔，行一步，過不可說不可說佛刹微塵數世界，與普賢等諸佛等刹等行等，及解脫自在，悉皆同等，無二無別。當恁麼時，始能回三毒爲三聚淨戒，回六識爲六神通，回煩惱爲菩提，回無明爲大智，如上遮一絡索，只在當人末後一念真實而已。善財於彌勒彈指之間，尙能頓亡諸善知識所證三昧，況無始虛僞惡業習氣耶？若以前所作底罪爲實，則現目前境界皆爲實有，乃至官職富貴恩愛，悉皆是實。既是實，則地獄天堂亦實，煩惱無明亦實，作業者亦實，受報者亦實，所證底法門亦實。若作遮般見解，則盡未來際，更無有人趣佛乘矣。三世諸佛，諸代祖師，種種方便，翻爲妄語矣。承公發書時，焚香對諸聖，及遙禮庵中而後遣，公誠心至切如此，相去雖不甚遠，未得面言，信意信手，不覺怛如許，雖若繁絮，亦出誠至之心，不敢以一言一字相欺，苟欺公，則是自欺耳。又記得善財見最寂靜婆羅門，得誠語解脫，過去現在未來諸佛菩薩，於阿耨菩提，無已退，無現退，無當退，凡有所求，莫不成滿，皆由誠至所及也。公既與竹椅蒲團爲侶，不異善財見最寂靜婆羅門，又發雲門書，對諸聖遙禮而後遣，只要雲門信許，此誠至之劇也。但相聽，只如此做工夫，將來於阿耨菩提，成滿無疑矣。

又

公處身富貴而不爲富貴所折困，非夙植般若種智，焉能如是。但恐中忘此意，爲利根聰明所障，以有所得心，在前頓放，故不能於古人直截徑要處，一刀兩段直下休歇。此病非獨賢士大夫，久參禪子亦然，多不肯退步，就省力處做工夫，只以聰明意識，計較思量，向外馳求，乍聞知

識向聰明意識思量計較外，示以本分草料，多是當面蹉過，將謂從上古德有實法與人，如趙州放下著，雲門須彌山之類，是也。巖頭曰：却物爲上，逐物爲下。又曰：大統綱宗，要須識句，甚麼是句，百不思時喚作正句，亦云居頂，亦云得住，亦云歷歷，亦云惺惺，亦云恁麼時，將恁麼時，等破一切是非，纔恁麼，便不恁麼，是句亦刻，非句亦刻，如一團火相似，觸著便燒，有甚麼向傍處，今時士大夫，多以思量計較爲窟宅，聞恁麼說話，便道莫落空否，喻似舟未翻先自跳下水去，此深可憐愍，近至江西見呂居仁，居仁留心此段因緣甚久，亦深有此病，渠豈不是聰明，某嘗問之曰：公怕落空，能知怕者是空耶？是不空耶？試道看，渠佇思欲計較，祇對當時便與一喝，至今茫然討巴鼻不著，此蓋以求悟證之心，在前頓放自作障難，非干別事，公試如此做工夫，日久月深，自然築著磕著，若欲將心待悟，將心待休歇，從脚下參到彌勒下生，亦不能得悟，亦不能得休歇，轉加迷悶耳。平田和尚曰：神光不昧，萬古微猷，入此門來，莫存知解，又古德曰：此事不可以有心求，不可以無心得，不可以語言造，不可以寂默通，此是第一等入泥入水老婆說話，往往參禪人，只恁麼念過，殊不仔細看，是甚道理，若是箇有筋骨底，聊聞舉著，直下將金剛王寶劍一截截斷，此四路葛藤，則生死路頭亦斷，凡聖路頭亦斷，計較思量亦斷，得失是非亦斷，當人脚跟下，淨保保赤灑灑，沒可把，豈不快哉，豈不暢哉，不見昔日灌谿和尚，初參臨濟，濟見來，便下繩牀，葛巾擔住，灌谿便云：領領，濟知其已徹，即便推出，更無言句與之商量，當恁麼時，灌谿如何思量計較，祇對得古來幸有如此勝樣，如今人總不將爲事，只爲龜心，灌谿當初若有一點待悟待證待休歇底心，在前時，莫道被擒住便悟，便是縛却手脚，遠四天下，拖一遭

也不能得悟，也不能得休歇，尋常計較安排底，是識情，隨生死遷流底，亦是識情，怕怖惶惶底，亦是識情，而今參學之人，不知是病，只管在裏許頭出頭沒，教中所謂隨識而行，不隨智，以故昧却本地風光，本來面目，若或一時放得下，百不思量計較，忽然失脚，踢著鼻孔，卽此識情便是真空妙智，更無別智可得，若別有所得，別有所證，則又却不是也，如人迷時喚東作西，及至悟時，卽西便是東，無別有東，此真空妙智與太虛空齊壽，只遮太虛空中，還有一物礙得它否，雖不受一物礙，而不妨諸物於空中往來，此真空妙智亦然，生死凡聖垢染著一點不得，雖著不得，而不礙生死凡聖於中往來，如此信得及，見得徹，方是箇出生入死得大自在底漢，始與趙州放下著，雲門須彌山，有少分相應，若信不及，放不下，却請擔取一座須彌山，到處行脚，遇明眼人，分明舉似一笑。

又

老龐云：但願空諸所有，切勿實諸所無，只了得遮兩句，一生參學事畢，今時有一種剃頭外道，自眼不明，只管教人死猶狃地，他去歇去，若如此休歇，到千佛出世，也休歇不得，轉使心頭迷悶耳，又教人隨緣管帶，忘情默照，照來照去，帶來帶去，轉加迷悶，無有了期，殊失祖師方便，錯指示人，教人一向虛生浪死，更教人是事莫管，但只恁麼歇去，歇得來，情念不生，到恁麼時，不是冥然無知，直是惺惺歷歷，遮般底，更是毒害，瞎却人眼，不是小事，雲門尋常見此輩，不把做人看待，彼既自眼不明，只管將冊子上語，依樣教人，遮箇作麼生教得，若信著遮般底，永劫參不得，雲門尋常不是不教人坐禪，向靜處做工夫，此是應病與藥，實無恁麼指示人處，不見黃

榮和尚云我此禪宗從上相承以來不曾教人求知求解只云學道早是接引之詞然道亦不可學情存學道却成迷道道無方所名大乘心此心不在內外中間實無方所第一不得作知解只是說汝而今情量處爲道情量若盡心無方所此道天真本無名字只爲世人不識迷在情中所以諸佛出來說破此事恐爾不了權立道名不可守名而生解也前來所說瞎眼漢錯指示人皆是認魚目作明珠守名而生解者教人管帶此是守目前鑑覺而生解者教人硬休去歇去此是守忘懷空寂而生解者歇到無覺無知如土木瓦石相似當恁麼時不是冥然無知又是錯認方便解縛語而生解者教人隨緣照顧莫教惡覺現前遮箇又是認著獨體情識而生解者教人但放曠任其自在莫管生心動念念起念滅本無實體若執爲實則生死心生矣遮箇又是守自然體爲究竟法而生解者如上諸病非干學道人事皆由瞎眼宗師錯指示耳公既清淨自居存一片真實堅固向道之心莫管工夫純一不純一但莫於古人言句上只管如疊塔子相似一層了又一層枉用工夫無有了期但只存心於一處無有不得底時節因緣到來自然築著磕著噴地省去耳不起一念還有過也無云須彌山一物不將來時如何云放下著遮裏疑不破只在遮裏參更不必自生枝葉也若信得雲門及但恁麼參別無佛法指似人若信不及一任江北江南問王老一狐疑了一狐疑

又

細讀來書乃知四威儀中無時間斷不爲公冗所奪於急流中常自猛省殊不放逸道心愈久愈堅固深愜鄙懷然世間塵勞如火熾然何時是了正在鬧中不得忘却竹椅蒲團上事平昔留心靜勝處正要鬧中用若鬧中不得力却似不會在靜中做工夫一般承有前緣駁雜今受此報之歎獨不敢閉命若此念則障道矣古德云隨流認得性無喜亦無憂淨名云譬如高原陸地不生蓮花卑濕淤泥乃生此花老胡云真如不守自性隨緣成就一切事法又云隨緣赴感靡不周而常處此菩提座豈欺人哉若以靜處爲是鬧處爲非則是壞世間相而求實相離生滅而求寂滅好靜惡鬧時正好著力驀然鬧裏撞翻靜時消息其力能勝竹椅蒲團上千萬億倍但相聽決不相誤又承以老龐兩句爲行住坐臥之銘箴善不可加若正鬧時生厭惡則乃是自擾其心耳若動念時只以老龐兩句提撕便是熱時一服清涼散也公具決定信是大智慧人久做靜中工夫方敢說這般話於佗人分上則不可若向業識茫茫增上慢人前如此說乃是添佗惡業擔子禪門種種病痛已具前書不識曾子細理會否

又

承諭外息諸緣內心無喘可以入道是方便門借方便門以入道則可守方便而不捨則爲病誠如來語山野讀之不勝歡喜踊躍之至今諸方泰桶輩只爲守方便而不捨以實法指示人以故瞎人眼不少所以山野作辨邪正說以救之近世魔強法弱以湛入合湛爲究竟者不可勝數守方便不捨爲宗師者如麻似粟山野近嘗與衲子輩舉此兩段正如來書所說不差一字非左右留心般若中念念不間斷則不能洞曉從上諸聖諸異方便也公已捉著欄柄矣既得欄柄在手何慮不捨方便門而入道耶但只如此做工夫看經教并古人語錄種種差別言句亦只如此做工夫如須彌山放下著狗子無佛性話竹篋子話一口吸盡西江水話庭前柏

樹子話亦只如此做工夫更不得別生異解別求道理別作伎倆也公能向急流中時時自如此提撥道業若不成就則佛法無靈驗矣記取記取承夜夢焚香入山僧之室甚從容切不得作夢會須知是真入室不見舍利弗問須菩提夢中說六波羅蜜與覺時同別須菩提云此義幽深吾不能說此會有彌勒大士汝往彼問咄漏逗不少雪竇云當時若不放過隨後與一箇誰名彌勒誰是彌勒者便見冰銷瓦解咄雪竇亦漏逗不少或有人問只如曾待制夜夢入雲門之室且道與覺時同別雲門卽向佗道誰是入室者誰是爲入室者誰是作夢者誰是說夢者誰是不作夢會者誰是真入室者咄亦漏逗不少

又

來書細讀數過足見辨鐵石心立決定志不肯草草但只如此崖到臘月三十日亦能與閻家老子厮抵更休說豁開頂門眼握金剛主寶劍坐毘盧頂上也某嘗謂方外道友曰今時學道之士只求速效不知錯了也却謂無事省緣靜坐體究爲空過時光不如看幾卷經念幾聲佛佛前多禮幾拜懺悔平生所作底罪過要免閻家老子手中鐵棒此是愚人所爲而今道家者流全以妄想心想日精月華吞霞服氣尙能留形住世不被寒暑所逼況回此心此念全在般若中耶先聖明明有言喻如太末蟲處處能泊唯不能泊於火燄之上衆生亦爾處處能緣唯不能緣於般若之上苟念念不退初心把自家心識緣世間塵勞底回來抵在般若上雖今生打未徹臨命終時定不爲惡業所牽流落惡道來生出頭隨我今生願力定在般若中現成受用此是決定底事無可疑者衆生界中事不著學無始時來習得熟路頭亦熟自然取之左右

逢其原須著撥置出世間學般若心無始時來背違乍聞知識說著自然理會不得須著立決定志與之作頭抵決不兩立此處若入得深彼處不著排遣諸魔外道自然竄伏矣生處放教熟熟處放教生改爲此也日用做工夫處捉著欄柵漸覺省力時便是得力處也

答李參政 漢老 問書附

邴近扣籌室伏蒙激發蒙滯忽有省入顧惟根識暗鈍平生學解盡落情見一取一捨如衣壞絮行草棘中適自纏繞今一笑頓釋欣幸可量非大宗匠委曲垂慈何以致此自到城中著衣喫飯抱子弄孫色色仍舊既亡拘滯之情亦不作奇特之想其餘夙習舊障亦稍輕微臨別叮嚀之語不敢忘也重念始得入門而大法未明應機接物觸事未能無礙更望有以提誨使卒有所至庶無玷於法席矣

承諭自到城中著衣喫飯抱子弄孫色色仍舊既亡拘滯之情亦不作奇特之想宿習舊障亦稍輕微三復斯語歡喜踊躍此乃學佛之驗也儻非過量大人於一笑中百了千當則不能知吾家果有不傳之妙若不爾者疑怒二字法門盡未來際終不能壞使太虛空爲雲門口草木瓦石皆放光明助說道理亦不奈何方信此段因緣不可傳不可學須是自證自悟自肯自休方始徹頭公今一笑頓亡所得夫復何言黃面老子曰不取衆生所言說一切有爲虛妄事雖復不依言語道亦復不著無言說來書所說既亡拘滯之情亦不作奇特之想暗與黃面老子所言契合卽是說者名爲佛說離是說者卽波旬說山野平昔有大誓願寧以此身代一切衆生受地獄苦終不以此口將佛法以爲入情瞎一切人眼公既到慙麼田地自知此事不從人

得。但且仍舊。更不須問。大法明未明。應機礙不礙。若作是念。則不仍舊矣。承過夏後。方可復出。甚愜病僧意。若更熱荒馳求不歇。則不相當也。前日見公歡喜之甚。以故不敢說破。恐傷言語。今歡喜既定。方敢指出。此事極不容易。須生慚愧。始得。往往利根上智者。得之不費力。遂生容易心。便不修行。多被目前境界奪將去。作主宰。不得。日久月深。迷而不返。道力不能勝業力。魔得其便。定為魔所攝持。臨命終時。亦不得力。千萬記取前日之語。理則頓悟。乘悟併銷。事非頓除。因次第盡。行住坐臥。切不可忘了。其餘古人種種差別言句。皆不可以為實。然亦不可以為虛。久久純熟。自然默默契自本心矣。不必別求殊勝奇特也。昔水潦和尚。於採藤處。問馬祖。如何是祖師西來意。祖云。近前來。向爾道。水潦纔近前。馬祖攔臂一踢。蹋倒。水潦不覺起來。拍手呵呵大笑。祖曰。汝見箇甚麼道理。便笑。水潦曰。百千法門。無量妙義。今日於一毛頭上。盡底識得根源去。馬祖便不管他。雪峯知鼓山緣熟。一日忽然。驀曾擒住。曰。是甚麼。鼓山釋然了悟。了心便亡。唯微笑。舉手搖曳而已。雪峯曰。子作道理耶。鼓山復搖手曰。和尚何道理之有。雪峯便休去。蒙山道明禪師。趁盧行者。至大庾嶺。奪衣鉢。盧公擲於石上。曰。此衣表信。可力爭耶。任公將去。明舉之不動。乃曰。我求法。非為衣鉢也。願行者開示。盧公曰。不思善。不思惡。正當恁麼時。那箇是上座。本來面目。明當時大悟。通身汗流。泣淚作禮曰。上來密語密意。外。還更有。意旨否。盧公曰。我今為汝說者。即非密意。汝若返照自己面目。密却在汝邊。我若說得。即不密也。以三尊宿三段因緣。較公於一笑中。釋然。優劣何如。請自斷看。還更別有奇特道理麼。若更別有。則却似不曾釋然也。但知作佛。莫愁佛不解語。古來得道之士。自己既充足。推己之餘。應機接物。

如明鏡當臺。明珠在掌。胡來胡現。漢來漢現。非著意也。若著意。則有實法與人矣。公欲大法明。應機無滯。但且仍舊。不必問人。久久自點頭矣。臨行面稟之語。請書於座右。此外別無說。縱有說於公。分上盡成剩語矣。葛藤太多。姑置是事。

又

祁。比蒙誨答。備悉深旨。祁自有驗者三。一。事無逆順。隨緣即應。不留智中。二。宿習濃厚。不加排遣。自爾輕微。三。古人公案。舊所茫然。時復瞥地。此非自昧者。前書大法未明之語。蓋恐得少為足。當擴而充之。豈別求勝解耶。淨除現流。理則不無。敢不銘佩。

信後益增瞻仰。不識日來隨緣放曠。如意自在否。四威儀中。不為塵勞所勝否。寤寐二邊。得一如否。於仍舊處。無走作否。於生死心。不相續否。但盡凡情。別無聖解。公既一笑。豁開正眼消息。頓亡得力。不得力。如人飲水。冷煖自知矣。然日用之間。當依黃面老子所言。剷其正性。除其助因。違其現業。此乃了事漢。無方便。中真方便。無修證。中真修證。無取捨。中真取捨也。古德云。皮膚脫落盡。唯一真實在。又如梅檀。繁柯脫落盡。唯真梅檀在。斯違現業。除助因。剷正性之極致也。公試思之。如此說話。於了事漢分上。大似一柄臘月扇子。恐南地寒暄不常。也少不得一笑。

答江給事 少明

人生一世。百年光陰。能有幾許。公白屋起家。歷盡清要。此是世間第一等受福底人。能知慙愧。回心向道。學出世間脫生死法。又是世間第一等討便宜底人。須是急著手脚。冷却面皮。不得受人差排。自家理會本命元辰。教去處分明。便是世間出世間一箇了事底大丈夫也。承連日

去與參政道話甚善甚善此公歇得馳求心得言語道斷心行處滅差別異路覩見古人脚手不被古人方便文字所羅籠山僧見渠如此所以更不會與之說一字恐鈍置佗直候渠將來自要與山僧說話方始共渠眉毛厮結理會在不只恁麼便休學道人若馳求心不歇縱與之眉毛厮結理會何益之有正是癡狂外邊走耳古人云親近善者如霧露中行雖不濕衣時時有潤但頻與參政說話至禱至禱不可將古人垂示言教胡亂穿鑿如馬大師遇讓和尚說法云譬牛駕車車若不行打車即是打牛即是馬師聞之言下知歸遮幾句兒言語諸方多少說法如雷如霆如雲如雨底理會不得錯下名言隨語生解見與舟峯書尾杜撰解注山僧讀之不覺絕倒可與說如來禪祖師禪底一狀領過一道行道也來頌子細看過却勝得前日兩頌自此可已之頌來頌去有甚了期如參政相似渠豈是不會做頌何故都無一字乃識法者懼耳間或露一毛頭自然抓著山僧痒處如出山相頌云到處逢人薦面欺之語可與叢林作點眼藥公異日自見矣不必山僧注破也某近見公頓然改變爲此事甚力故作此書不覺縷縷

答富樞密 季申

示諭蚤歲知信向此道晚年爲知解所障未有一悟入處欲知日夕體道方便既荷至誠不敢自外據款結案葛藤少許只遮求悟入底便是障道知解了也更別有甚麼知解爲公作障畢竟喚甚麼作知解知解從何而至被障者復是阿誰只此一句顛倒有三自言爲知解所障是一自言未悟甘作迷人是一更在迷中將心待悟是一只遮三顛倒便是生死根本直須一念不生顛倒心絕方知無迷可破無悟可待無知解可障如人飲水冷煖自知久久自然不作遮

般見解也但就能知知解底心上看還障得也無能知知解底心上還有如許多般也無從上大智慧之士莫不皆以知解爲儔侶以知解爲方便於知解上行平等慈於知解上作諸佛事如龍得水似虎靠山終不以此爲惱只爲佗識得知解起處既識得起處即此知解便是解脫之場便是出生死處既是解脫之場出生死處則知底解底當體寂滅知底解底既寂滅能知知解者不可不寂滅菩提涅槃真如佛性不可不寂滅更有何物可障更向何處求悟入釋迦老子曰諸業從心生故說心如幻若離此分別則滅諸有趣僧問大珠和尚如何是大涅槃珠云不造生死業是大涅槃僧云如何是生死業珠云求大涅槃是生死業又古德云學道人一念計生死即落魔道一念起諸見即落外道又淨名云乘魔者樂生死菩薩於生死而不捨外道者樂諸見菩薩於諸見而不動此乃是以知解爲儔侶以知解爲方便於知解上行平等慈於知解上作諸佛事底樣子也只爲佗了達三祇劫空生死涅槃俱寂靜故既未到遮箇田地切不可被邪師輩胡說亂道引入鬼窟裏閉眉合眼作妄想邇來祖道衰微此流如麻似粟真是一盲引衆盲相牽入火坑深可憐愍願公硬著脊梁骨莫作遮般去就作遮般去就底雖暫拘得箇臭皮袋子住便以爲究竟而心識紛飛猶如野馬縱然心識暫停如石壓草不覺又生欲直取無上菩提到究竟安樂處不亦難乎某亦嘗爲此流所誤後來若不遇真善知識幾致空過一生每每思量直是耐耐以故不惜口業力救此弊今稍有知非者若要徑截理會須得遮一念子曝地一破方了得生死方名悟入然切不可存心待破若存心在破處則永劫無有破時但將妄想顛倒底心思量分別底心好生惡死底心知見解會底心欣靜厭鬧底心一時

按下只就按下處看箇話頭。僧問趙州：狗子還有佛性也無？州云：無。此一字子，乃是摧許多惡知惡覺底器仗也。不得作有無會，不得作道理會，不得向意根下思量卜度，不得向揚眉瞬目處揅根，不得向語路上作活計，不得颺在無事甲裏，不得向舉起處承當，不得向文字中引證。但向十二時中，四威儀內，時時提撕，時時舉覺。狗子還有佛性也無？云：無。不離日用，試如此做工夫。看月十日，便自見得也。一郡千里之事，都不相妨。古人云：我這裏是活底祖師意，有甚麼物能拘執他？若離日用，別有趣向，則是離波求水，離器求金，求之愈遠矣。

又

竊知日來以此大事因緣為念，勇猛精進，純一無雜，不勝喜躍。能二六時中，熾然作為之際，必得相應也。未寤寐二邊得一如也。未如未切不可一向沈空趣寂。古人喚作黑山下鬼家活計，盡未來際，無有透脫之期。昨接來誨，私慮左右必已耽著靜勝三昧，及詢直閣公，乃知果如所料。大凡涉世有餘之士，久膠於塵勞中，忽然得人指令，向靜默處做工夫，乍得智中無事，便認著以為究竟安樂，殊不知似石壓草，雖暫覺絕消息，奈何根株猶在。寧有證徹寂滅之期，要得真正寂滅現前，必須於熾然生滅之中，驀地一跳跳出，不動一絲毫，便攬長河為酥酪，變大地作黃金。臨機縱奪，殺活自由，利他自利，無施不可。先聖喚作無盡藏陀羅尼門，無盡藏神通遊戲門，無盡藏如意解脫門，豈非真大丈夫之能事也。然亦非使然，皆吾心之常分耳。願左右快著精彩，決期於此廓徹大悟，胷中皎然如百千日月，十方世界，一念明了，無一絲毫頭異想，始得與究竟相應。果能如是，豈獨於生死路上得力，異日再秉鈞軸，致君於堯舜之上，如指諸掌耳。

又

示諭初機得少靜坐工夫亦自佳。又云：不敢妄作靜見。黃面老子所謂：譬如有人自塞其耳，高聲大叫，求人不得，真是自作障礙耳。若生死心未破，日用二六時中，冥冥蒙蒙地，如魂不散底死人一般，更討甚閑工夫。理會靜理會鬧耶。涅槃會上廣額屠兒，放下屠刀，便成佛，豈是做靜中工夫來。渠豈不是初機。左右見此，定以為不然。須差排渠作古佛示現，今人無此力量，若如是見，乃不信自殊勝，甘為下劣人也。我此門中，不論初機晚學，亦不問久參先達，若要真箇靜，須是生死心破，不著做工夫，生死心破，則自靜也。先聖所說：寂靜方便，正為此也。自是末世邪師輩，不會先聖方便語耳。左右若信得山僧及試向鬧處看，狗子無佛性話，未說悟不悟，正當方寸擾擾時，謾提撕舉覺看，還覺靜也無？還覺得力也無？若覺得力，便不須放捨，要靜坐時，但燒一炷香，靜坐，坐時不得令昏沈，亦不得掉舉昏沈掉舉。先聖所說：靜坐時，纔覺此兩種病現前，但只舉狗子無佛性話，兩種病不著用力排遣，當下怙怙地矣。日久月深，纔覺省力，便是得力處也。亦不著做工夫，只遮便是工夫也。李參政頃在泉南，初相見時，見山僧力排默照，邪禪瞎人眼，渠初不平，疑怒相半。驀聞山僧頌庭前栢樹子話，忽然打破泰桶，於一笑中，千了百當。方信山僧開口見膽，無秋毫相欺，亦不是爭人。我便對山僧懺悔。此公現在彼請試問之，還是也無。道謙上座已往福唐，不識已到彼否。此子參禪喫辛苦更多，亦嘗十餘年入枯禪，近年始得箇安樂處，相見時試問渠如何做工夫。曾為浪子偏憐客，想必至誠吐露也。

答李參政別紙 漢老

富樞頃在三衢時嘗有書來問道因而打葛藤一上落草不少尙爾滯在默照處定是遭邪師引入鬼窟裏無疑今又得書復執靜坐爲佳其滯泥如此如何參得徑山禪今次答渠書又復縷縷葛藤不惜口業痛與剷除又不知肯回頭轉腦於日用中看話頭否先聖云寧可破戒如須彌山不可被邪師熏一邪念如芥子許在情識中如油入麪永不可出此公是也如與之相見試取答渠底葛藤一觀因而作箇方便救取此人四攝法中以同事攝爲最強左右當大啓此法門令其信入不唯省得山僧一半力亦使渠信得及肯離舊窟也

答陳少卿 季任

承諭欲留意此段大事因緣爲根性極鈍若果如此當爲左右賀也今時士大夫多於此事不能百了千當直下透脫者只爲根性太利知見太多見宗師纔開口動舌早一時會了也以故返不如鈍根者無許多惡知惡覺慕地於一機一境上一言一句下撞發便是達磨大師出頭來用盡百種神通也奈何他不得只爲他無道理可障利根者返被利根所障不能得啐地便折曝地便破假饒於聰明智解上學得於自己本分事上轉不得力所以南泉和尙云近日禪師太多竟箇癡鈍人不可得章敬和尙曰至理亡言時人不悉強習佗事以爲功能不知自性元非塵境是箇微妙大解脫門所有鑑覺不染不礙如是光明未曾休廢曩劫至今固無變易猶如日輪遠近斯照雖及衆色不與一切和合靈燭妙明非假鍛鍊爲不了故取於物象但如捏目妄起空花徒自疲勞枉經劫數若能返照無第二人舉措施爲不虧實相左右自言根鈍試如此返照看能知鈍者還鈍也無若不同光返照只守鈍根更生煩惱乃是向幻妄上重增

幻妄空花上更添空花也但相聽能知根性鈍者決定不鈍雖不得守著遮箇鈍底然亦不得捨却遮箇鈍底參取捨利鈍在人不在心此心與三世諸佛一體無二若有二則法不平等矣受教傳心俱爲虛妄求真覓實轉見參差但知得一體無二之心決定不在利鈍取捨之間則便當見月亡指直下一刀兩段若更遲疑思前算後則乃是空拳指上生實解根境法中虛捏怪於陰界中妄自囚執無有了時近年以來有一種邪師說默照禪教人十二時中是事莫管休去歇去不得做聲恐落今時往往士大夫爲聰明利根所使者多是厭惡鬧處乍被邪師輩指令靜坐却見省力便以爲是更不求妙悟只以默然爲極則某不惜口業力救此弊今稍稍有知非者願公只向疑情不破處參行住坐臥不得放捨僧問趙州狗子還有佛性也無州云無遮一字子便是箇破生死疑心底刀子也遮刀子欄柄只在當人手中教別人下手不得須是自家下手始得若捨得性命方肯自下手若捨性命不得且只管在疑不破處崖將去焉然自肯捨命一下便了那時方信靜時便是鬧時底鬧時便是靜時底語時便是默時底默時便是語時底不著問人亦自然不受邪師胡說亂道也至禱至禱昔朱世英嘗以書問雲庵真淨和尙云佛法至妙日用如何用心如何體究望慈悲指示真淨曰佛法至妙無二但未至於妙則互有長短苟至於妙則悟心之人如實知自心究竟本來成佛如實自在如實安樂如實解脫如實清淨而日用唯用自心自心變化把得使用莫問是之與非擬心思量早不是也不擬心一一天真一一明妙一一如蓮花不著水心清淨超於彼所以迷自心故作衆生悟自心自成佛而衆生卽佛佛卽衆生由迷悟故有彼此也如今學道人多不信自心不悟自心不得自

心明妙受用，不得自心安樂解脫，心外妄有禪道，妄立奇特，妄生取捨，縱修行，落外道二乘禪寂，斷見境界，所謂修行恐落斷常坑，其斷見者，斷滅却自心本妙明性，一向心外著空滯禪寂，常見者不悟，一切法空，執著世間諸有爲法，以爲究竟也。邪師輩教士大夫，攝心靜坐，事事莫管，休去歇去，豈不是將心休心，將心歇心，將心用心，若如此修行，如何不落外道二乘禪寂，斷見境界，如何顯得自心明妙受用，究竟安樂，如實清淨解脫，變化之妙，須是當人自見得，自悟得，自然不被古人言句轉，而能轉得古人言句，如清淨摩尼寶珠，置泥潦之中，經百千歲，亦不能染污，以本體自清淨故，此心亦然，正迷時爲塵勞所惑，而此心體本不會惑，所謂如蓮花不著水也。忽若悟得此心本來成佛，究竟自在，如實安樂，種種妙用，亦不從外來，爲本自具足故。黃面老子曰：無有定法名阿耨多羅三藐三菩提，亦無有定法如來可說。若確定本體實有恁麼事，又却不是也。事不獲已，因迷悟取捨故，說道理有若干，爲未至於妙者，方便語耳。其實本體亦無若干，請公只恁麼用心，日用二六時中，不得執生死佛道是有，不得撥生死佛道歸無，但只看狗子還有佛性也無。趙州云：無，切不可向意根下卜度，不可向言語上作活計，又不得向開口處承當，又不得向擊石火閃電光處會。狗子還有佛性也無，無，但只如此參，亦不得將心待悟，待休歇，若將心待悟，待休歇，則轉沒交涉矣。

又

示諭自得山野向來書之後，每遇鬧中禪避不得處，常自點檢，而未有著力工夫，只遮禪避不得處，便是工夫了也。若更著力點檢，則又却遠矣。昔魏府老華嚴云：佛法在日用處，行住坐臥處，喫茶喫飯處，語言相問處，所作所爲處，舉心動念，又却不是也。正當禪避不得處，切忌起心動念，作點檢想。祖師云：分別不生，虛明自照，又龐居士云：日用事無別，唯吾自偶，諸頭頭非取捨，處處勿張乖。朱紫誰爲號，丘山絕點埃。神通并妙用，運水及般柴。又先聖云：但有心分別計較，自心見量者，悉皆是夢。切記取禪避不得時，不得更擬心，不擬心時，一切現成，亦不用理會。利亦不用理會。鈍總不干佗利鈍之事，亦不干佗靜亂之事。正當禪避不得時，忽然打失布袋，不覺拊掌大笑矣。記取記取此事，若用一毫毛工夫取證，則如人以手撮摩虛空，只益自勞耳。應接時，但應接要得靜坐，但靜坐，坐時不得執著坐底爲究竟。今時邪師輩，多以默照靜坐爲究竟法，疑誤後昆。山野不怕結怨，力詆之以報佛恩，救末法之弊也。

答趙待制 道夫

示諭一一備悉。佛言有心者皆得作佛，此心非世間塵勞妄想心，謂發無上大菩提心。若有是心，無不成佛者。士大夫學道多自作障礙，爲無決定信故也。佛又言信爲道元功德母，長養一切諸善法，斷除疑網，出愛流，開示涅槃無上道。又云信能增長智功德，信能必到如來地。示諭鈍根未能悟徹，且種佛種子於心田。此語雖淺近，然亦深遠，但辨肯心，必不相賺。今時學道之士，往往緩處却急，急處却放緩。龐公云：一朝蛇入布衲，試問宗師，甚時節。昨日事，今日尙有記不得者，況隔陰事，豈容無忘失耶。決欲今生打教徹，不疑佛，不疑祖，不疑生，不疑死，須有決定信，具決定志，念念如救頭然，如此做將去，打未徹時，方始可說根鈍耳。若當下便自謂我根鈍，不能今生打得徹，且種佛種結緣，乃是不行欲到，無有是處。某每爲信此道者說，漸覺得日

用二六時中省力處，便是學佛得力處也。自家得力處，他人知不得，亦拈出與人看不得。盧行者謂道明上座曰：汝若返照自己本來面目，密意盡在汝邊是也。密意者便是日用得力處也。得力處便是省力處也。世間塵勞事，拈一放一，無窮無盡，四威儀內未嘗相捨，爲無始時來與之結得緣深故也。般若智慧，無始時來與之結得緣淺故也。乍聞知識說著，覺得一似難會，若是無始時來塵勞緣淺，般若緣深者，有甚難會處，但深處放教淺，淺處放教深，生處放教熟，熟處放教生，纔覺思量塵勞事時，不用著力排遣，只就思量處輕輕撥轉話頭，省無限量，亦得無限量。請公只如此崖將去，莫存心等悟，忽地自悟去，參政公想日日相會，除圍碁外，還會與說著遮般事否？若只圍碁，不會說著遮般事，只就黑白未分處，掀了盤撒了子，却問他索取那一著，若索不得，是真箇鈍根漢，姑置是事。

答許司理 壽源

黃面老子曰：信爲道元功德母，長養一切諸善法。又云：信能增長智功德，信能必到如來地。欲行千里，一步爲初，十地菩薩，斷障證法門，初從十信而入，然後登法雲地，而成正覺。初歡喜地，因信而生歡喜故也。若決定堅起脊梁骨，要做世出世間沒量漢，須是箇生鐵鑄就底方了得。若半明半暗，半信半不信，決定了不得，此事無人情，不可傳授，須是自家省發，始有趣向。分若取他人口頭辦，永劫無有歇時。千萬十二時中，莫令空過，逐日起來應用處，圓陀陀地與釋迦達磨無少異，自是當人見不徹，透不過，全身跳在聲色裏，却向裏許求出頭，轉沒交涉矣。此事亦不在久參知識，徧歷叢林，而後了得，而今有多少在叢林，頭白齒黃了不得底，又有多少乍

入叢林，一撥便轉千了百當底，發心有先後，悟時無先後。昔李文和都尉參石門慈照，一句下承當，便千了百當，皆有偈呈慈照云：學道須是鐵漢，著手心頭便判，直趣無上菩提，一切是非莫管，但從脚下崖將去，死便休，不要念後思前，亦不要生煩惱，煩惱則障道也。祝祝。

又

左右具正信，立正志，此乃成佛作祖基本也。山野因以湛然名，公道號，如水之湛然不動，則虛明自照，不勞心力，世間出世間法，不離湛然，無纖毫透漏，只以此印於一切處印定，無是無不是，一一解脫，一一明妙，一一實頭，用時亦湛然，不用時亦湛然，祖師云：但有心分別計較，自心見量者，悉皆是夢，若心識寂滅，無一動念處，是名正覺。覺既正，則於日用二六時中，見色聞聲，嗅香了味，覺觸知法，行住坐臥，語默動靜，無不湛然，亦自不作顛倒想，有想無想，悉皆清淨，既得清淨，動時顯湛然之用，不動時歸湛然之體，體用雖殊，而湛然則一也。如析梅檀，片片皆梅檀，今時有一種杜撰漢，自己脚跟下不實，只管教人攝心靜坐，坐教絕氣息，此輩名爲真可憐，惑請公，只恁麼做工夫，山野雖然如此指示，公真不得已耳。若實有恁麼做工夫底事，卽是汚染公矣。此心無有實體，如何硬收攝得住，擬收攝向甚處安著，既無安著處，則無時無節，無古無今，無凡無聖，無得無失，無靜無亂，無生無死，亦無湛然之名，亦無湛然之體，亦無湛然之用，亦無恁麼說湛然者，亦無恁麼受湛然說者，若如是見得徹去，徑山亦不虛作此號，左右亦不虛受此號，如何如何。

答劉寶學 彥倫

卽日烝源不審燕處悠然放曠自如無諸魔撓否日用四威儀內與狗子無佛性話一如否於動靜二邊能不分別否夢與覺合否理與事會否心與境皆如否老龐云心如境亦如無實亦無虛有亦不管無亦不拘不是聖賢了事凡夫若真箇作得箇了事凡夫釋迦達磨是甚麼泥團土塊三乘十二分教是甚麼熱盃鳴聲公既於此箇門中自信不疑不是小事要須生處放教熟熟處放教生始與此事少分相應耳往往士大夫多於不意中得箇瞥地處却於如意中打失了不可不使公知在如意中須時時以不如意中時節在念切不可暫忘也但得本莫愁末但知作佛莫愁佛不解語遮一著子得易守難切不可忽須教頭正尾正擴而充之然後推己之餘以及物左右所得既不滯在一隅想於日用中不著起心管帶枯心忘懷也近年已來禪道佛法衰弊之甚有般杜撰長老根本自無所悟業識茫茫無本可據無實頭伎倆收攝學者教一切人如渠相似黑漆漆地緊閉却眼喚作默而常照彥沖被此輩教壞了苦哉苦哉遮箇話若不是左右悟得狗子無佛性徑山亦無說處千萬捋下面皮痛與手段救取這箇人至懇至禱然有一事亦不可不知此公清淨自居世味澹薄積有年矣定執此爲奇特若欲救之當與之同事令其歡喜心不生疑庶幾信得及肯轉頭來淨名所謂先以欲鉤牽後令入佛智是也黃面老子云觀法先後以智分別是非審定不違法印次第建立無邊行門令諸衆生斷一切疑此乃爲物作則萬世楷模也況此公根性與左右迥不同生天定在靈運前成佛定在靈運後者也此公決定不可以智慧攝當隨所好攝以日月磨之恐自知非忽然肯捨亦不可定若肯轉頭來却是箇有力量底漢左右亦須退步讓渠出一頭始得比暉禪歸錄得渠答紫

巖老子一書山僧隨喜讀一徧讚歎歡喜累日直是好一段文章又似一篇大義末後與之下箇謹對不識左右以謂如何昔達磨謂二祖曰汝但外息諸緣內心無喘心如牆壁可以入道二祖種種說心說性俱不契一日忽然省得達磨所示要門遽白達磨曰弟子此回始息諸緣也達磨知其已悟更不窮詰只曰莫成斷滅去否曰無達磨曰子作麼生曰了了常知故言之不可及達磨曰此乃從上諸佛諸祖所傳心體汝今既得更勿疑也彥沖云夜夢晝思十年之間未能全克或端坐靜默一空其心使慮無所緣事無所託頗覺輕安讀至此不覺失笑何故既慮無所緣豈非達磨所謂內心無喘乎事無所託豈非達磨所謂外息諸緣乎二祖初不識達磨所示方便將謂外息諸緣內心無喘可以說心說性說道說理引文字證據欲求印可所以達磨一一列下無處用心方始退步思量心如牆壁之語非達磨實法忽然於牆壁上頓息諸緣卽時見月亡指便道了了常知故言之不可及此語亦是臨時被達磨拶出底消息亦非二祖實法也杜撰長老輩既自無所證便逐旋捏合雖教他人歇渠自心火熠熠晝夜不停如欠二稅百姓相似彥沖却無許多勞攘只是中得毒深只管外邊亂走說動說靜說語說默說得說失更引周易內典硬差排和會真是爲佗閑事長無明殊不思量一段生死公案未曾結絕臘月三十日作麼生折合去不可眼光欲落未落時且向閻家老子道待我澄神定慮少時却去相見得麼當此之時縱橫無礙之說亦使不著心如木石亦使不著須是當人生死心破始得若得生死心破更說甚麼澄神定慮更說甚麼縱橫放蕩更說甚麼內典外典一了一切了了一悟一切悟一證一切證如斬一結絲一斬一時斷證無邊法門亦然更無次第左右既悟

狗子無佛性話還得如此也未若未得如此直須到恁麼田地始得若已到恁麼田地當以此法門興起大悲心於逆順境中和泥合水不惜身命不怕口業拯拔一切以報佛恩方是大丈夫所爲若不如是無有是處彥冲引孔子稱易之爲道也屢遷和會佛書中應無所住而生其心爲一貫又引寂然不動與土木無殊此尤可笑也向渠道欲得不招無間業莫謗如來正法輪故經云不應住色生心不應住聲香味觸法生心謂此廣大寂滅妙心不可以色見聲求應無所住謂此心無實體也而生其心謂此心非離真而立處立處即真也孔子稱易之爲道也屢遷非謂此也屢者荐也遷者革也吉凶悔吝生乎動屢遷之旨返常合道也如何與應無所住而生其心合得成一塊彥冲非但不識佛意亦不識孔子意左右於孔子之教出沒如游園觀又於吾教深入闡域山野如此杜撰還是也無故圭峯云元亨利貞乾之德也始於一氣常樂我淨佛之德也本乎一心專一氣而致柔修一心而成道此老如此和會始於儒釋二教無偏枯無遺恨彥冲以應無所住而生其心與易之屢遷大旨同貫未敢相許若依彥冲差排則孔夫子與釋迦老子殺著買草鞵始得何故一人屢遷一人無所住想讀至此必絕倒也

答劉通判 彥冲

令兄寶學公初未嘗知管帶忘懷之事信手摸著鼻孔雖未盡識得諸方邪正而基本堅實邪毒不能侵忘懷管帶在其中矣若一向忘懷管帶生死心不破陰魔得其便未免把虛空膈截作兩處處靜時受無量樂處鬧時受無量苦要得苦樂均平但莫起心管帶將心忘懷十二時中放教蕩蕩地忽爾舊習瞥起亦不著用心按捺只就瞥起處看箇話頭狗子還有佛性也無

無正恁麼時如紅爐上一點雪相似眼辨手親者一連連得方知癩融道恰恰用心時恰恰無心用曲談名相勞直說無繁重無心恰恰用常用恰恰無今說無心處不與有心殊不是誑人語昔婆修盤頭常一食不臥六時禮佛清淨無欲爲衆所歸二十祖闍夜多將欲度之問其徒曰此徧行頭陀能修梵行可得佛道乎其徒曰我師精進如此何故不可闍夜多曰汝師與道遠矣設苦行歷於塵劫皆虛妄之本也其徒不憤皆作色厲聲謂闍夜多曰尊者蘊何德行而譏我師闍夜多曰我不求道亦不顛倒我不禮佛亦不輕慢我不長坐亦不懈怠我不一食亦不雜食我不知足亦不貪欲心無所希名之曰道婆修聞已發無漏智所謂先以定動後以智拔也杜撰長老輩教左右靜坐等作佛豈非虛妄之本乎又言靜處無失鬧處有失豈非壞世間相而求實相乎若如此修行如何契得癩融所謂今說無心處不與有心殊請公於此諦當思量看婆修初亦將謂長坐不臥可以成佛纔被闍夜多點破便於言下知歸發無漏智真是良馬見鞭影而行也衆生狂亂是病佛以寂靜波羅蜜藥治之病去藥存其病愈甚拈一放一何時是了生死到來靜鬧兩邊都用一點不得莫道鬧處失者多靜處失者少不如少與多得與失靜與鬧縛作一束送放他方世界却好就日用非多非少非靜非鬧非得非失處略提撕看是箇甚麼無常迅速百歲光陰一彈指頃便過也更有甚麼閑工夫理會得理會失理會靜理會鬧理會多理會少理會忘懷理會管帶石頭和尚云謹白參玄人光陰莫虛度遮一句子開眼也著合眼也著忘懷也著管帶也著狂亂也著寂靜也著此是徑山如此差排想杜撰長老輩別有差排處也咄且置是事

又

左右做靜勝工夫，積有年矣，不識於開眼應物處，得心地安閑否？若未得安閑，是靜勝工夫未得力也。若許久猶未得力，當求箇徑截得力處，方始不孤負平昔許多工夫也。平昔做靜勝工夫，只爲要支遣箇鬧底，正鬧時却被鬧底聒擾自家方寸，却似平昔不曾做靜勝工夫一般耳。遮箇道理只爲太近，遠不出自家眼睛裏，開眼便刺著，合眼處亦不缺少，開口便道著，合口處亦自現成，擬欲起心動念承當渠，早已蹉過十萬八千了也。直是無備用心處，遮箇最是省力。而今學此道者，多是要用力求，求之轉失，向之愈背，那堪墮在得失解路上，謂鬧處失者多，靜處失者少，左右在靜勝處，住了二十餘年，試將些子得力底來看，則箇若將椿椿地底做靜中得力處，何故却向鬧處失却，而今要得省力靜鬧一如，但只透取趙州無字，忽然透得，方知靜鬧兩不相妨，亦不著用力支撐，亦不作無支撐解矣。

答秦國太夫人

謙禪歸，領所賜教，并親書數頌，初亦甚疑之，及詢謙子細，方知不自欺，曠劫未明之事，豁爾現前，不從人得，始知法喜禪悅之樂，非世間之樂可比。山野爲國太歡喜，累日寢食俱忘，兒子作宰相，身作國夫人，未足爲貴，糞埽堆頭，收得無價之寶，百劫千生受用不盡，方始爲真貴耳。然切不得執著此貴，若執著則墮在尊貴中，不復興悲起智，憐愍有情耳。記取記取。

答張丞相 德遠

恭惟燕居阿練若，與彼上人同會一處，娛戲毗盧藏海，隨宜作佛事，少病少惱，鈞候動止萬福。

從上諸聖，莫不皆然，所謂於念念中，入一切法，滅盡三昧，不退菩薩道，不捨菩薩事，不捨大慈悲心，修習波羅蜜，未嘗休息，觀察一切佛國土，無有厭倦，不捨度衆生願，不斷轉法輪事，不廢教化衆生業，乃至所有勝願，皆得圓滿，了知一切國土差別，入佛種性，到於彼岸，此大丈夫四威儀中，受用家事耳。大居士於此力行無倦，而妙喜於此，亦作普州人，又不識還許外人插手，否聞到長沙，卽杜口毗耶，深入不二，此亦非分外法，如是故，願居士如是受用，則諸魔外道，定來作護法善神也。其餘種種差別異旨，皆自心現量境界，亦非他物也。不識居士，以爲如何。

答張提刑 曠叔

老居士所作所爲，冥與道合，但未得因地一下耳。若日用應緣，不失故步，雖未得因地一下，臘月三十日，閻家老子，亦須拱手歸降，況一念相應耶。妙喜老漢，雖未目擊，觀其行事，小大折中，無過不及，只此便是道所合處。到遮裏不用作塵勞想，亦不用作佛法想，佛法塵勞都是外事，然亦不得作外事想，但回光返照，作如是想者，從甚麼處得來，所作所爲時，有何形段，所作既辨，隨我心意，無不周旋，無有少剩，正當恁麼時，承誰恩力，如此做工夫，日久月深，如人學射，自然中的矣。衆生顛倒，迷已逐物，耽少欲味，甘心受無量苦，逐日未開眼時，未下牀時，半惺半覺時，心識已紛飛，隨妄想流蕩矣。作善作惡，雖未發露，未下牀時，天堂地獄在方寸中，已一時成就矣。及待發時，已落在第八佛不云乎，一切諸根，自心現，器身等藏，自妄想相，施設顯示，如河流，如種子，如燈，如風，如雲，剎那展轉壞，躁動如猿猴，樂不淨處，如飛蠅，無厭足，如風火，無始虛僞習氣，因如汲水輪等事，於此識得破，便喚作無人無我智，天堂地獄不在別處，只在當人

半惺半覺未下牀時方寸中並不從外來發未發覺未覺時切須照顧照顧時亦不得與之用
力爭爭著則費力矣祖不云乎止動歸止止更彌動纔覺日用塵勞中漸漸省力時便是當人
得力之處便是當人成佛作祖之處便是當人變地獄作天堂之處便是當人穩坐之處便是
當人出生死之處便是當人致君於堯舜之上之處便是當人起疲氓於凋瘵之際之處便是
當人覆蔭子孫之處到遮裏說佛說祖說心說性說玄說妙說理說事說好說惡亦是外邊事
如此等事尚屬外矣況更作塵勞中先聖所訶之事耶作好事尚不肯豈肯作不好事耶若信
得此說及永嘉所謂行亦禪坐亦禪語默動靜體安然不是虛語請依此行履始終不變易則
雖未徹證自己本地風光雖未明見自己本來面目生處已熟熟處已生矣切切記取纔覺省
力處便是得力處也妙喜老漢每與箇中人說此話往往見說得頻了多忽之不肯將爲事居
士試如此做工夫看只十餘日便自見得省力不省力得力不得力矣如人飲水冷暖自知說
與人不得呈似人不得先德云語證則不可示人說理則非證不了自證自得自信自悟處除
曾證會得已信已悟者方默默相契未證未得未信未悟者不唯自不信亦不信他人有如此
境界老居士天資近道現定所作所爲不著更易以佗人較之萬分中已省得九千九百九十
九分只缺噴地一發便了士大夫學道多不著實理會除却口議心思便茫然無所措手足不
信無措手足處正是好處只管心裏要思量得到口裏要說得分曉殊不知錯了也佛言如來
以一切譬喻說種種事無有譬喻能說此法何以故心智路絕不思議故信知思量分別障道
必矣若得前後際斷心智路自絕矣若得心智路絕說種種事皆此法也此法既明卽此明處

便是不思議大解脫境界只此境界亦不可思議境界既不可思議一切譬喻亦不可思議種
種事亦不可思議只遮不可思議底亦不可思議此語亦無著處只遮無著處底亦不可思議
如是展轉窮詰若事若法若譬喻若境界如環之無端無起處無盡處皆不可思議之法也所
以云菩薩住是不思議於中思議不可盡入此不可思議處思與非思皆寂滅然亦不得住在
寂滅處若住在寂滅處則被法界量之所管攝教中謂之法塵煩惱滅却法界量種種殊勝一
時蕩盡了方始好看庭前栢樹子麻三斤乾屎橛狗子無佛性一口吸盡西江水東山水上行
之類忽然一句下透得方始謂之法界無量回向如實而見如實而行如實而用便能於一毛
端現寶王刹坐微塵裏轉大法輪成就種種法破壞種種法一切由我如壯士展臂不借佗力
師子游行不求伴侶種種勝妙境界現前心不驚異種種惡業境界現前心不怕怖日用四威
儀中隨緣放曠任性逍遙到得遮箇田地方可說無天堂無地獄等事永嘉云亦無人亦無佛
大千沙界海中漚一切聖賢如電拂此老若不到遮箇田地如何說得出來此語錯會者甚多
苟未徹根源不免依語生解便道一切皆無撥無因果將諸佛諸祖所說言教盡以爲虛謂之
誑惑人此病不除乃莽莽蕩蕩招殃禍者也佛言虛妄淨心多諸巧見若不著有便著無若不
著此二種便於有無之間博量卜度縱識得此病定在非有非無處著到故先聖苦口叮嚀令
離四句絕百非直下一刀兩段更不念後思前坐斷千聖頂額四句者乃有無非有非無亦有
亦無是也若透得此四句了見說一切諸法實有我亦隨順與之說有且不被此實有所礙見
說一切諸法實無我亦隨順與之說無且非世間虛豁之無見說一切諸法亦有亦無我亦隨

順與之說亦有亦無，且非戲論。見說一切諸法非有非無，我亦隨順與之說，非有非無，且非相違。淨名云：外道六師所墮，汝亦隨墮，是也。士大夫學道，多不肯虛却心，聽善知識指示，善知識纔開口，渠已在言前。一時領會了也，及至教渠吐露盡，一時錯會，正好在言前領略底，又却滯在言語上，又有一種，一向作聰明，說道理，世間種種事藝，我無不會者，只有禪一般，我未曾在當官處，呼幾枚杜撰長老來，與一頓飯喫却了，教渠恣意亂說，便將心意識，記取遮杜撰說底，却去勘人一句來，一句去，謂之厮禪。末後我多一句，爾無語時，便是我得便宜了也，及至撞著箇真實明眼漢，又却不識，縱然識得，又無決定信，不肯四楞塌地放下，就師家理會，依舊要求印可，及至師家於逆順境中，示以本分鉗鎚，又却怕懼不敢親近，此等名爲可憐愍者。老居士妙年登高第起家，所在之處，隨時作利益事，文章事業皆過人，而未嘗自矜一心一意，只要退步著實理會，此段大事因緣，見其至誠不覺，切怛如許，非獨要居士識得遮般病痛，亦作勸發初心菩薩，入道之資糧也。

答汪內翰 彥章

承杜門壁觀，此息心良藥也。若更鑽故紙，定引起藏誦中無始時來生死根苗，作善根難，作障道難，無疑得息心，且息心已過去底事，或善或惡，或逆或順，都莫思量，現在事得省便省，一刀兩段，不要遲疑，未來事自然不相續矣。釋迦老子云：心不妄取過去法，亦不貪著未來事，不於現在有所住，了達三世悉空寂，但看僧問趙州狗子，還有佛性也無，州云：無，請只把閑思量底心，回在無字上，試思量看，忽然向思量不及處，得遮一念破，便是了達三世處也。了達時，安排

不得計較不得，引證不得，何以故了達處不容安排，不容計較，不容引證，縱然引證得，計較得，安排得，與了達底了沒交涉，但放教蕩蕩地，善惡都莫思量，亦莫著意，亦莫忘懷，著意則流蕩，忘懷則昏沈，不著意，不忘懷，善不是善，惡不是惡，若如此了達，生死魔何處摸，一箇汪彥章，聲名滿天下，平生安排得，計較得，引證得底，是文章，是名譽，是官職，晚年收因結果處，那箇是實，做了無限之乎者也，那一句得力，名譽既彰，與匿德藏光者，相去幾何，官職已做，到大兩制，與作秀才時，相去多少，而今已近七十歲，儘公伎倆，待要如何，臘月三十日，作麼生折合去，無常殺鬼，念念不停，雪峯真覺云：光陰倏忽，暫須臾，浮世那能得久居，出嶺年登三十二，入閩早是四旬餘，佗非不用頻頻舉，已過還須旋旋除，爲報滿城朱紫道，閻王不怕佩金魚，古人苦口叮嚀，爲甚麼事，世間愚庸之人，飢寒所迫，日用無佗念，只得身上稍煖，肚裏不飢便了，只是遮兩事，生死魔却不能爲惱，以受富貴者較之，輕重大不等，受富貴底，身上既常煖，肚裏又常飽，既不被遮兩事所迫，又却多一件不可說底無狀，以故常在生死魔網中，無由出離，除宿有靈骨，方見得徹，識得破，先聖云：瞥起是病，不續是藥，不怕念起，唯恐覺遲，佛者覺也，爲其常覺，故謂之大覺，亦謂之覺王，然皆從凡夫中做得出來，彼既丈夫，我寧不爾，百年光景，能得幾時，念念如救頭然，做好事尚恐做不辨，況念念在塵勞中而不覺也，可畏，可畏，近收呂居仁四月初書，報會叔夏劉彥禮死，居仁云：交游中，時復抽了一兩人，直是可畏，渠邇來爲此事甚切，亦以瞥地回頭，稍遲爲恨，比已作書答之云：只以末後知非底一念爲正，不問遲速也，知非底一念，便是成佛作祖底基本，破魔網底利器，出生死底路頭也，願公亦只如此做工夫，做得工夫漸

熟則日用二六時中，便覺省力矣。覺得省力時，不要放緩，只就省力處，崖將去，崖來崖去，和遮省力處，亦不知有時，不爭多也。但只看箇無字，莫管得不得，至禱至禱。

又

伏承杜門息交，世事一切闕略，唯朝夕以某向所舉話頭提撕，甚善甚善。既辨此心，當以悟爲則。若自生退屈，謂根性陋劣，更求入頭處，正是舍元殿裏問長安在甚處爾。正提撕時，是阿誰能知根性陋劣底？又是阿誰求入頭處底？又是阿誰妙喜不避口業，分明爲居士說破？只是箇汪彥章，更無兩箇，只有一箇汪彥章，更那裏得箇提撕底？知根性陋劣底，求入頭處底，來當知皆是汪彥章影子，並不干他汪彥章事。若是真箇汪彥章，根性必不陋劣，必不求入頭處，但只信得自家主人公及，並不消得許多勞攘。昔有僧問仰山禪宗頓悟，畢竟入門的意如何？山曰：此意極難。若是祖宗門下，上根上智，一聞千悟，得大總持，此根人難得，其有根微智劣，所以古德道：若不安禪靜慮，到遮裏總須茫然。僧曰：除此格外，還別有方便令學人得入也無？山曰：別有別無，令汝心不安。我今問汝，汝是甚處人？曰：幽州人。山曰：汝還思彼處否？曰：常思。山曰：彼處樓臺林苑，人馬駢闐，汝返思思底，還有許多般也無？曰：某甲到遮裏，一切不見有。山曰：汝解猶在境，信位即是。人位即不是，妙喜已是老婆心切，須著更下箇注脚。人位即是汪彥章，信位即是知根性陋劣，求入頭處底。若於正提撕話頭時，返思能提撕底，還是汪彥章否？到遮裏間，不容髮若佇思停機，則被影子惑矣。請快著精彩，不可忽不可忽，記得前書中嘗寫去，得息心且息心，已過去底事，或善或惡，或逆或順，都莫理會。現在事得省便省，一刀兩段，不要遲疑，未來

事自然不相續矣，不識會如此覷捕否？遮箇便是第一省力，做工夫處也。至禱至禱。

又

伏承第五令嗣，以疾不起，父子之情，千生百劫，恩愛習氣之所流注，想當此境界，無有是處。五濁世中，種種虛幻，無一真實，請行住坐臥，常作是觀，則日久月深，漸漸銷磨矣。然正煩惱時，子細揣摩窮詰，從甚麼處起？若窮起處，不得，現今煩惱底，却從甚麼處得來？正煩惱時，是有是無，是虛是實，窮來窮去，心無所之，要思量，但思量要哭，但哭來哭去，思量來思量去，抖擻得臟腑中許多恩愛習氣盡時，自然如冰歸水，還我箇本來無煩惱，無思量，無憂無喜底去耳。入得世間出世無餘，世間法則佛法，佛法則世間法也。父子天性一而已。若子喪而父不煩惱，不思量，如父喪而子不煩惱，不思量，還得也無？若硬止遏哭時，又不敢哭，思量時，又不敢思量，是特欲逆天理，滅天性，揚聲止響，潑油救火耳。正當煩惱時，總不是外事，且不得作外邊想。永嘉云：無明實性即佛性，幻化空身即法身，是真語實語，不誑不誑等語，恁麼見得了，要思量，要煩惱，亦不可得，作是觀者，名爲正觀。若他觀者，名爲邪觀。邪正未分，正好著力，此是妙喜決定義，無智人前莫說。

大慧普覺禪師書上終

大慧普覺禪師書下

參學 慧然錄

答夏運使

示論道契則霄壤共處，趣異則觀面楚越，誠哉是言，即此乃不傳之妙。左右發意欲作妙喜書，未操觚拂紙，已兩手分付了也。又何待堅忍究竟以俟，佗日耶。此箇道理唯證者方默默相契，難與俗子言。延平乃閩嶺佳處，左右能自調伏，不爲逆順關棧子所轉，便是大解脫人。此人能轉一切關棧子，日用活潑潑地，拘牽惹絆，佗不得，苟若直下便恁麼承當，自然無一毫毛於我作障。古德有言，佛說一切法爲度一切心，我無一切心，何用一切法。又懶融云，恰恰用心時，恰恰無心用，曲談名相勞，直說無繁重，無心恰恰用，常用恰恰無。今說無心處，不與有心殊，非特懶融如是，妙喜與左右亦在其中。其中事難拈出似人，前所謂默默相契是也。

答呂舍人 居仁

千疑萬疑只是一疑，話頭上疑破，則千疑萬疑一時破。話頭不破，則且就上面與之厮崖。若棄了話頭，却去別文字上起疑，經教上起疑，古人公案上起疑，日用塵勞中起疑，皆是邪魔眷屬。第一不得向舉起處承當，又不得思量卜度，但著意就不可思量處思量，心無所之，老鼠入牛角，便見倒斷也。又方寸若闌，但只舉狗子無佛性話，佛語祖語，諸方老宿語，千差萬別，若透得

箇無字，一時透過，不著問人，若一向問人佛語又如何，祖語又如何，諸方老宿語又如何，永劫無有悟時也。

答呂郎中 隆禮

令兄居仁，兩得書爲此事甚忙，然亦當著忙。年已六十，從官又做了，更待如何，若不早著忙，臘月三十日，如何打疊得辦。聞左右邇來亦忙，只遮著忙底，便是臘月三十日消息也。如何是佛乾屎橛，遮裏不透，與臘月三十日何異。措大家，一生鑽故紙，是事要知，博覽群書，高談闊論，孔子又如何，孟子又如何，莊子又如何，周易又如何，古今治亂又如何，被遮些言語使得來，七顛八倒，諸子百家，纔聞人舉著一字，便成卷念將去，以一事不知無恥，及乎問著佗自家屋裏事，並無一人知者，可謂終日數佗寶，自無半錢分，空來世上打一遭，脫却遮殼漏子，上天堂也不知，入地獄也不知，隨其業力，流入諸趣，並不知若是別人家裏事，細大無有不知者。士大夫讀得書多，底無明多，讀得書少，底無明少，做得官小，底人我小，做得官大，底人我大，自道我聰明靈利，及乎臨秋毫利害，聰明也不見，靈利也不見，平生所讀底書，一字也使不著。蓋從上大人丘乙巳時，便錯了也，只欲取富貴耳，取得富貴底，又能有幾人，肯回頭轉腦，向自己脚跟下推窮，我遮取富貴底，從何處來，即今受富貴底，異日却向何處去，既不知來處，又不知去處，便覺心頭迷悶，正迷悶時，亦非佗物，只就遮裏看箇話頭，僧問雲門，如何是佛門，云乾屎橛，但舉此話，忽然伎倆盡時，便悟也。切忌尋文字引證，胡亂博量注解，縱然注解得分明，說得有下落，盡是鬼家活計，疑情不破，生死交加，疑情若破，則生死心絕矣。生死心絕，則佛見法見亡矣。佛見

法見尙亡，況復更起。衆生煩惱見耶，但將迷悶底心移來乾屎橛上，一抵抵住，怖生死底心，迷悶底心，思量分別底心，作聰明底心，自然不行也。覺得不行時，莫怕落空，忽然向抵住處絕消息，不勝慶快平生，得消息絕了，起佛見法見衆生見，思量分別，作聰明，說道理，都不相妨，日用四威儀中，但常放教蕩蕩地，靜處鬧處，常以乾屎橛提撕，日往月來，水牯牛自純熟矣。第一不得向外面別起疑也。乾屎橛上疑破，則恒河沙數疑，一時破矣。前此亦嘗如此寫與居仁，比趙景明來得書，書中再來問云：不知離此別有下工夫處也無？又如舉手動足著衣喫飯，當如何體究？爲復只看話頭？爲復別有體究？又平生一大疑事，至今未了，只如死後斷滅不斷滅，如何決定見得？又不要引經論所說，不要指古人公案，只據目前直截分明，指示剖判斷滅不斷滅，實處觀渠，如此說話，返不如三家村裏省事漢，却無如許多糞壤死也，死得瞥脫，分明向佗道：千疑萬疑只是一疑，話頭上疑破，則千疑萬疑一時破，話頭不破，則且就話頭上與之厮崖，若棄了話頭，却去別文字上起疑，經教上起疑，古人公案上起疑，日用塵勞中起疑，皆是邪魔眷屬，又不得向舉起處承當，又不得思量卜度，但只著意，就不可思量處思量，心無所之，老鼠入牛角，便見倒斷也。寫得如此分曉了，又却更來切切怛怛地問：不知許多聰明知見，向甚處去也，不信道，平生讀底書，到遮裏一字也使不著，而今不得已，更爲佗放些惡氣息，若只恁麼休去，却是妙喜被渠問了，更答不得也。此書纔到，便送與渠一看，居仁自言：行年六十歲，此事未了，問渠未了底，爲復是舉手動足著衣喫飯底未了？若是舉手動足著衣喫飯底，又要如何了？佗殊不知，只遮欲了，知決定見得死後斷滅不斷滅底，便是閻家老子面前喫鐵棒底，此疑不

破流，浪生死，未有了期，向渠道，千疑萬疑只是一疑，話頭若破，死後斷滅不斷滅之疑，當下冰銷瓦解矣。更教直截分明，指示剖判斷滅不斷滅，如此見識，與外道何異？平生做許多之乎者也，要作何用，渠既許多遠地，放遮般惡氣息來熏人，妙喜不可只恁麼休去，亦放些惡氣息，却去熏佗，則箇渠教不要引經教及古人公案，只據目前直截分明，指示斷滅不斷滅實處，普志道禪師問六祖，學人自出家，覽涅槃經，近十餘載，未明大意，願師垂誨，祖曰：汝何處未了？對曰：諸行無常，是生滅法，生滅滅已，寂滅爲樂，於此疑惑。祖曰：汝作麼生疑？對曰：一切衆生皆有二身，謂色身法身也。此乃居仁同道。色身無常有生有滅，法身有常無知無覺，經云：生滅滅已，寂滅爲樂者，未審是何身寂滅？何身受樂？若色身者，色身滅時，四大分散，全是苦苦，不可言樂。若法身寂滅，卽同草木瓦石，誰當受樂？又法性是生滅之體，五蘊是生滅之用，一體五用，生滅是常，生則從體起用，滅則攝用歸體，若聽更生，卽有情之類，不斷不滅，若不聽更生，卽永歸寂滅，同於無情之物，如是則一切諸法，被涅槃之所禁伏，尙不得生，何樂之有？可與居仁一狀領過。祖師到遮裏，不能臨濟德山用事，遂放些氣息還佗云：汝是釋子，何習外道斷常邪見，而議最上乘法？據汝所解，卽色身外別有法身，離生滅，求於寂滅，又推涅槃常樂，言有身受者，斯乃執客生死，耽著世樂，汝今當知佛爲一切迷人，認五蘊和合爲自體相，分別一切法，爲外塵相，好生惡死，念念遷流，不知夢幻虛假，枉受輪回，以常樂涅槃，翻爲苦相，終日馳求，佛愍此故，乃示涅槃真樂，剎那無常樂，此樂無有受者，亦無有不受者。猶較著眼睛。豈有一體五用之名，何況更言涅槃禁伏諸法令永

不生此乃謗佛毀法居仁亦有聽吾偈曰不下無上大涅槃圓明常寂照凡愚謂之死外道執為斷諸求二乘人目以為無作盡屬情所計六十二見本妄立虛假名何為真實義居仁要見實處但看此句唯有過量人未見其人通達無取捨居仁更疑以知五蘊法及以蘊中我居仁在裏許外現衆色像花眼一音聲相人平等如夢幻救得不起凡聖見不作涅槃解亦未見二邊三際斷常應諸根用而不起用想分別一切法不起分別想劫火燒海底風鼓山相擊真常寂滅樂涅槃相如是吾今強言說令汝捨邪見只是居仁不肯捨汝勿隨言解居仁記取許汝知少分也不消得志道聞偈忽然大悟葛藤不少只遮一絡索便是直截分明指示居仁底指頭子也居仁見此若道猶是經論所說尚指古人公案若尚作如此見入地獄如箭射

答呂舍人 居仁

承日用不輟做工夫工夫熟則撞發關楔子矣所謂工夫者思量世間塵勞底心回在乾屎橛上令情識不行如土木偶人相似覺得昏但沒巴鼻可把捉時便是好消息也莫怕落空亦莫思前算後幾時得悟若存此心便落邪道佛云是法非思量分別之所能解解著即禍生知得思量分別不能解者是誰只是箇呂居仁更不得回頭轉腦也前此答隆禮書說盡禪病矣諸佛諸祖並無一法與人只要當人自信自肯自見自悟耳若只取佗人口頭說底恐誤人此事決定難言說相離心緣相離文字相能離諸相者亦只是呂居仁疑佗死後斷滅不斷滅亦只是呂居仁求直截指示者亦只是呂居仁日用二六時中或瞋或喜或思量或分別或昏沈或掉舉皆只是呂居仁只遮呂居仁能作種種奇特變化能與諸佛諸祖同游寂滅大解脫光

明海中成就世間出世間事只是呂居仁信不及耳若信得及請依此注脚入是三昧忽然從三昧起失却孃生鼻孔便是徹頭也

又

令弟子育經由出所賜教讀之喜慰可知無常迅速百歲光陰如電閃便是收因結果底時節到來也乾屎橛如何覺得沒巴鼻無滋味肚裏悶時便是好底消息也第一不得向舉起處承當又不得颺在無事甲裏不可舉時便有不舉時便無也但將思量世間塵勞底心回在乾屎橛上思量來思量去無處奈何伎倆忽然盡便自悟也不得將心等悟若將心等悟永劫不能得悟也前此答隆禮書說盡措大家病痛矣承只置在座右若依此做工夫雖未悟徹亦能分別邪正不為邪魔所障亦種得般若種子深縱今生不了來生出頭現成受用亦不費力亦不被惡業奪將去臨命終時亦能轉業況一念相應耶逐日千萬不要思量別事但只思量乾屎橛莫問幾時悟至禱至禱悟時亦無時節亦不驚群動衆即時怙怙地自然不疑佛不疑祖不疑生不疑死得到不疑之地便是佛地也佛地上本無疑無悟無迷無生無死無有無無無涅槃無般若無佛無衆生亦無恁麼說者此語亦不受亦無不受者亦無知不受者亦無恁麼說不受者居仁如是信得及佛亦只如是祖亦只如是悟亦只如是迷亦只如是疑亦只如是生亦只如是死亦只如是日用塵勞中亦只如是死後斷滅不斷滅亦只如是在朝廷作從官亦只如是宮觀在靜處亦只如是住徑山一千七百衆圍遶亦只如是編管在衡州亦只如是居仁還信得及麼信得及亦只如是信不及亦只如是畢竟如何如是如是亦只如是

左右妙年自立，便在一切人頂額上，不爲富貴所籠羅，非百劫千生願力所持，焉能致是？又能切切於此一大事，念念不退轉，有決定信，具決定志，此豈淺丈夫所能？老瞿曇云：唯此工事實，餘二則非真。請著鞭，不可忽。世間事，只遮是先聖，豈不云乎？朝聞道，夕死可矣。不知聞底是何道？到遮裏，豈容眨眼，不可更引吾道一以貫之去也。須自信自悟，說得底終是無憑據。自見得自悟得，自信得及了，說不得，形容不出，却不妨。只怕說得似，形容得似，却不見，却不悟者。老瞿曇指爲增上慢人，亦謂之誘般若人，亦謂之大妄語人，亦謂之斷佛慧命人。千佛出世，不通懺悔，若透得狗子無佛性話，遮般說話，却成妄語矣。而今不可便作妄語會。呂居仁比連收兩書，書中皆云：夏中答隆禮書，常置座右，以得爲期。又聞嘗錄呈左右，近世貴公子似渠者，如優曇鉢花時一現耳。頃在山頭，每與公說遮般話，見公眼目定動，領覽得九分九釐，只欠因地一下。爾若得因地一下了，儒卽釋，釋卽儒，僧卽俗，俗卽僧，凡卽聖，聖卽凡，我卽爾，爾卽我，天卽地，地卽天，波卽水，水卽波，酥酪醍醐攪成一味，餅盤釵釧鎔成一金，在我不在人，得到遮箇田地，由我指揮，所謂我爲法王，於法自在，得失是非，焉有罣礙，不是強爲法如是故也。此箇境界，除無垢老子，他人如何信得及，縱信得及，如何得入手，左右已信得及，已覩得見，已能分別，是邪是正，但未得入手耳。得入手時，不分老少，不在智愚，如將梵位直授凡庸，更無階級次第，永嘉所謂一超直入如來地是也，但相聽，決不相誤。

又

某萬緣休罷，日用只如此，無煩軫念，左右分上，欠少箇甚麼，在世界上，可謂千足萬足，苟能於此箇門中，翻身一擲，何止腰纏十萬貫，騎鶴上揚州而已哉。昔楊文公大年三十歲見廣慧璉公，除去礙膺之物，自是已後，在朝廷居田里，始終一節，不爲功名所移，不爲富貴所奪，亦非有意輕功名富貴道之所在，法如是故也。趙州云：諸人被十二時使，老僧使得十二時，此老此說，非是強爲，亦法如是故也。大率爲學爲道一也，而今學者，往往以仁義禮智信爲學，以格物忠恕一以貫之之類爲道，只管如博謎子相似，又如衆盲摸象，各說異端，釋不云乎？以思惟心測度如來圓覺境界，如取螢火燒須彌山，臨生死禍福之際，都不得力，蓋由此也。楊子云：學者所以修性，性卽道也。黃面老子云：性成無上道。圭峯云：作有義事，是惺悟心，作無義事，是狂亂心，狂亂由情念，臨終被業牽，惺悟不由情，臨終能轉業，所謂義者是義理之義，非仁義之義，而今看來，遮老子亦未免析虛空爲兩處，仁乃性之仁，義乃性之義，禮乃性之禮，智乃性之智，信乃性之信，義理之義亦性也，作無義事卽背此性，作有義事卽順此性，然順背在人，不在性也，仁義禮智信在性，不在人也，人有賢愚，性卽無也，若仁義禮智信在賢，而不在于愚，則聖人之道，有揀擇取舍矣，如天降雨，擇地而下矣，所以云：仁義禮智信在性，而不在人也。賢愚順背在人，而不在性也。楊子所謂修性，性亦不可修，亦順背賢愚而已。圭峰所謂惺悟狂亂是也。趙州所謂使得十二時，被十二時使是也。若識得仁義禮智信之性起處，則格物忠恕一以貫之，在其中矣。肇法師云：能天能人者，豈天人之所能哉。所以云：爲學爲道一也。大率聖人設教，不求名，不伐功，如春行花木，具此性者，時節因緣到來，各各不相知，隨其根性，大小方圓長短，或青或黃，

或紅或綠、或臭或香、同時發作、非春能大、能小、能方能圓、能長能短、能青能黃、能紅能綠、能臭能香、此皆本有之性、遇緣而發耳、百丈云、欲識佛性義、當觀時節因緣、時節若至、其理自彰、又讓師謂馬師曰、汝學心地法門、如下種子、我說法要、譬彼天澤、汝緣合故、當見其道、所以云、聖人設教、不求名不伐功、只令學者見性成道而已、無垢老子云、道在一芥則一芥重、道在天下則天下重、是也、左右嘗升無垢之堂、而未入其室、見其表而未見其裏、百歲光陰、只在一刹那間、刹那間悟去、如上所說者、皆非實義、然既悟了、以為實亦在我、以為非實亦在我、如水上的葫蘆、無人動著、常蕩蕩地、觸著便動、捺著便轉、轉地、非是強為、亦法如是故也、趙州狗子無佛性話、左右如人捕賊、已知窩盤處、但未捉著耳、請快著精彩、不得有少間斷、時時向行住坐臥處、看讀書史處、修仁義禮智信處、侍奉尊長處、提誨學者處、喫粥喫飯處、與之厮崖、忽然打失布袋、夫復何言。

答宗直閣

示論應緣日涉、差別境界、未嘗不在佛法中、又於日用動容之間、以狗子無佛性話、破除情塵、若作如是工夫、恐卒未得悟入、請於脚跟下、照顧差別境界、從甚麼處起、動容周旋之間、如何以狗子無佛性話、破除情塵、能知破除情塵者、又是阿誰、佛不云乎、衆生顛倒迷、已逐物、物本無自性、迷已者、自逐之耳、境界本無差別、迷已者、自差別耳、既日涉差別境界、又在佛法中、既在佛法中、則非差別境界、既在差別境界中、則非佛法矣、拈一放一、有甚了期、廣額屠兒、在涅槃會上、放下屠刀、立地成佛、豈有許多切切怛怛來、日用應緣處、纔覺涉差別境界時、但只

就差別處、舉狗子無佛性話、不用作破除想、不用作情塵想、不用作差別想、不用作佛法想、但只看狗子無佛性話、但只舉箇無字、亦不用存心等悟、若存心等悟、則境界也差別、佛法也差別、情塵也差別、狗子無佛性話也差別、間斷處也差別、無間斷處也差別、遭情塵惑亂、身心不安樂處也差別、能知許多差別、底亦差別、若要除此病、但只看箇無字、但只看廣額屠兒放下屠刀云、我是千佛一數、是實是虛、若作虛實商量、又打入差別境界上去也、不如一刀兩段、不得念後思前、念後思前、則又差別矣、玄沙云、此事限約不得、心思路絕、不因莊嚴、本來真靜、動用語笑、隨處明了、更無欠少、今時人不悟箇中道理、妄自涉事、涉塵處處染著、頭頭繫絆、縱悟則塵境紛紜、名相不實、便擬疑心、斂念攝事、歸空閉目、藏睛、隨有念起、旋旋破除、細想纔生、即便遏捺、如此見解、即是落空亡底外道、魂不散底死人、溟溟漠漠、無覺無知、塞耳偷鈴、徒自欺誑、左右來書云、盡是玄沙所訶底病、默照邪師埋人底坑子、不可不知也、舉話時、都不用作許多伎倆、但行住坐臥處、勿令間斷、喜怒哀樂處、莫生分別、舉來舉去、看來看去、覺得沒理路、沒滋味、心頭熱鬧時、便是當人放身命處也、記取記取、莫見如此境界、便退心、如此境界、正是成佛作祖底消息也、而今默照邪師輩、只以無言無說為極、則喚作威音那畔事、亦喚作空劫已前事、不信有悟門、以悟為誑、以悟為第二頭、以悟為方便語、以悟為接引之詞、如此之徒、謾人自謾、誤人自誤、亦不可不知、日用四威儀中、涉差別境界、覺得省力時、便是得力處也、得力處極省力、若用一毫毛氣力、支撐、定是邪法、非佛法也、但辦取長遠心、與狗子無佛性話、厮崖崖來崖去、心無所之、忽然如睡夢覺、如蓮花開、如披雲見日、到恁麼時、自然成一片矣、但日用

七顛八倒處，只看箇無字，莫管悟不悟，徹不徹，三世諸佛只是箇無事人，諸代祖師亦只是箇無事人，古德云：但於事上通無事，見色聞聲不用雙。又古德云：愚人除境不亡心，智者亡心不除境。於一切處無心，則種種差別境界自無矣。而今士大夫多是急性，便要會禪於經教上及祖師言句中，博量要說得分曉，殊不知分曉處却是不分曉底事。若透得箇無字，分曉不分曉，不著問人矣。老漢教士大夫放教鈍，便是遮箇道理也。作鈍勝狀元亦不惡，只怕挖白耳一笑。

答李參政 泰發

示論華嚴重重法界，斷非虛語，既非虛語，必有分付處，必有自肯處。讀至此嗟歎久之，士大夫平昔所學，臨死生禍福之際，手足俱露者，十常八九，考其行事，不如三家村裏省事漢，富貴貧賤，不能汨其心，以是較之，智不如愚，貴不如賤者多矣。何以故？生死禍福現前，那時不容僞故也。大參相公平昔所學，已見於行事，臨禍福之際，如精金入火，愈見明耀，又決定知華嚴重重法界，斷非虛語，則定不作佗物想矣。其餘七顛八倒，或逆或順，或正或邪，亦非佗物，願公常作此觀，妙喜亦在其中，異日相從於寂寞之濱，結當當來世香火因緣，成就重重法界，以實其事，豈小補哉。更須下箇注脚，即今遮一絡索，切忌作寓言指物會一笑。

答曾宗丞 天隱

左右天資近道，身心清淨，無佗緣作障，只遮一段，誰人能及，又能行住坐臥，以老僧所示省要處，時時提撕，休說一念相應，千了百當，便是此生打未徹，只恁麼崖到臘月三十日，閻家老子也須倒退三千里始得，何以故？爲念念在般若中，無異念無間斷故，只如道家流，以妄心存想，日久月深，尙能成功，不爲地水火風所使，況全念住在般若中，臘月三十日，豈不能轉業耶？而今人多是將有所得心學道，此是無妄想中真妄想也，但放教自在，然不得太緊，不得太緩，只恁麼做工夫，省無限心力，左右生處已熟，熟處已生，十二時中，自然不著枯心忘懷，將心管帶矣。雖未透脫，諸魔外道已不能伺其便，亦自能與諸魔外道共一手，同一眼，成就彼事而不墮其數矣。除公一人可以語此，餘人非但不能如公行履，亦未必信得及也。但於話頭上看，看來看去，覺得沒巴鼻，沒滋味，心頭悶時，正好著力，切忌隨佗去，只遮悶處，便是成佛作祖，坐斷天下人舌頭處也，不可忽，不可忽。

答王教授 大授

不識左右別後，日用如何做工夫？若是會於理性上得滋味，經教中得滋味，祖師言句上得滋味，眼見耳聞處得滋味，舉足動步處得滋味，心思意想處得滋味，都不濟事。若要直下休歇，應是從前得滋味處，都莫管佗，却去沒撈摸處，沒滋味處，試著意看，若著意不得，撈摸不得，轉覺得沒撈摸處，可把捉，理路義路，心意識都不行，如土木瓦石相似時，莫怕落空，此是當人放身命處，不可忽，不可忽，聰明靈利人，多被聰明所障，以故道眼不開，觸塗成滯，衆生無始時來，爲心意識所使，流浪生死，不得自在，果欲出生死作快活漢，須是一刀兩段，絕却心意識路頭，方有少分相應。故永嘉云：損法財，滅功德，莫不由茲心意識。欺人哉，頃蒙惠教，其中種種趣向，皆某平昔所訶底病，知是般事，屬在腦後，且向沒巴鼻處，沒撈摸處，沒滋味處，試做工夫看，如僧問趙州，狗子還有佛性也無？州云：無。尋常聰明人，纔聞舉起，便以心意識領會，博量引證，要說

得有分付處，殊不知不容引證，不容博量，不容以心意識領會，縱引證得博量得，領會得，盡是獨體前情識邊事，生死岸頭，定不得力，而今普天之下，喚作禪師長者，會得分曉底，不出左右書中，寫來底消息耳，其餘種種邪解，不在言也，密首座某與渠同在平普融會中相聚，盡得普融要領，渠自以為安樂，然所造者，亦不出左右書中消息，今始知非，別得箇安樂處，方知某無秋毫相欺，今特令去相見，無事時，試令渠吐露看，還契得左右意否，八十翁翁入場屋，真誠不是小兒戲，若生死到來，不得力，縱說得分曉，和會得，有下落，引證得無差別，盡是鬼家活計，都不干我一星事，禪門種種差別異解，唯識法者懼，大法不明者，往往多以病為藥，不可不知。

答劉侍郎 季高

示諭臘月三十日已到，要之日用，當如是觀察，則世間塵勞之心，自然銷殞矣，塵勞之心既銷殞，則來日依前孟春猶寒矣，古德云，欲識佛性義，當觀時節因緣，此箇時節，乃是黃面老子出世成佛，坐金剛座，降伏魔軍，轉法輪度眾生，入涅槃底時節，與解空所謂臘月三十日時節，無異無別，到遮裏，只如是觀，以此觀者名為正觀，異此觀者名為邪觀，邪正未分，未免隨佗時節遷變，要得不隨時節，但一時放下著，放到無可放處，此語亦不受，依前只是解空居士，更不是別人。

又

吾佛大聖人，能空一切相，成萬法智，而不能即滅定業，況博地凡夫耶，居士既是箇中人，想亦常入是三昧，昔有僧問一老宿，世界恁麼熱，未審向甚麼處回避，老宿曰，向鑊湯鑊炭裏回避，曰，只如鑊湯鑊炭裏，作麼生回避，曰，衆苦不能到，願居士日用四威儀中，只如此做工夫，老宿之言不可忽，此是妙喜得効底藥方，非與居士此道相契，此心相知，亦不肯容易傳授，只用一念相應草湯下，更不用別湯使，若用別湯使，令人發狂，不可不知也，一念相應草，不用佗求，亦只在居士四威儀中，明處明如日，黑處黑如漆，若信手拈來，以本地風光一照，無有錯者，亦能殺人，亦能活人，故佛祖常以此藥，向鑊湯鑊炭裏醫苦惱眾生，生死大病，號大醫王，不識居士還信得及否，若言我自父子不傳之祕方，不用向鑊湯鑊炭裏回避底妙術，卻望居士布施也。

答李郎中 似表

士大夫學此道，不患不聰明，患太聰明耳，不患無知見，患知見太多耳，故常行識前一步，昧卻脚跟下快活自在底消息，邪見之上者，和會見聞覺知為自己，以現量境界為心地法門，下者弄業識，認門頭戶口，簸兩片皮談玄說妙，甚者至於發狂不勒字數，胡言漢語，指東畫西，下者以默照無言空空寂寂，在鬼窟裏著到，求究竟安樂，其餘種種邪解，不在言而可知也，沖密等歸，領所賜教讀之喜慰，不可言，更不復叙世諦相酬酢，只以左右向道勇猛之志，便入葛藤，禪無德山臨濟之殊法眼，曹洞之異，但學者無廣大決定志，而師家亦無廣大融通法門，故所入差別，究竟歸宿處，並無如許差別也，示諭欲妙喜因書指示徑要處，只遮求指示徑要底一念，早是刺頭入膠盆了也，不可更向雪上加霜，雖然有問，不可無答，請左右都將平昔或自看經教話頭，或因人舉覺指示，得滋味歡喜處，一時放下，依前百不知百不會，如三歲孩兒相似。

有性識而未行，卻向未起，求徑要底一念子前頭看，看來看去，覺得轉沒巴鼻，方寸轉不寧帖。時不得放緩，遮裏是坐斷千聖頂額處，往往學道人，多向遮裏打退了，左右若信得及，只向未起，求徑要指示一念前看，看來看去，忽然睡夢覺，不是差事，此是妙喜平昔做底得力工夫，知公有決定志，故挖泥帶水，納遮一場敗闕，此外別無可指示，若有可指示，則不徑要矣。

答李寶文 茂嘉

向承示諭，性根昏鈍，而黽勉修持，終未得超悟之方，某頃在雙徑，答富季申所問，正與此問同，能知昏鈍者，決定不昏鈍，更欲向甚處求超悟，士大夫學此道，卻須借昏鈍而入，若執昏鈍，自謂我無分，則為昏鈍魔所攝矣，蓋平昔知見多，以求證悟之心，在前作障，故自己正知見不能現前，此障亦非外來，亦非別事，只是箇能知昏鈍底主人公耳，故瑞嚴和尚，居常在丈室中，自喚云，主人公，又自應云，諾，惺惺著，又自應云，諾，佗時後日，莫受人謾，又自應云，諾，諾，古來幸有恁麼勝樣，謾向遮裏提撕看，是箇甚麼，只遮提撕底，亦不是別人，只是遮能知昏鈍者耳，能知昏鈍者，亦不是別人，便是李寶文，本命元辰也，此是妙喜應病與藥，不得已略為居士指箇歸家穩坐底路頭而已，若便認定死語，真箇喚作本命元辰，則是認識神為自己，轉沒交涉矣，故長沙和尚云，學道之人，不識真，只為從前認識神，無量劫來生死本，癡人喚作本來人，前所云，借昏鈍而入是也，但只看能知得如是昏鈍底，畢竟是箇甚麼，只向遮裏看，不用求超悟，看來看去，忽地大笑去矣，此外無可言者。

答向侍郎 伯恭

示諭悟與未悟，夢與覺一，一段因緣，黃面老子云，汝以緣心聽法，此法亦緣，謂至人無夢，非有無之無，謂夢與非夢一而已，以是觀之，則佛夢金鼓，高宗夢得說，孔子夢奠兩楹，亦不可作夢與非夢解，却來觀世間，猶如夢中事，教中自有明文，唯夢乃全妄想也，而衆生顛倒，以日用目前境界為實，殊不知全體是夢，而於其中復生虛妄分別，以想心繫念神識紛飛為實夢，殊不知正是夢中說夢，顛倒中又顛倒，故佛大慈悲，老婆心切，悉能徧入一切法界，諸安立海，所有微塵，於一一塵中，以夢自在法門，開悟世界微塵數衆生，住邪定者，入正定聚，此亦普示顛倒衆生，以目前實有底境界，為安立海，令悟夢與非夢，悉皆是幻，則全夢是實，全實是夢，不可取不可捨，至人無夢之義如是而已，來書見問，乃是某三十六歲時所疑，讀之不覺抓著痒處，亦嘗以此問圓悟先師，但以手指曰，住住休妄想，休妄想，某復曰，如某未睡著時，佛所讚者，依而行之，佛所訶者，不敢違犯，從前依師，及自做工夫，零碎所得者，惺惺時，都得受用，及乎上牀半惺半覺時，已作主宰，不得夢見得金寶，則夢中歡喜無限，夢見被人以刀杖相逼，及諸惡境界，則夢中怕怖惶恐，自念此身尚存，只是睡著，已作主宰，不得沉地水火風分散，衆苦熾然，如何得不被回換，到遮裏方始著忙，先師又曰，待汝說底許多妄想絕時，汝自到寤寐恒一處也，初聞亦未之信，每日我自顧，寤與寐分明作兩段，如何敢開大口說禪，除非佛說寤寐恒一是妄語，則我此病不須除，佛語果不欺人，乃是我自未了，後因聞先師舉諸佛出身處，薰風自南來，忽然去却礙膺之物，方知黃面老子所說，是真語實語，如語，不誑語，不妄語，不欺人，真大慈悲，粉身沒命，不可報礙膺之物，既除，方知夢時便是寤時底，寤時便是夢時底，佛言寤寐恒一，

方始自知，遮般道理拈出，呈似人不得，說與人不得，如夢中境界取不得，捨不得，承問妙喜於未悟已前，已悟之後，有異無異，不覺依實供通，子細讀來教數字至誠，不是問禪，亦非見詰，故不免以昔時所疑慮吐露，願居士試將老龐語謾提撕，但願空諸所有，切勿實諸所無，先以目前日用境界作夢會了，然後却將夢中底移來目前，則佛金鼓高宗得說，孔子奠兩楹，決不是夢矣。

答陳教授 卓卿

此道寂寥，無出今日邪師說法，如惡叉聚，各自謂得無上道，咸唱邪說，幻惑凡愚，故某每每切齒於此，不惜身命，欲扶持之，使光明種子，知有吾家本分事，不墮邪見網中，萬一得衆生界中佛種不斷，亦不虛受黃面老子覆蔭，所謂將此深心奉塵刹，是則名為報佛恩，然亦是不知時不量力之一事也，左右既是箇中人，不得不說箇中事，因筆不覺及此耳。

答林判院 少瞻

示論求一語與信道人做工夫，既看圓覺經，經中豈止一語而已哉，諸大菩薩各隨自所疑慮發問，世尊據所疑，一一分明剖析，大段分曉，前所給話頭，亦在其中矣，經云：居一切時不起妄念，於諸妄心亦不息滅，住妄想境不加了知，此語最親切於無了知不辨真實，老漢昔居雲門庵時，嘗頌之曰：荷葉團團團似鏡，菱角尖尖尖似錐，風吹柳絮毛毳走，雨打梨花蛺蝶飛，但將此頌放在上面，卻將經文移來下面，頌卻是經，經卻是頌，試如此做工夫，看莫管悟不悟，心頭休熱忙，亦不可放緩，如調絃之法，緊緩得其所，則曲調自成矣，歸去但與沖叢相親，遞相琢磨，道業

無有不辨者，祝祝。

答黃知縣 子餘

收書知爲此一大事因緣，甚力大丈夫漢所作所爲，當如是耳，無常迅速，生死事大，過了一日，則銷了一日好事，可畏可畏，左右春秋鼎盛，正是作業，不識好惡時，能回此心學，無上菩提，此是世界上最難容靈利漢，五濁界中有甚麼奇特事，過如此段因緣，趁色力强健，早回頭，比臨老回頭，其力量勝百千萬億倍，老漢私爲左右喜，前此寫去法語，曾時時覷看否，第一記取，不得起心動念，肚裏熱忙急要悟，纔作此念，則被此念塞斷路頭，永不能得悟矣，祖師云：執之失度，必入邪路，放之自然，體無去住，此乃祖師吐心吐膽爲人處也，但日用費力處，莫要做此箇門中不容費力，老漢常爲人說此話，得力處乃是省力處，省力處乃是得力處，若起一念希望心，求悟入處，大似人在自家堂屋裏坐，卻問他人覓住處，無異，但把生死兩字貼在鼻尖兒上，不要忘了，時時提撕話頭，提來提去，生處自熟，熟處自生矣，此語已寫在空相道人書中，請同此書互換一看，便了得也。

答嚴教授 子卿

真實到不疑之地者，如渾鋼打就，生鐵鑄成，直饒千聖出頭來，現無量殊勝境界，見之亦如不見，況於此作奇特殊勝道理，耶昔藥山坐禪次，石頭問：子在遮裏作甚麼，藥山云：一物不爲，石頭云：恁麼則閑坐也，藥山云：閑坐則爲也，石頭然之，看佗古人，一箇閑坐也，奈何佗不得，今時學道之士，多在閑坐處打住，近日叢林無鼻孔輩，謂之默照者是也，又有一種脚跟元不曾點

地認得箇門頭戶口光影一向狂發與說平常話不得盡作禪會了似遮般底喚業識作本命元辰更是不可與語本分事也不見雲門大師有言光不透脫有兩般病一切處不明面前有物是一又透得一切法空隱隱地似物相似亦是光不透脫又法身亦有兩般病得到法身為法執不忘已見猶存坐在法身邊是一直饒透得法身去放過即不可子細檢點來有甚麼氣息亦是病而今學實法者以透過法身為極致而雲門返以為病不知透過法身了合作麼生到遮裏如人飲水冷煥自知不著問別人問別人則禍事也所以云真實到不疑之地者如渾鋼打就生鐵鑄成是也如人喫飯飽時不可更問人我飽未飽昔黃檗問百丈從上古人以何法示人百丈只據坐黃檗云後代兒孫將何傳授百丈拂衣便起云我將謂汝是箇人遮箇便是爲人底樣子也但向自信處看還得自信底消息絕也未若自信底消息絕則自然不取佗人口頭辦矣臨濟云汝若歇得念念馳求心與釋迦老子不別不是欺人第七地菩薩求佛智心未滿足故謂之煩惱直是無爾安排處著一星兒外料不得數年前有箇許居士認得箇門頭戶口將書來呈見解云日用中空豁豁地無一物作對待方知三界萬法一切元無直是安樂快活放得下因示之以偈曰莫戀淨潔處淨潔使人困莫戀快活處快活使人狂如水之任器隨方圓短長放下不放下更請細思量三界與萬法匪歸何有鄉若只便恁麼此事大乖張爲報許居士家親作禍殃豁開千聖眼不須頻禱禳偶晨起稍涼驀然記得子卿道友初得箇入頭時尙疑恐是光影遂將從來所疑公案挖照方見趙州老漢敗闕處不覺信筆萬藤如許

答張侍郎 子簡

左右以自所得警脫處爲極則纔見涉理路入泥入水爲人底便欲掃除使滅蹤跡見某所集正法眼藏便云臨濟下有數箇庵主好機鋒何不收入如忠國師說義理禪教壞人家男女決定可刪左右見道如此諦當而不喜忠國師說老婆禪坐在淨淨潔潔處只愛擊石火閃電光一著子此外不容一星兒別道理真可惜耳故某盡力主張若法性不寬波瀾不闊佛法知見不立生死命根不斷則不敢如此四楞著地入泥入水爲人蓋衆生根器不同故從上諸祖各立門戶施設備衆生機隨機攝化故長沙岑大蟲有言我若一向舉揚宗教法堂前須草深一丈倩人看院始得既落在遮行戶裏被人喚作宗師須備衆生機說法如擊石火閃電光一著子是遮般根器方承當得根器不是處用之則振苗矣某豈不曉警脫一椎便七穿八穴是性燥所以集正法眼藏不分門類不問雲門臨濟曹洞瀉仰法眼宗但有正知正見可以令人悟入者皆收之見忠國師大珠二老宿禪備衆體故收以救此一類根器者左右書來云決定可刪觀公之意正法眼藏盡去除諸家門戶只收似公見解者方是若爾則公自集一書化大根器者有何不可不必須教妙喜隨公意去之若謂忠國師說挖泥帶水老婆禪便絕後則如巖頭睦州烏臼汾陽無業鎮州普化定上座雲峯悅法昌遇諸大老合兒孫滿地今亦寂然無主化者諸公豈是挖泥帶水說老婆禪乎然妙喜主張國師無垢破除初不相妨也

答徐顯謨 稚山

左右頻寄聲妙喜想只是要調伏水牯牛捏殺遮糊獅子耳此事不在久歷叢林飽參知識只

貴於一言一句下直截承當，不打之邊爾據實而論，間不容髮，不得已說箇直截，已是紆曲了也。說箇承當，已是踉過了也。況復牽枝引蔓，舉經舉教，說理說事，欲究竟耶？古德云：但有纖毫，即是塵。水牯牛未調伏，糊搥子未死，縱說得恒沙道理，並不干我一星兒事。然說得說不得，亦非外邊事。不見江西老宿有言：說得亦是汝心，說不得亦是汝心。決欲直截擔荷，見佛見祖，如生冤家，方有少分相應。如此做工夫，日久月深，不著起心求悟。水牯牛自調伏，糊搥子自死矣。記取記取，但向平昔心意，湊泊不得處，取不得處，捨不得處，看箇話頭，僧問雲門：如何是佛？門云：乾屎橛。看時不用將平昔聰明靈利，思量卜度，擬心思量，十萬八千未是遠，莫是不思量，不計較，不擬心，便是麼？咄，更是箇甚麼，且置是事。

答楊教授 彥候

左右強項中，却有不可思議底柔和，致一言之下，千了百當，此事殊勝。若不問於強項中，打發得幾人佛法，豈到今日，非有般若根性，則不能如是。盛事盛事，示諭欲來年春夏間棹無底船，吹無孔笛，施無盡供，說無生話，要了無窮，無始不有不無，巴鼻，但請來與遮無面目漢商量，定不錯了遮話，又承雷道號，政欲相塗糊，可稱快然居士。故真淨老人云：快然大道只在目前，縱橫十字，擬而留連，便是此義也。某只在長沙作久住計，左右佗日果從此來，則林下不寂寞也。

答樓樞密

不識別後日用應緣處，不被外境所奪否？視堆案之文，能撥置否？與物相遇時，能動轉否？住寂靜處，不妄想否？體究箇事，無雜念否？故黃面老子有言：心不妄取，過去法，亦不貪著未來事，不

於現在有所住了。達三世悉空寂，過去事或善或惡，不須思量，思量則障道矣。未來事不須計較，計較則狂亂矣。現在事到面前，或逆或順，亦不須著意，著意則擾方寸矣。但一切臨時隨緣酬酢，自然合著遮箇道理。逆境界易打，順境界難打。逆我意者，只消一箇忍字，定省少時便過了。順境界直是無備回避處，如磁石與鐵相偶，彼此不覺合作一所，無情之物尙爾，況現行無明，全身在裏許作活計者，當此境界若無智慧，不覺不知，被佗引入羅網，却向裏許要求出路，不亦難乎？所以先聖云：入得世間，出世無餘，便是遮箇道理也。近世有一種修行，失方便者，往往認現行無明，爲入世間，便將出世間法，強差排作出世無餘之事，可不悲乎？除夙有誓願，即時識得破，作得主，不被佗牽引，故淨名有言：佛爲增上慢人，說離婬怒癡爲解脫耳。若無增上慢者，佛說婬怒癡性即是解脫，若免得此過，於逆順境界中，無起滅相，始離得增上慢名字，恁麼方可作入得世間，謂之有力量漢。已上所說，都是妙喜平昔經歷過底，卽今日用亦只如此修行，願公趁色力強健，亦入是三昧，此外時時以趙州無字提撕，久久純熟，驀然無心撞破漆桶，便是徹頭處也。

又

日用工夫，前書已葛藤不少，但只依舊不變不動，物來則與之酬酢，自然物我一如矣。古德云：放曠任其去住，靜鑑覺其源流，語證則不可示人，說理則非證不了，自證自得處，拈出呈似人，不得唯親證親得者，略露目前些子，彼此便默默相契矣。示諭自此不被人謾，不錯用工夫矣。大槩已正，欄柄已得，如善牧牛者，索頭常在手中，爭得犯人苗稼，驀地放却，索頭鼻孔無撈摸。

處平田淺草一任縱橫慈明老人所謂四方放去休攔遏八面無拘任意游要收只在索頭撥未能如是當緊把索頭且與順摩拈淹浸工夫既熟自然不著用意隄防矣工夫不可急急則躁動又不可緩緩則昏怛矣忘懷著意俱蹉過譬如擲劍揮空莫論及之不及昔嚴陽尊者問趙州一物不將來時如何州云放下著嚴陽云一物既不將來放下箇甚麼州云放不下擔取去嚴陽於言下大悟又有僧問古德學人奈何不得時如何古德云老僧亦奈何不得僧云學人在學地故是奈何不得和尚是大善知識爲甚麼亦奈何不得古德云我若奈何得則便拈却爾遮不奈何僧於言下大悟二僧悟處即是樓樞密迷處樓樞密疑處即是二僧問處法從分別生還從分別滅滅諸分別法是法無生滅細觀來書病已去盡別證候亦不生矣大段相近亦漸省力矣請只就省力處放教蕩蕩地忽然啐地破囉地斷便了千萬勉之

答曹太尉 功顯

某雖年運而往矣不敢不勉強力以此事與衲子輩激揚一日粥後撥牌子輪一百人入室間有負命者上鉤來亦有咬人師子以此法喜禪悅爲樂殊不覺倦亦造物見憐耳左右福慧兩全日在至尊之側而留意此段大事因緣真不可思議事釋迦老子曰有勢不臨難豪貴學道難非百劫千生曾承事善知識種得般若種子深焉能如是信得及只遮信得及處便是成佛作祖底基本也願公只向信得及處覷捕久久自透脫矣然第一不得著意安排覓透脫處若著意則蹉過也釋迦老子又曰佛道不思議誰能思議佛又佛問文殊師利曰汝入不思議三昧耶文殊曰弗也世尊我即不思議不見有心能思議者云何而言入不思議三昧我初發

心欲入是定如今思惟實無心想而入三昧如人學射久習則巧後雖無心以久習故箭發皆中我亦如是初學不思議三昧繫心一緣若久習成就更無心想常與定俱佛與祖師所受用處無二無別近年叢林有一種邪禪以閉目藏睛瞽盧都地作妄想謂之不思議事亦謂之威音那畔空劫已前事纔開口便喚作落今時亦謂之根本上事亦謂之淨極光通達以悟爲落在第二頭以悟爲枝葉邊事蓋渠初發步時便錯了亦不知是錯以悟爲建立既自無悟門亦不信有悟者遮般底謂之謗大般若斷佛慧命千佛出世不通懺悔左右具驗人眼久矣似此等輩披却師子皮作野干鳴不可不知某與左右雖未承顏接論此心已默默相契多年矣前此答字極不如禮今專遣法空禪人代往致敬故不暇入善思惟三昧只恁麼信手信意不覺葛藤如許聊謝不敏而已

答榮侍郎 茂實

承留心欲究竟此一段大事因緣既辨此心第一不要急急則轉遲矣又不得緩緩則怠墮矣如調琴之法緊緩要得中方成曲調但向日用應緣處時時覷捕我遮能與人決斷是非曲直底承誰恩力畢竟從甚麼處流出覷捕來覷捕去平昔生處路頭自熟生處既熟則熟處却生矣那箇是熟處五陰六入十二處十八界二十五有無明業識思量計較心識晝夜熠熠如野馬無暫停息底是遮一絡索使得人流浪生死使得人做不好事遮一絡索既生則菩提涅槃真如佛性便現前矣當現前時亦無現前之量故古德契證得了便解道應眼時若千日萬象不能逃影質應耳時若幽谷大小音聲無不足如此等事不假佗求不借佗力自然向應緣處

活鱖鱖地未得如此且將遮思量世間塵勞底心回在思量不及處試思量看那箇是思量不及處僧問趙州狗子還有佛性也無州云無只遮一字儘備有甚麼伎倆請安排看請計較看思量計較安排無處可以頓放只覺得肚裏悶心頭煩惱時正是好底時節第八識相次不行矣覺得如此時莫要放却只就遮無字上提撕提撕不提撕去生處自熟熟處自生矣近年以來叢林中有一種唱邪說爲宗師者謂學者曰但只管守靜不知守者是何物靜者是何人却言靜底是基本却不信有悟底謂悟底是枝葉更引僧問仰山曰今時人還假悟也無仰山曰悟則不無爭奈落在第二頭癡人面前不得說夢便作實法會謂悟是落第二頭殊不知瀉山自有警覺學者之言直是痛切曰研窮至理以悟爲則此語又向甚處著不可瀉山疑誤後人要教落在第二頭也曹閣使亦留心此事恐其被邪師輩所誤比亦如此書切切但但寫與此公聰明識見皆有大過人處決不到錯認方便語作實法會但某未得與之目擊私憂過計耳聞老居士亦與之是道友因筆不覺葛藤無事相見時試問渠取書一看方知妙喜相期不在眼底彼此氣義相投又非勢利之交寫了一紙紙盡又添一紙不暇更事形迹此書亦如是前書託是箇中人故曰切不可道老老大大著甚來由若如此則好事在面前定放過矣寫時雖似率易然亦機感相投亦不覺書在紙上荷公信得妙喜及便把做事日用應緣處便恢張此箇法門以報聖主求賢安天下之意真不負其所知也願種種堪忍始終只如今日做將去佛法世法打作一片且耕且戰久久純熟一舉而兩得之豈非腰纏十萬貫騎鶴上揚州乎。

又

示諭鐘鳴漏盡之譏爲君上盡誠而下安百姓自有聞絃賞音者願公凡事堅忍當逆順境政好著力所謂將此深心奉塵刹是則名爲報國恩平昔學道只要於逆順界中受用逆順現前而生苦惱大似平昔不曾向箇中用心祖師曰境緣無好醜好醜起於心若不強名妄情從何起妄情既不起真心任徧知請於逆順境中常作是觀則久久自不生苦惱苦惱既不生則可以驅魔王作護法善神矣前此老老大大著甚來由之說言猶在耳豈忘之耶欲識佛性義當觀時節因緣以居士前十餘載閑自有閑時時節今日仕權在手便有忙底時節當念閑時是誰閑忙時是誰忙須信忙時却有閑時道理閑時却有忙時道理政在忙中當體主上起公之意頃刻不可暫忘自警自察何以報之若常作是念則鑊湯鎗炭刀山劔樹上亦須著向前況目前些小逆順境界耶與公以此道相契故不留情淨盡吐露。

答黃門司 節夫

收書并許多葛藤不意便解如此拈弄直是弄得來活鱖鱖地真是自證自得者可喜可喜但只如此從教人道遮官人不依本分亂說亂道佗家自有通人愛除是會證會悟者方知若是聽響之流一任佗鑽龜打瓦更批判得如來禪祖師禪好儘契得妙喜拄杖也且道是賞伊罰伊一任諸方更疑三十年。

答孫知縣

蒙以所修金剛經相示幸得隨喜一徧近世士大夫肯如左右留心內典者實爲希有不得意趣則不能如是信得及不具看經眼則不能窺測經中深妙之義真火中蓮也詳味久之不能

無疑耳。左右詆諸聖師翻譯失真，而汨亂本真，文句增減，違背佛意。又云：自始持誦，即悟其非，欲求定本，是正舛差，而習僞已久，雷同一律，暨得京師藏本，始有據依，復考釋天親無著論頌，其義昭合，遂泮然無疑。又以長水孤山二師，皆依句而違義，不識左右敢如是批判，則定嘗見六朝所譯梵本，盡得諸師翻譯錯謬，方始泮然無疑。既無梵本，便以臆見刊削聖意，則且未論招因帶果，毀謗聖教，墮無間獄，恐有識者見之，却如左右檢點諸師之過，還著於本人矣。古人有言：交淺而言深者，招尤之道也。某與左右素昧平生，左右以此經求印證，欲流布萬世，於衆生界中，種佛種子，此是第一等好事，而又以某爲箇中人，以箇中消息，相期於形器之外，故不敢不上稟。昔清涼國師造華嚴疏，欲正譯師訛舛，而不得梵本，但書之于經尾而已。如佛不思議法品中，所謂一切佛，有無邊際，身色相清淨，普入諸趣，而無染著，清涼但云佛不思議法品，上卷第三葉第十行，一切諸佛舊脫諸字，其餘經本脫落，皆注之于經尾。清涼亦聖師也，非不能添入及減削，止敢書之于經尾者，識法者懼也。又經中有大瑠璃寶，清涼曰：恐是吠瑠璃，舊本錯寫，亦不敢改，亦只如此注之經尾耳。六朝翻譯諸師，非皆淺識之士，翻譯場有譯語者，有譯義者，有潤文者，有證梵語者，有正義者，有唐梵相校者，而左右尙以爲錯譯聖意，左右既不得梵本，便妄加刊削，却要後世人諦信，不亦難乎。如論長水依句而違義，無梵本證，如何便決定以其爲非，此公雖是講人，與佗講人不同。嘗參琅琊廣照禪師，因請益琅琊首楞嚴中，富樓那問佛清淨本然，云何忽生山河大地之義，琅琊遂抗聲云：清淨本然，云何忽生山河大地，長水於言下大悟，後方披襟自稱座主。蓋座主多是尋行數墨，左右所謂依句而不依義，長水非

無見識，亦非尋行數墨者，不以具足相故得阿耨菩提，經文大段分明，此文至淺至近，自是左右求奇太過，要立異解，求人從己耳。左右引無著論云：以法身應見如來，非以相具足故。若爾如來雖不應以相具足見，應相具足爲因，得阿耨菩提，爲離此著故。經言：須菩提於意云何，如來可以相成就得阿耨菩提，須菩提莫作是念等者，此義明相具足體非菩提，亦不以相具足爲因也。以相是色自性故，此論大段分明，自是左右錯見錯解爾。色是相緣起，相是法界緣起，梁昭明太子謂莫作是念如來不以具足相故得阿耨菩提，三十二分中，以此分爲無斷無滅分，恐須菩提不以具足相則緣起滅矣。蓋須菩提初在母胎，即知空寂，多不住緣起相，後引功德施菩薩論末後，若相成就，是真實有此相滅時，即名爲斷，何以故，以生故有斷，又怕人不會，又云：何以故一切法是無生性，所以遠離斷常二邊，遠離二邊，是法界相，不說性而言相，謂法界是性之緣起故也。相是法界緣起故，不說性而言相，梁昭明所謂無斷無滅是也。此段更分明，又是左右求奇太過，強生節目爾。若金剛經可以刊削，則一大藏教凡有看者，各隨臆解，都可刊削也。如韓退之指論語中畫字爲畫字，謂舊本差錯，以退之之見識，便可改了，而只如此論，在書中何也，亦是識法者懼爾。圭峯密禪師造圓覺疏鈔，密於圓覺有證悟處，方敢下筆，以圓覺經中一切衆生皆證圓覺，圭峯改證爲具，謂譯者之訛，而不見梵本，亦只如此論在疏中，不敢便改正經也。後來泐譚真淨和尚，撰皆證論，論內痛罵圭峯，謂之破凡夫臊臭漢，若一切衆生皆具圓覺，而不證者，畜生永作畜生，餓鬼永作餓鬼，盡十方世界都盧是箇無孔鐵鎚，更無一人發真歸元，凡夫亦不須求解脫，何以故一切衆生皆已具圓覺，亦不須求證故。左右以

京師藏經本爲是，遂以京本爲據。若京師藏本從外州府納入，如徑山兩藏經，皆是朝廷盛時賜到，亦是外州府經生所寫，萬一有錯，又卻如何改正？左右若無人，我定以妙喜之言爲至誠，不必泥在古今一大錯上。若執己見爲是，決欲改削，要一切人唾罵，一任刊版印行，妙喜也只得隨喜讚歎而已。公既得得遣人以經來求印，可雖不相識，以法爲親，故不覺切切但相觸忤，見公至誠，所以更不留情。左右決欲窮教乘造與義，當尋一名行講師，一心一意與之參詳，教徹頭徹尾，一等是留心教網也。若以無常迅速生死事大，已事未明，當一心一意尋一本分作家，能破人生死窠窟者，與伊著死工夫，厩崖忽然打破，泰桶便是徹頭處也。若只是要資談柄，道我博極群書，無不通達，禪我也會，教我也會，又能檢點得前輩諸譯主講師不到處，這我能我解，則三教聖人都可檢點，亦不必更求人印，可然後放行也。如何如何。

答張舍人狀元 安國

左右決欲究竟此事，但常令方寸虛豁豁地，物來卽應，如人學射，久久中的矣。不見達磨謂二祖曰：汝但外息諸緣，內心無喘，心如牆壁，可以入道。如今人纔聞此說，便差排向頑然無知處，硬自遏捺，要得心如牆壁去。祖師所謂錯認，何曾解方便者也。巖頭云：纔恁麼便不恁麼，是句亦刻，非句亦刻，遮箇便是外息諸緣，內心無喘底樣子也。縱未得啐地折屨地破，亦不被語言所轉矣。見月休觀指，歸家罷問程，情識未破，則心火燿燿地，正當恁麼時，但只以所疑底話頭提撕，如僧問趙州：狗子還有佛性也無？州云：無。只管提撕舉覺，左來也不是，右來也不是，又不得將心等悟，又不得向舉起處承當，又不得作玄妙領略，又不得作有無商量，又不得作真無

之無卜度，又不得坐在無事甲裏，又不得向擊石火閃電光處會，直得無所用心，心無所之時，莫怕落空，遮裏卻是好處。驀然老鼠入牛角，便見倒斷也。此事非難，非易，除是夙會種得般若種智之深，曾於無始曠大劫來，承事真善知識，熏習得正知正見，在靈識中觸境遇緣，於現行處築著磕著，如在萬人叢裏，認得自家父母相似，當恁麼時，不著問人，自然求覓底心不馳散矣。雲門云：不可說時卽有不說時，便無也，不可商量時便有，不商量時便無也。又自提起云：且道，不商量時是箇甚麼？又怕人不會，又自云：更是甚麼？近年以來，禪有多塗，或以一問一答，未後多一句爲禪者，或以古人入道因緣聚頭商確云：遮裏是虛，那裏是實，遮語玄，那語妙，或代或別，爲禪者，或以眼見耳聞和會，在三界唯心，萬法唯識上爲禪者，或以無言無說，坐在黑山下鬼窟裏，閉眉合眼，謂之威音王那畔，父母未生時消息，亦謂之默而常照，爲禪者，如此等輩，不求妙悟，以悟爲落在第二頭，以悟爲誑誑人，以悟爲建立，自既不會悟，亦不信有悟底，妙喜常謂衲子輩說：世間工巧技藝，若無悟處，尚不得其妙，況欲脫生死，而只以口頭說靜，便要收殺，大似埋頭向東走，欲取西邊物，轉求轉遠，轉急轉遲，此輩名爲可憐愍者，教中謂之謗大般若，斷佛慧命人，千佛出世，不通懺悔，雖是善因，返招惡果，寧以此身碎如微塵，終不以佛法當人情，決要敵生死，須是打破遮泰桶始得，切忌被邪師順摩挲，將冬瓜印子印定，便謂我千了百當，如此之輩，如稻麻竹葦，左右聰明，有識見，必不受遮般惡毒，然亦恐用心之切，要求速效，不覺不知遭佗染污，故信筆葛藤如許，被明眼人覷見一場敗闕，千萬相聽，只以趙州一箇無字，日用應緣處提撕，不要間斷，古德有言：研窮至理，以悟爲則，若說得天花亂墜，不悟總是癡

狂外邊走耳，勉之不可忽。

答湯丞相 進之

丞相既存心此段大事，因緣缺減界中，虛妄不實，或逆或順，一一皆是發機時節，但常令方寸虛豁豁地，日用合做底事，隨分撥遣，觸境逢緣，時時以話頭提撕，莫求速效，研窮至理，以悟爲則，然第一不得存心等悟，若存心等悟，則被所等之心障却道眼，轉急轉遲矣。但只提撕話頭，驀然向提撕處，生死心絕，則是歸家穩坐之處，得到恁麼處了，自然透得古人種種方便，種種異解，自不生矣。教中所謂絕心生死，伐心稠林，浣心垢濁，解心執著，於執著處使心動轉，當動轉時，亦無動轉底道理，自然頭頭上明，物物上顯，日用應緣處，或淨或穢，或喜或怒，或順或逆，如珠走盤，不撥而自轉矣。得到遮箇時節，拈出呈似人，不得，如人飲水，冷暖自知，南陽忠國師有言，說法有所得，是爲野干鳴，此事如青天白日，一見便見，真實自見得底，邪師走作不得，前日亦嘗面言，此事無傳授，纔說有奇特玄妙，六耳不同謀之說，卽是相欺，便好拽住劈面便唾，書生做到宰相，是世間法中最尊最貴者，若不向此事上了却，卽是虛來南閻浮提，打一遭收因結果時，帶得一身惡業去，教中說作癡福，是第三生冤，何謂第三生冤，第一生作癡福，不見性，第二生受癡福，無慚愧，不做好事，一向作業，第三生受癡福，盡不做好事，脫却殼漏子時，入地獄，如箭射，人身難得佛法難逢，此身不向今生度，更向何生度，此身學此道，須有決定志，若無決定志，則如聽聲卜者，見人說東，便隨人向東走，說西，便隨人向西走，若有決定志，則把得住，作得主宰，癡融所謂設有一法過於涅槃，吾說亦如夢幻，況世間虛幻不實之法，更有甚麼。

心情與之打交道也。願公堅此志以得入手，爲決定義，則縱使大地有情，盡作魔王，欲來惱亂，無有得其便處。般若上無虛棄底工夫，若存心在上面，縱今生未了，亦種得種子深，臨命終時，亦不被業識所牽，墮諸惡趣，換却殼漏子，轉頭來，亦昧我底不得，察之。

答樊提刑 茂實

示諭能行佛事，而不解禪語，能與不解，無別無同，但知能行者，卽是禪語，會禪語而不能行佛事，如人在水底坐，叫渴，飯籬裏坐，叫飢，何異。當知禪語卽佛事，佛事卽禪語，能行能解，在人不在法，若更向箇裏覓同覓別，則是空拳指上生實解，根境法中虛捏怪，如却行而求前，轉急轉遲，轉疎轉遠矣。要得徑截心地豁如，但將能與不能，解與不解，同與不同，別與不別，能如是思量，如是卜度者，掃向佗方世界，却向不可掃處看，是有是無，是同是別，驀然心思意想絕，當恁麼時，自不著問人矣。

答聖泉珪和尚

既得外護者存心相照，自可撥置人事，頻與衲子輩作佛事，久久自殊勝，更望室中與之子細，不得容人情，不得共伊落草，直似之以本分草料，教伊自悟自得，方是尊宿爲人體裁也。若是見伊遲疑不薦，便與之下注脚，非但瞎却佗眼，亦乃失却自家本分手段，不得人，卽是吾輩緣法，只如此，若得一箇半箇本分底，亦不負平昔志願也。

答鼓山遠長老

尊使來收書并信香等，知開法出世，唱道於石門，不忘所從來，爲岳長老拈香續楊岐宗派，既

已承當簡事，須卓卓地做，教徹頭徹尾，以平昔實證實悟底一著子，端居丈室，如擔百二十斤擔子，從獨木橋上過，脚蹉手跌，則和自家性命不可保，況復與人抽釘拔楔，救濟他人耶？古德云：此事如八十翁翁入場屋，豈是兒戲？又古德云：我若一向舉揚宗教，法堂前草深一丈，須倩人看院，始得巖頭每云：向未屙已前，一覷便眼卓湖地，晏國師不跨石門句，睦州現成公案，放個三十棒，汾陽無業莫妄想，魯祖凡見僧入門，便轉身面壁而坐，爲人時，當不昧這般體裁，方不失從上宗旨耳。昔滬山謂仰山曰：建法幢立宗旨，於一方五種緣備，始得成就，五種緣，謂外護緣、檀越緣、衲子緣、土地緣、道緣，聞霜臺趙公是汝請主，致政司業鄭公送汝入院，二公天下士，以此觀之，汝於五種緣稍備，每有衲子自閩中來者，無不稱歎法席之盛，檀越歸向，士大夫外護，住持無魔障，衲子雲集，可以越色力未衰時，頻與衲子激揚簡事，垂手之際，須著精彩，不得莽鹵，蓋近年以來，有一種裨販之輩，到處學得一堆一擔相似禪，往往宗師造次放過，遂至承虛接響，遞相印授，誤賺後人，致使正宗淡薄，單傳直指之風，幾掃地矣，不可不子細。五祖師翁住白雲時，嘗答靈源和尚書云：今夏諸莊顆粒不收，不以爲憂，其可憂者，一堂數百衲子，一夏無一人透得箇狗子無佛性話，恐佛法將滅耳。汝看主法底宗師用心，又何曾以產錢多少，山門大小，爲重輕，米鹽細務爲急切來？汝既出頭承當簡善，知識名字，當一味以本分事接待，方來，所有庫司財穀，分付知因識果知事，分司列局令掌之，時時提舉大綱，安僧不必多，日用齋粥常教，後手有餘，自然不費力，衲子到室中，下及要緊，不得拖泥帶水，如雪峯空禪師，頃在雲居雲門相聚，老漢知渠不自欺，是箇佛法中人，故一味以本分鉗錘似之，後來自在別處打

發，大法既明，向所受過底鉗錘，一時得受用，方知妙喜，不以佛法當人情，去年送得一冊語錄，來造次顛沛，不失臨濟宗旨，今送在衆寮中，與衲子輩看，老漢因撥筆書其後，特爲發揚，使本分衲子，爲將來說法之式，若使老漢初爲渠拖泥帶水，說老婆禪，眼開後，定罵我無疑，所以古人云：我不重先師道德，只重先師不爲我說破，若爲我說破，豈有今日，便是遮箇道理也。趙州云：若教老僧隨伊根機接，人自有三乘十二分教，接佗了也，老僧遮裏，只以本分事接人，若接不得，自是學者根性遲鈍，不干老僧事，思之思之。

大慧普覺禪師書下終

大慧禪師說法四十餘年、言句滿天下、平時不許參徒編錄、而衲子私自傳寫、遂成卷帙、晚年因衆力請、乃許流通、然在會有先後、見聞有詳略、又賢士大夫所得法語、各自寶藏、無緣盡觀、今之所收、殊爲未盡、俟更採集、別爲後錄。

文昌謹白

大慧普覺禪師書跋

國譯禪家龜鑑

解題

禪家龜鑑は朝鮮李朝の高僧葆真大師退隱の撰述する所のものなり。師は明の嘉靖・萬曆年間、曹溪に住すること十數年、其の間、五十餘の經論・祖錄を覽て、日用參禪に要切なる語句を撮り、録して以て室中の弟子に與へ、更に鈍根迷蒙の輩のために、其の各句の下に詳細なる注を加へて之を解釋し、門人魯願之を筆寫し、同じく義天之を校訂し、同じく惟政は更に之れが評文を作りて、遂に同志と共に梓に鏤りて流通せしめ、以て參學の龜鑑に資したるものなり。

今其の大要を察するに、朝鮮に於ける禪宗は、由來禪教混淆して金沙分つべからず、教を宗とするものは徒らに古人の糟粕を嘗めて、五教の上に更に直指人心、悟入の門あるを知らず、禪を宗とするものは自ら天真を恃んで、頓悟の後、始めて發心して萬行を修習するの意を知らず、寔に斯道の眞を傳へざること久しかりき。茲に於て大師は、教門は唯だ一心法を傳へ、禪門は唯だ見性の法を傳ふることを提し、學者須らく活句に參じて、死句に參すべからざるを諭し、若しそれ生死を脱せんと欲せば、先づ須らく貪欲及び諸の愛渴の念を斷ぜよ。無礙清淨の慧は、皆禪定によつて生ずと喝破す。師は斯くの

如く論じ來り論じ去つて、其の妄を破し眞を發揮し、延いて五家の宗途を辨じ、其の家風を論じて、別に臨濟の宗旨を闡明す。誠にそれ勉めたりと言ふべし。

然れども我が義諦和尚は其の著禪籍志に於て、「禪家龜鑑は名大にして僭に似たり。或は曰く、是れ朝鮮禪鑑のみ、敢て天下の禪鑑と曰ふに非ず」と貶すれども、義諦の此の論たるや甚だ中らず。而も義諦は本書を説いて、「葆真大師宗遂號ニ退隱」といひ、又「其弟子惟政號ニ松雲、嗣住ニ曹溪、於ニ龜鑑句々之下、委曲注解、名爲ニ口訣」といふが如きは妄の最も甚だしきものといふべし。宗遂は退隱の名には非ず。宗は繼、遂は備にして、即ち法嗣の意なり。次に各句下の注解の凡てが松雲の作に非ずして、唯だ其の評文のみ。他は皆退翁自らの作なることは、松雲の跋文によつて明瞭なり。

本書は明の萬曆七年（我が正親明天皇の天正七年）に發刊せられて以來、同じく四十六年更に朝鮮に於て刊行せられ、我が國に於ては寛永十二年及び同じく十五年と延寶五年及び同じく六年との四回刊行せられたり。其の外、續大藏經、禪學寶典、朝鮮佛教通史などに合編せられて行はる。其の注釋本は本國譯の外、我が忽滑谷快天師の禪家龜鑑講話一卷、朝鮮、浮休（善修）の禪家龜鑑釋義一卷などあり。何れも參考するに足れり。

著者退隱の傳を案するに、諱は休靜、字は玄應、清虛と號し、また葆真大師の號あり。多く西山に在りしを以て西山大師とも號す。俗姓は崔氏、完山（今の全羅北道全州）の人、朝鮮、李朝の中宗十三年

（我が後柏原帝の永正十五年、紀元二一七八）を以て生る。これより先き、外祖府尹金禹、燕山君に忤ひ、安州（今の平安南道安州）に謫せられ、遂に其の地に居る。父世昌、科擧に應じて箕子殿參奉となるも就かず、詩酒を以て自ら娛む。母金氏は師が九歳の時に歿す。十歳にして復た父を喪ふ。伶仃依るべき所なく、南のかた智異山（今の慶尙南道にあり）に遊び、忽ち禪家頓悟の法あることを知り、遂に法を靈觀大師に聽き、崇仁長老によつて剃髮す。居ること七八年、遍く名山に歴遊し、年三十、禪科に中り、陞つて禪教兩宗判事に至る。一日歎じて曰く、「吾が出家の意は、豈に此所に在らんや」と。即ち綬を解いて、金剛山に還り、三夢詞を作る、曰く、「主人夢を客に説く、客夢を主人に説く、今二夢を説くの客、亦是れ夢中の人」と。宣祖の二十二年（我が後陽成帝の天正十七年）事に坐して獄に投ぜられ、辯疏甚だ該當、上其の冤なるを知り、直ちに之を釋す。同じく二十五年、即ち我が文祿元年、豊臣秀吉朝鮮を征伐するに當り、宣祖、西に狩す。休靜劍に仗つて之を迎へ謁す。上諭して曰く、「今や國家正に急なり、爾能く慈悲の心を發して普く救濟せよ」と。休靜泣いて對へて曰く、「臣老病、我に従ふに堪へず、幸ひに弟子諸路に散在す。謹んで當に義旅を激倡すべし」と。上以て之を義とし、即ち命じて十六宗總攝となす。是に於て、弟子惟政、七百餘の僧徒を率ゐて關東に起り、同じく處英、一千餘僧を率ゐて湖南に起り、休靜も亦門徒及び自ら募る所の僧五十餘名を率ゐて順安の法興寺に會す。官、兵、仗軍糧を給し、休靜、指揮號令す。僧徒感憤して死を願はざるもの莫し。遂に日本軍と牡丹峯下に戦ひ、翌二

十六年正月、大いに日軍と平壤城の北に劇戦して三京を復するを得たり。休靜、勇士百人を以て駕を迎へて都に還る。日軍既に退くや、休靜、上言して曰く、「臣年八十に垂んとし、筋力正に盡く。請ふ、軍事を以て惟政及び處英に屬し、願はくば印を納めて山に還らん」と。上其の老を憫み、號を扶宗樹教普濟登階尊者、國一紫都大禪師と賜ふ。宣祖の三十七年（我が後陽成帝の慶長九年、紀元二二六四）正月、弟子を會して說法し、像を描かしめ、其の背に書して曰く、「八十年前渠是我、八十年後我是渠」と。書を作りて惟政に附し訖つて、趺坐して寂す。壽八十五。著書は本書の外に詩文を集めたる清虛堂集二卷あり。

評文の作者惟政、字は離幻、俗姓は任氏、隱峰と號し、松雲大師と稱す。豐川の人なり。豐臣秀吉、征韓の結果、和議成るに及び、師は命を奉じて日本に來り、諸將及び諸僧の間に折衝し、事竣つて還るに及び、宣祖之を嘉し、禪號を賜うて四溟大師と曰ふ。官は中樞府事に至る。私に謚して慈通弘濟尊者と曰ふ。著書、四溟堂集三卷あり。

國譯禪家龜鑑

曹溪退隱述

一物此に有り、從本以來、昭昭靈靈として、曾て生ぜず、曾て滅せず、名くることを得ず、狀ることを得ず。

一物とは何物ぞ。古人の頌に云く、「古佛未生前、凝然たる一相圓、釋迦猶ほ未だ會せず、迦葉豈に能く傳へんや。」此れ一物の曾て生ぜず、曾て滅せず、名くることを得ず、狀ることを得ざる所以なり。六祖、衆に告げて云く、「吾れに一物あり、無名無字、諸人還つて識るや否や。」神會禪師即ち出でて曰く、「諸佛の本源、神會が佛性」と。此れ六祖の孳子たる所以なり。懷讓禪師、嵩山より來る、六祖問うて曰く、「什麼物か伊麼に來る。」師措くこと罔し、八年に至りて方に自ら肯つて曰く、「説似一物即不中」と。此れ六祖の嫡子たる所以なり。三教の聖人、此の句より出づ。誰か是れ擧する者ぞ、眉毛を惜取

① 禪家。禪門は禪寂を以て家と爲す、故に禪宗を以て禪家と云ふ。龜鑑は好醜を照す、又龜鏡ともいふ、世の模範の意なり。
 ② 曹溪。支那の廣東省韶州府にあり。
 ③ 退隱。諱は休靜、清虛大師と號す、朝鮮の人、法眼宗なり。
 ④ 道峯靈昭。道藏神範。清涼道國。龍門天隱。平山崇信。妙香懷澄。玄鑑覺照。頭流信修。普濟懶翁。南峯修能。碧松智岩。芙蓉靈觀。退隱休靜。古人頌。靈門下の慈覺宗願禪。

せよ。

佛祖の出世、風無きに浪を起す。

佛祖といふは、世尊迦葉なり。出世といふは、大悲を體と爲して衆生を度するなり。然れども一物を以て之を觀るときは、則ち人人の面目、本來圓成なり、豈に他人の脂を添へ粉を著くることを假らんや。此れ出世の波浪を起す所以なり。虚空藏經に云く、「文字は是れ魔業、名相は是れ魔業、佛語に至りても亦是れ魔業」と、是れ此の意なり。此れは直に本分を擧す、佛祖功能無し。

乾坤色を失し、日月光なし。

然れども法に多義あり、人に多機あり。妨げず施設することを。

法といふは一物なり、人といふは衆生なり。法に不變隨緣の義あり、人に頓悟漸修の機あり。故に文字語言の施設を妨げず。此れ所謂官には針をも容れず、私に車馬を通ずるものなり。衆生、圓成すと曰ふと雖も、生れながらにして慧目なければ、甘んじて輪轉を受く。故に若し出世の金鑿に非ずんば、誰か無明の厚膜を刮せんや。苦海を

師の圓相の頌。

- ① 六祖。大鑑慧能禪師なり。
- ② 神會。荷澤神會禪師なり。
- ③ 諸佛。六祖此の答を聞きて曰く、「汝に向つて道ふ、名なく字なし。汝便ち喚んで本源佛性をなす、汝向去、把蒲頭を蔽ふことあるもまた只だ箇の知解の宗徒ならんのみ。」
- ④ 懷讓。南嶽懷讓禪師なり。
- ⑤ 說似。似は示に同じ、説明指し示ること。
- ⑥ 三教。佛教、儒教、道教。
- ⑦ 惜取眉毛。下らぬことを饒舌する勿れ。佛意を誤り説くときは、眉鬚墮落すに稱せらる、故に斯く云ふなり。
- ⑧ 無風起浪。平地に波瀾を生ず好肉を剗つて瘡を生ずなど皆同意味の語なり。
- ⑨ 大悲。觀經に云く、「佛心とは是れ大悲を體と爲す」と。
- ⑩ 多機。人の根機の種種難多なるを云ふ。

越えて樂岸に登るに至つては、皆大悲の恩に由るなり。然るときんば則ち恒沙の身命も、萬一を報じ難し。此れは廣く新熏を擧して、佛祖の深恩を感ず。

王寶殿に登れば、野老謳歌す。

強ひて種種の名字を立つ、或は心或は佛或は衆生と。名を守つて解を生ずべからず、當體便ち是、念を動ずれば則ち乖く。

一物上に強ひて三の名字を立つるものは、教の已むことを得ざるなり。名を守つて解を生ずべからずとは、亦禪の已むことを得ざるなり。一擡一擲、旋立て旋破る。皆法王法令の自在なるものなり。此れは上を結び下を起す、佛祖の事體各別なることを論ず。

るを云ふ。

- ① 不變。緣に應じて能く萬有を生起す。雖も、本體如然として不變なるを云ふ。隨緣は本體不變にして、而も能く差別の萬有を生起するを云ふ。此の二を喩ふれば、黄金を以て種種の器物を作るに、其の形は隨緣にして千差萬別なるも、其の金性に至りては依然として不變なるが如し。
- ② 官には針云。此の語はも公事には嚴格にして、些の間隙を與へざるも、私事には寛大にして融和せるを云へる語なるが、宗門にては上の句を把住せ見、下の句を放行せ見る、即ち上は一切を奪ふて一塵をも立せず、下は一切を放つて無碍自在。把住放行、自由自在。
- ③ 輪轉。輪廻轉生なり、出生入死して迷界に浮沈すること。

- ④ 金鑿。涅槃經第八に、盲人の目を治せんがために、良醫を請じて即ち金鑿を以て其の眼膜を刮る。
- ⑤ 心。華嚴經に曰く、「心佛及び衆生是れ三無差別」と。
- ⑥ 一擡一擲。一手擡一手擲の略、擡はもたげあげる、擲はおさへる。師家の作用をいふ。
- ⑦ 法王。法華に云く、「我れ法王たり、法に於て自在」と。久旱云々の句は四喜の詩の二句なり、人天眼目に出づ。
- ⑧ 多子塔。吠舍釐城の西北三里の所にあり、千人の子が其の父のために建てたるもの。
- ⑨ 佛此處にて說法のとき、迦葉弊衣をつけて到る、他の諸弟子達、之を見て輕侮の念を生ず、佛之れを知りて即ち迦葉のために、自ら半座を讓りて迦葉に與へ給ふ。
- ⑩ 靈山會上。佛靈鷲山上に於て

久旱に佳雨に逢ひ、他郷に故人を見る。

世尊三處に心を傳ふるものを禪旨と爲し、一代説く所のものを教門と爲す。故に曰く、禪は是れ佛心、教は是れ佛語と。

三處といふは、^①多子塔前に半座を分つ、一なり、^②靈山會上に拈花を擧す、二なり、^③雙樹下に却に雙趺を示す、三なり。所謂迦葉別に禪燈を傳ふるもの此れなり。一代といふは、四十九年の間、説く所の^④五教なり。人天教、一なり。小乗教、二なり。大乘教、三なり。頓教、四なり。圓教、五なり。所謂阿難、教海を流通するもの此れなり。然るときは則ち禪教の源は世尊なり、禪教の派は迦葉阿難なり。無言を以て無言に至るものは禪なり、有言を以て無言に至るものは教なり、乃至心は是れ禪法なり、語は是れ教法なり。則ち法は一味なりと雖も、見解は則ち天地懸隔なり。此れは禪教二途を辨ず。

^⑤放過することを得ず、^⑥草裏に身を横ふ。是の故に若し人之を口に失するときは、則ち拈花微笑、皆是れ教迹、之を心に得るときは、則ち世間の^⑦龜言細語、皆是れ教外別傳の禪旨。

華を拈じて大衆に示す。衆皆默然たり、獨り迦葉のみ破顔微笑す、佛曰く、「吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附屬す」と。
^①雙樹。佛沙羅雙樹の下に於て涅槃に入り給ふ、此時迦葉は其の弟子等と共に他處にあり神通力に依りての故に、佛の入滅を知り、急に雙樹の下に到る、佛乃ち金棺の中より異相を示して以て附法の弟子たる迦葉の敬禮を入れ給ふ。
^②悉しくは祖庭事苑一にあり。
^③五教。宗密禪師の原人論に曰く、「佛教は淺より深に之を略して五等あり、一に人天教云云。」其の他佛一代の教説を五時に判釋せるもの華嚴宗を初め諸説あり、今縷述せず。有言は五時八教、無言は四十九年一字不説をいふ。
^④放過。ウツカリと打過すと。

法に名もなし、故に言及ばざるなり、法に相もなし、故に心及ばざるなり。之を口に擬するものは、本心王を失す、本心王を失するときは、則ち世尊拈花、迦葉微笑、盡く陳言に落ちて、終に是れ物なし。之を心に得るものは、但だ談を銜ひ、善く法を説くのに非ず、^①驚語に至つても、深く實相を談ず。是の故に^②寶積禪師は哭聲を聞いて、身心を踊悦し、^③寶壽禪師は諍拳を見て、面目を開豁するものは此れを以てなり。此れは禪教の深淺を明す。

^④明珠手に在り、弄し去り弄し來る。
吾れに一言あり、慮を絶し縁を忘す、兀然として無事にして坐すれば、
春來草自ら青し。

慮を絶し縁を忘すは、之を心に得るなり、所謂^⑤閑道人なり。於戲其の人たるや、本來無縁、本來無事、飢來れば即ち食し、困じ來れば即ち眠る。綠水青山、意に任せて逍遙し、漁村酒肆、自在に安眠す。年代^⑥甲子摠に知らず、春來舊に依つて草自ら青し。此れは別に一念^⑦回光せんと欲するものなり。

^①艸裏に身を横ふ。第二義門に下ること。
^②龜言。涅槃經に、「諸佛常に輕語、衆の爲の故に龜を説く、龜言及輕語、皆第一義に歸す」と。陳言は古腐りたる言句。
^③驚語。五燈會元に云く、「玄沙師備禪師、因みに參する次で、驚子の聲を聞く。乃ち云く、深く實相を談じ、善く法要を説くこと。便ち下座。」
^④寶積禪師。馬祖の法嗣幽州盤山寶積禪師、一日出でて葬列に會す、孝子の哭聲を聞きて忽ち省悟す。身心踊悦は法喜禪悅の貌なり。
^⑤寶壽禪師。會元十一に出づ、寶壽二世、先寶壽の所にありて父母未生以前本來の面目を問はる、答ふるを得ず、一日街頭に兩人拳を揮ふを見る、曰く、「爾恁麼の無面目を得たり」と。師之を聞いて言下に

將に謂へり人無しと、頼に一箇あり。

教門は惟だ一心法を傳へ、禪門には惟だ見性の法を傳ふ。

心は鏡の體の如く、性は鏡の光の如し。性自ら清淨なれば、即時に

割然として還つて本心を得。此れは得意の一念を秘重す。

重重山と水と、清白たり舊家風。

評に曰く、「心に二種あり、一には本源心、二には無明取相心な

り。性に二種あり、一には本法性、二には性相相對性なり。故に

禪教者同じく迷へば名を守つて解を生じ、或は淺を以て深と爲し、

或は深を以て淺と爲して、遂に觀行の大病と爲る。故に此に

於て之を辨ず。」

然して諸佛は經を説くに、先づ諸法を分別して、後畢竟空を説く。祖師は

句を示すに、迹を意地に絶し、理を心源に顯はす。

諸佛は萬代の依憑たり、故に理は須らく委示すべし、祖師は即時度脱

するに在り、故に意は玄をして通ぜしむ。迹は祖師の言迹なり、意は學

者の意地なり。

豁然として大悟す。

此句は南嶽懶瓚の語なり。

開道人。證道歌に曰く、「絶學

無爲の開道人、妄想をも除か

ず眞をも求めず云云」。是非

非善惡、生死涅槃等、差別の

境界を脱して無念無作無功用

にして、而も自由自在に大機

大用を發する底の人。

甲子。甲は甲乙丙丁等の十

干、子は子丑寅等の十二支。

曆或は年月日等に當て用ふ。

同光返照と熟字す。外に向て

馳求するを止めて自己本來の

面目に向て尋ねると。一箇の

箇は枝也、數也、一人をいふ。

得意。冷暖自知の處。割然は

豁然と同じ、重重山とは穩坐

得意の境界。

評。大師の門人惟政の付する

所なり。惟政は豐公征韓役

の後慶長十年三月和議使と共に

入朝、家康に謁見したると

胡亂に指注するも、臂は外に曲らず。

諸佛は弓を説き、祖師は弦を説く。佛は無礙の法を説いて、方に一味に

歸す。此の一味の迹を拂ふて、方に祖師の示す所の一心を現す。故に云く、

庭前の柏樹子の話は、龍藏所に未だ有らざる底なりと。

弓を説くは曲なり、弦を説くは直なり。龍藏は龍宮の藏經なり。僧、趙

州に問ふ、「如何なるか是れ。祖師西來意。」州答へて曰く、「庭前の柏樹

子」と。此れ所謂格外の禪旨なり。

魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。「方語に云く、蹤跡猶ほ在りと。」

故に學者は先づ如實の言教を以て、委しく不變隨緣の二義は、是れ自心の

性相、頓悟漸修の兩門は、是れ自行の始終なることを辨じて、然して後

に教義を放下し、但だ自心現前の一念を將つて、禪旨に參詳すると云ふは、

則ち必ず所得あり、所謂出身の活路なり。

上根上智は此の限りに在らず、中下根の者は等を躡ゆべからず。教義と

いふは不變隨緣、頓悟漸修、先有り後有り。禪法といふは一念中、不變

隨緣、性相體用、元是れ一時、離即離非、是即非即。故に宗師は法に

あり、羅山文集に僧松雲と記

すもの即ち此人なり。外蕃通

書等には松雲と誌せり。松雲

は道號にして惟政は諱なり。

觀行。觀は觀心なり、行は修

行なり。大病とは識神を認め

て悟を爲すは却て痴を爲る。

意地。意識は心地則ち掃蕩門

なり、心源とは建立門なり。

度脱。度は濟度、脱は得脱成

佛。

胡亂に指注す。佛語祖語を勝

手に引き來りて種々に説きた

るを指す、出鱈目と云ふ意。

弓を説く。曲げて方便施設す

るを云ふ。弦を説くは直に

本分を示すを云ふ。

龍藏。如來滅後、一切の經典

は龍宮に收まりて龍王の守護

する所となれり。傳ふ、され

ば龍樹菩薩は龍宮に入りて、

華嚴經を將來せりと云ふ。

祖師西來意。達磨直傳の佛法

據つて言を離る、直指一念、見性成佛のみ。教義を放下するといふは此れを以てなり。

明歴の時雲深谷に藏れ、深密密の處日晴空を照す。

大抵學者は須らく活句に參ずべし、死口に參ずること莫れ。

活句下に薦得すれば、佛祖の與に師と爲るに堪へたり、死句下に薦得すれば、自救不了。此れより下、特に活句を擧して、自をして悟入せしむ。

臨濟を見んと要せば、須らく是れ鐵漢なるべし。

評に曰く「話頭に句意の二門有り、句に參ずるものは徑截門活句

なり、心路没く語路没く、摸捺無さが故なり。意に參ずるものは圓頓門死句なり、理路あり語路あり、開解思相あるが故なり。」

凡そ本公案上に參ずるには、切心に工夫を做すこと雞の卵を抱くが如く、猫の鼠を捕ふるが如く、飢えて食を思ふが如く、渴して水を思ふが如く、兒の母を憶ふが如くにして、必ず透徹の期あり。

祖師の公案、一千七百則あり、狗子無佛性、庭前の柏樹子、麻三

の極意、
① 魚行。蹤跡を隠さんすれば愈よ顯はるることを云ふ。
② 性相。性は不變の本性、相は隨縁の形相。
③ 離即離非。楞嚴の四に云く、「即ち如來藏妙明の心元、即ち離れ非を離れ、是即非即」云云。疏に云く「此れ二門不二にして唯だ是れ一心なるに約して雙べて眞俗を遮す云云」云云。即ち俗諦にして非は眞諦なり。

④ 活句死句。洞山和尚曰く「語中に語なき活句と云ひ、語中に語有るを死句と云ふ」云云。即ち活句とは思慮分別、意識情想を超越せる靈活の言句を云ひ、死句とは理路に滞り知解に陷るの言句を指す。

⑤ 臨濟を見る。臨濟和尚の眞の面目を徹見する。
⑥ 鐵漢。心肝鐵の如き大丈夫兒。
⑦ 狗子無佛性。偈あり、趙州に

問ふ、狗子に還つて佛性ありやまた無や。州曰く、無。
⑧ 庭前の柏樹子。偈、趙州に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。州曰く、庭前の柏樹子。
⑨ 麻三斤。偈、洞山に問ふ、如何なるか是れ佛。山曰く、麻三斤。

斤、乾屎橛の流の如し。鶏の卵を抱くは、暖氣相續するなり、猫の鼠を捕ふるは、心眼不動なり、飢えて食を思ひ、渴して水を思ひ、兒の母を憶ふに至つては、皆眞心より出づ、做作底の心に非ず、故に切と云ふ。禪に參ずるに此の切心なくして、能く透徹する者、是の處あること無し。

① 參禪は須らく三要を具すべし。一には大信根あり、二には大憤志あり、三には大疑情あり。苟し其の一を闕かば、折足の鼎の如し、終に廢器と成る。

佛云く「成佛は信を根本と爲す。」永嘉云く「修道は先づ須らく志を立てべし。」蒙山云く「禪に參ずるもの言句を疑はざる、是れを大病と爲す。」又云く「大疑の下に必ず大悟あり。」

日用應縁の處、只だ狗子無佛性の話を擧せよ。擧し來り擧し去り、疑ひ來り疑ひ去りて、理路を没し、義路を没し、滋味没く、心頭熱鬧することを得する時、便ち是れ當人。放身命の處、亦是れ成佛作祖底の基本なり。

① 此の一節は高峯録に出づ。
② 大信根。華嚴經に曰く「信は道の本源、功德の母」云云。又曰く「佛法の大海は信を能入となす」云云。
③ 永嘉。眞覺大師は六祖に嗣ぐ、俗姓は戴氏、幼にして出家し、徧く教相を研究し、深く止觀に通ず、後又志を發して六祖

僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性有りや也た無や。」州曰く、「無」。此の一字子は宗門の一關、亦是れ許多の惡知惡覺を摧く底の器仗、亦是れ諸佛の面目、亦是れ諸祖の骨髓なり。須らく此の關を透得して、然して後佛祖期す可し。古人の頌に曰く、「趙州の露刃劍、寒霜光焰燄、擬議して如何と問はゞ、身を分つて兩段と作さん。」

話頭、舉起の處に 承當することを得ざれ、思量卜度することを得ざれ、迷を將つて悟を待つことを得ざれ、不可思量の處に就きて、思量して心之く所なきは、老鼠の牛角に入りて、便ち倒斷を見るが如し。又尋常計較安排底是れ識情、生死に隨つて遷流する底是れ識情、怕怖惶惶する底是れ識情。今人は是れ病なることを知らず、只管に裏許に在りて頭出頭沒す。

話頭に十種の病あり、意根下の卜度と曰ひ、揚眉瞬目の處に 採根すと曰ひ、語路上に活計を作すと曰ひ、文字中に證を引くと曰ひ、舉起の處に承當すと曰ひ、無事匣裏に颺在すと曰ひ、有無の會を作すと曰ひ、眞無の會を作すと曰ひ、道理の會を作すと曰ひ、迷を將つて悟を待つと曰ふ。此の十種の病を離るる者は、但だ話を擧する時、略精神を抖擻す、

只だ是れ箇の甚變をか疑はん。

此の事は 蚊子の鐵牛に上るが如し、更に如何若何を問はず、嘴を下すことを得ざる處、棄命一擧、身に和して透入す。

重ねて上の意を結して、活句に參ずる者をして、退屈を得ざらしむ。古に云く、「參禪は須らく祖師の關を透るべし、妙悟は心路を窮め絶せんことを要す。」

工夫は絃を調ぶるの法の如し、緊緩其の中を得よ、勤むるときは則ち執着に近く、忘ずるときは則ち無明に落つ。惶惶歴歴、密密綿綿。

琴を彈ずる者の曰く、「緩急中を得て、然して後清音普し。」工夫も亦此の如し、急なるときは則ち 血囊を動じ、忘ずるときは則ち 鬼窟に入る。徐ならず疾ならず、妙其の中に在り。

工夫到れば、行いて行くことを知らず、坐して坐することを知らず。此の時に當つて、八萬四千の魔軍、六根門頭に在つて伺候す、心の生ずるに隨つて設く。心若し起らずんば、争か之を如何せん。

魔といふは、生死を樂む鬼の名なり、八萬四千の魔軍は、乃ち衆生の八

に參じ、一夜にして印可を受く、世に一宿覺と呼ぶ。證道歌は其の作にして盛んに世に行はる、又永嘉集なるものあり。蒙山。五祖法演禪師八世の法孫、蒙山異禪師は皖山凝に嗣ぐ。

⑦理路。大燈國師遺誡に曰く、「無理會のまごころに向つて究め來り究め去るべし」云。

⑧放身命。放身捨命なり。

⑨古人頌。王祖法演禪師の頌也。

⑩承當。肯諾の義なり、早吞込なり。

⑪老鼠牛角に入る。又云ふ、鼠錢筒に入る云、力盡き神疲れ、技窮まり進退共に谷まる底の消息。鼠、牛角に入りて咬み來り咬み去つて、出路を求むるに得べからず、還つて倒翻するに當りて大活路を得るが如し。

⑫採根。塚跟とも書す、滞在の

義、又行いて進まざる貌、即ちグツグツして自由を得ざること。

⑬無事匣。唐土の風に重重に柵を作りて、記するに甲乙丙等の十千の字を以て符號さなす、而して第一の甲の柵には何物をも置かず、之を無事匣と云ふ。

⑭蚊子鐵牛に上る。思慮分別を以て處理すべからざるに喩ふ。蚊が鐵にて造りたる牛を刺すも嘴も立たぬなり。

⑮此の句は無門關第一則、狗子無佛性の評の初に出づ。

⑯惶惶。恐らくは惶惶の誤ならん。

⑰血囊。身體のこゝ、身心を動亂するなり。白隱禪師夜船閉話に曰く、「自ら謂へらく、猛く精彩を着け、重ねて一回放身捨命し去らん云、茲に於て牙關を咬定し、雙眼睛を睜開

萬四千の煩惱なり。魔本種無し、修行念を失する者、遂に其の源を派つ。衆生は其の境に順ふが故に、之に順ふ、道人は其の境に逆ふが故に之に逆ふ。故に云ふ、「道高ければ魔盛なり。禪定の中に、或は孝子を見て股を斫り、或は猪子を見て鼻を把る者、亦自心より見を起して、此の外魔を感じるなり。心若し起らざるときは、則ち種種の伎倆、翻つて割水吹光と爲る。古に云く、「壁隙よりは風動じ、心隙よりは魔侵す。」

起心は是れ 天魔、不起心は是れ 陰魔、或は起或は不起は是れ 煩惱魔。然れども我が正法中、本是の如きの事なし。

大抵 忘機は是れ佛道、分別は是れ魔境。然れども魔境は夢の事、何ぞ辨詰するに勞せん。

工夫若し打成一片なるときは、則ち縦ひ今生に透ること得ざるも、眼光落地の時、惡業の爲に率ゐられず。

業とは無明なり、禪とは般若なり。明暗相敵せざるの理、固然たり。

大抵、禪に參ずる者、還つて四恩の深厚を知る麼、還つて四大醜身、念衰朽することを知る麼、還つて人命の呼吸に在るを知る麼、生來佛祖に値遇する麼、無上法を聞くに及んで、希有の心を生ずる麼、僧堂を離れず、節を守る麼、隣單と雑話せざる麼、切に是非を鼓勵することを忌む麼、話頭十二時中、明明不昧なる麼、人に對して接話の時、間斷なき麼、見聞覺知の時、打成一片なる麼、自己を返觀し、佛祖を捉敗する麼、今生に決定し、佛の慧命を續ぐ麼、起坐便宜の時、還つて地獄の苦を思ふ麼、此の一報身、定んで輪廻を脱する麼、八風の境に當つて、心動ぜざる麼、此れは是れ參禪の人、日用中點檢する底の道理なり。古人云く、「此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの生を待つてか此の身を度せん。」

四恩といふは、父母・君・師・施主の恩なり。四大醜身といふは、父の精

し、寢食共に廢せんことす、既にして未だ芥月に亘らざるに、心火逆上し肺金焦枯し云云」是れ急に過ぎて疾患を得たるなり。

①鬼魔。只だ漫然と目を閉ち、坐禪すること。坐禪儀に曰く、「法雲圓通禪師も亦人の目を閉ち坐禪するを訶して、黒山鬼窟と云へり」云。

②六根門。眼、耳、鼻、舌、身、意のこと。

③之れは寤を云ふ。

④道高ければ魔盛なり。坐禪儀にある語。又小止觀には、道高ければ方に知る魔盛んなり云云。

⑤孝子を見て云云。楞嚴疏鈔に出づ。一禪師あり、禪定中に一孝子の死屍を捧げ來るを見、師是れ魔なりと知つて、斧を振ふて之を斬る、覺めて後に之を見れば、自ら其の股

を傷けたるを見る云。宗鏡錄に曰く、「禪師あり、坐時一猪の來るを見る、即ち猪鼻を把つて一拽し、火を把り來れと叫ぶ、乃ち把を見るに自らの鼻孔なり云云」云。

⑥割水吹光。如刀割水、如風吹光の略。無功に歸すること。心起らざれば天魔外道も如何ともする能はざるを云ふ。

⑦起信論筆削記に出づ。

⑧天魔。欲界の第六天のこと。人の修道するを見ては、己の宮殿を破壊するをなし、魔軍を起して之を妨ぐ。

⑨陰魔。又蘊魔とも云ふ。五蘊假和合の身體のこと。身は心を繫縛して自由ならしめず、故に寤と云ふ。

⑩煩惱魔。煩惱は心身を惑亂して修行の妨げとなる故に魔と云ふ。

⑪忘機。所求の心の止むこと、

無念無作なること。傳心法要に、忘機は則ち佛道隆なり、分別は則ち魔軍熾なり云。

⑫眼光落地の時。臨命終の時をいふ。

⑬明暗相適せず。光生すれば暗は拂はざるに自然に去る、心眼明かなれば無明自ら消失せん。

⑭希有の心。遭遇し難きを思ふこと。踊悦すること。

⑮隣單。僧堂に於ける隣坐の人のこと。

⑯話頭。頭は助字、古則公案のこと。自己が工夫しつゝある公案を指す。

⑰間斷。正念工夫相續の有無。

⑱捉敗。さらまへること。

⑲八風。利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂のこと。佛地經論に出づ、此の八は人心を煽動するものなるが故に風と云ふ。

⑳古人云云。此の語、中峯和尚

一滴、母の血一滴は、水大の濕なり。精は骨と爲り、血は皮と爲る者は、地大の堅なり。精血一塊して、腐れず爛れざるは、火大の暖なり。鼻孔先づ成りて出入の息を通ずる者は、風大の動なり。阿難曰く、「欲氣能濁、腥臊交遭」と。此れ醜身たる所以なり。念念衰朽といふは、頭上の光陰刹那も停らず、面自ら皺んで髪自ら白し。今既に昔に如かず、後當に今に如かざるべしと云ふが如し、此れ無常の體なり。然して無常の鬼は、殺を以て戯と爲す、實に念念畏るべし。呼といふは出息の風なり、吸といふは入息の風なり。人命の寄托、只だ出入の息に在り。八風といふは順逆の二境なり。地獄の苦といふは、人間の六十劫は泥犁の一晝夜、鑊湯爐炭、劍樹刀山の苦、口に形り言ふべからず。人身の得難きことは、海中の鍼よりも甚だし、故に此に於て感んで之を警す。

評に曰く、「上來の法語、人の水を飲んで冷暖自知するが如し。聰明も業に敵すること能はず、乾慧も未だ苦輪を免れず、各須らく察念すべし、以て自謾すること勿れ。」

語を學ぶの輩は、説の時は悟に似て、境に對して還つて迷ふ。所謂言行の相違ふ者なり。

此れは上の自謾の意を結ぶ、言行の相違、虚實辨ずべし。若し生死に敵せんと欲せば、須らく此の一念子の爆地一破することを得て、方に生死を了得すべし。

爆は漆桶を打破する聲なり。漆桶を打破して、然して後生死に敵すべし。諸佛因地の法行といふは、只だ此れのみ。

然れども一念子爆地一破して、然して後に須らく明師を訪ふて、正眼を決擇すべし。

此の事は極めて容易ならず、須らく慚愧を生じて、始めて道を得べし。大海の如し、轉た入れば轉た深し、慎んで小を得て足れりと爲ること勿れ。悟後若し人に見えざるときは、則ち醍醐の五味も翻つて毒藥と成る。

古徳云く、「只だ子が眼の正しきことを貴ぶ、汝が行履の處を貴はず。」昔仰山、瀉山の間に答へて云く、「涅槃經四十卷、總に是れ魔説」と。此れ仰山の正眼なり。仰山又行履の處を問ふ、瀉山答へて曰く、「只だ子

坐右銘の終にあり。又黃龍死心禪師の語策にもあり。
②四恩。心地觀經には父母、國王、衆生、三寶の恩を稱す。今上記の説は釋氏要覽に出づ、此の四恩は出家に就いて云ふなり。
③楞嚴經卷第一に此文あり。
④人命在呼吸。四十二章經に曰く、「佛、復た沙門に問ふ、人命幾の間に在りや。答へて曰く、呼吸の問ま。佛言はく、善哉、子道を知るも。」
⑤泥犁。梵音 Naraka の音寫の訛なり、地獄のこと。
⑥海中の鍼。菩薩處胎經の偈に曰く、「一鍼投海底、求之尚可得」と。
⑦業。善惡の業報、生死流轉の根元。
⑧大般若經に曰く、「十地の最切乾慧地、謂く、未だ理水あらざるが故に其の名を得たり、即ち外凡の位なり、未だ苦輪を免れず。」
⑨此一念子。無明業識を指す。
⑩漆桶。黒暗にして辨別し難きより、煩惱無明の巢窟に喩ふ。生死可敵まは生死本來空と見たればなり。
⑪因地。果地に對す、因位とも云ふ。菩薩の佛地に至る道程にして、六度の行願を修しつづある地位のこと。
⑫明師を訪ふ。馬鳴云く、「正因有りさ雖も、薰習の力、諸佛菩薩知識に遇はずんば、争か煩惱を斷じて涅槃に入るを得ん。」
⑬醍醐。五味の一、牛乳にて製したるもの、其の味ひ最上甘美なり。
⑭行履。日常の行持を云ふ、行は躬行、履は履踐なり。
⑮此の話は會元九に出づ。
⑯本來無一物。六祖大師の偈に、

が眼の正しきことを貴ぶ」と云ふ。此れ先づ正眼を開いて、而して後行履を説く所以なり。故に云ふ、若し修行せんと欲せば、先づ須らく頓悟すべし。

願はくは諸道者、深く自心を信じて、自ら屈せず、自ら高ぶらざれ。

此の心平等にして本凡聖なし、然れども人に約すれば、迷悟凡聖あり。師に因つて激發して、忽ち眞に我れと佛と殊なる無きことを悟るものは頓なり。此れ自ら屈せざる所以なり。本來無一物と云ふが如きなり。悟に因つて習を斷じ、凡を轉じて聖と成すものは漸なり、此れ自ら高ぶらざる所以なり。時時に勤めて拂拭せよと云ふが如し。屈といふは教學者の病なり、高といふは禪學者の病なり。教學の者は、禪門に悟入の秘訣有ることを信ぜず、深く横教に滯り、別に眞妄を執し、觀行を修せず、他の珍寶を數ふ、故に自ら退屈を生ずるなり。禪學者の者は、教門に修斷の正路あることを信ぜず、染習起ると雖も、慚愧を生ぜず、果級初なりと雖も、多く法慢あり、故に言を發すること過高なり。是の故に得意修心の者は、自ら屈せず自ら高ぶらざるなり。

「菩提も樹に非ず、明鏡また臺に非ず、本來無一物、何れのごころにか塵埃を惹かん。」
⑦ 時時に勤めて。神秀禪師の偈に、「身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時時に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむるこそ勿れ」云。

⑧ 彼の珍寶を數ふ。華嚴十三に「人の他の珍寶を數ふるが如し、自らは半錢の分なし、法に於て修行せざれば多聞も亦是の如し。」修斷は修善斷惡也。

⑨ 染習。染心習氣なり。

⑩ 果級。佛果に至るまでの修行の道程に於ける階級。

⑪ 得意。深意を會得すること。

⑫ 一位。佛位なり。華嚴經梵行品に曰く、「初發心時得阿耨菩提」云。

⑬ 五十五位。十信、十行、十回向、十地の五十位に加ふるに乾惠、殷、頂、忍、世界第一の

五位を以てす、即ち五十五位となる。

⑭ 膏明。燈火となり。

⑮ 凡情。天皇道悟云く、「性に任せて逍遙し、縁に隨つて放曠す、但だ凡情を盡せ、別に聖解なし」云。

⑯ 病盡き。大慧の曾侍郎に答ふる書に、「今日非を知るは則ち幻藥を以てまた幻病を治するなり、病癒え藥除けば依然として舊時の人」云。

⑰ 能所。能は斷するもの、所は斷せらるるもの、此の二者の相對立するは、即ち絶對不二の妙境にあらず。

⑱ 虚懷自照。虚心坦懐、自己返照なり。

⑲ 此の文は圓覺經にあり、幻を知るは世間一切の法は皆夢幻の如しと觀するなり。華嚴經に曰く、「世間種種の法一切皆幻の如し、若し能く是の如

評に曰く、「自ら屈せず、自ら高ぶらずとは、略初心の因を擧げて、果海を該ぬるときは、則ち之を信ぜずと雖も、一位なり。廣く菩薩の果を擧げて、因源に徹するときは、則ち五十五位なり。」
迷心にして道を修すれば、但だ無明を助く。
悟若し未だ徹せざれば、修豈に眞に稱はんや。悟修の義は、膏明の相頼りて、目足の相資くるが如し。
修行の要は、但だ凡情を盡せ、別に聖解なし。
病盡き藥除けば、還つて是れ本人。
衆生心を用捨せず、但だ自性を染汚すること莫れ、正法を求むる是れ邪捨者求者、皆是れ染汚なり。
煩惱を斷ずるを二乗と名け、煩惱生ぜざるを大涅槃と名く。
斷とは能所なり、不生とは無能所なり。
須らく虚懷自照して、一念縁起無生を信ずべし。
此れは單に性起を明す。
諦かに殺盜姪妄は、一心上より起ることを觀ぜよ。當處便ち寂ならば、何

を更に斷ずることを須ひん、

此れは雙に性相を明す。

經に云く、「不起一念を名けて永く無明を斷ずと爲す。」又云く、「念

起即覺。」

幻を知れば即ち離る、方便を作さず。幻を離るれば即ち覺す、亦漸次なし。

心を幻師と爲し、身を幻城と爲す、世界は幻衣なり、名相は幻食なり。起心・動念・虛妄・言眞に至るまで幻に非ずといふと無し。又無始の幻無明皆覺心より生ず、幻幻は空花の如し、幻滅するを不動と名く、故に瘡を夢みて醫を求むるもの、寤め來れば方便なし。幻を知るものも亦是の如し。

衆生の無生中に於て、妄に生死涅槃を見るは、空花の起滅を見るが如し。性本無生、故に生涅槃なし、空本無花、故に起滅なし。生死を見るものは、空花の起るを見るが如し、涅槃を見るものは、空花の滅するを見るが如し。然れども起本無起、滅本無滅、此の二見に於て窺詰することを用ひず。是の故に思益經に云く、「諸佛の出世、衆生を度せんが爲に非ず、只だ生死涅槃の二見を度せんが爲のみ。」

菩薩は衆生を度して滅度に入らしむ、又實に衆生の滅度を得る無し。

菩薩は只だ念念を以て、衆生の爲にす、體空を了念するは度衆生なり、念既に空寂なれば、實に衆生の滅度を得るもの無し。此れより上は信解を論ず。

理は頓に悟ると雖も、事は頓に除くに非ず。

文殊は天真に達し、普賢は緣起を明す。解は電光に似て、行は窮子に同じ。此れより下には修證を論ず。

姪を帯びて禪を修するは、沙を蒸して飯と作すが如し。殺を帯びて禪を修するは、耳を塞いで叫聲するが如し。偷を帯びて禪を修するは、漏卮に満たんことを求むるが如し。妄を帯びて禪を修するは、糞を刻んで香と爲すが如し。縦ひ多智あるとも皆魔道と成る。

此れは修行の軌則、三無漏の學を明す。小乗は法を稟くるを戒と爲す、粗其の末を治む。大乘は心を攝するを戒と爲す、細に其の本を絶す。然らば則ち法戒は身犯なく、心戒は思犯なし。姪は清淨を斷ち、殺は慈悲を斷ち、盜は福德を斷ち、妄は眞實を斷つ。能く智恵を成し、縦ひ

く知らば、其心動くをなし。」漸次なし。漸次に階級を追ふて至るに非ず、即時大覺なり、一超直入如來地なり。幻城は「すみやか」、幻衣は身は世界に覆はるる故なり、幻食は名相は目前の境、妄心は之に依りてそだち長するなり。

無生。華嚴疏卅八に曰く、「妄法はも空なり、稱して無生と云ふ、眞法は相を離る、亦無生と云ふ。」

生涅槃。生死涅槃の略。思益經。具には梵天思益經。四卷あり、其の一の卷正問品の意を取る。

衆生。金剛經大乘正宗分第三に曰く、「是の如く無量無數無邊の衆生を滅すれども、實に衆生の滅度を得るものなし云云。」滅度は涅槃の譯語なり。

文殊。此の菩薩は智を代表す、即ち理なり、普賢菩薩は行を代表す、即ち事なり。

窮子。法華信解品に出づ、「長者の一子あり、父の家を離れ、他國に流浪困窮して多年の後、我が家に歸りたるも、尙ほ我が家たるを信ぜずして、僅に奴僕として賤役に服するこゝまた多時の後、漸く父の教示によりて自ら長者の相續者たるを知れり」云々。是れ衆生が本來佛子にてありながら、迷妄邪念に覆はれて之を自知せず、後に至りて之を悟るも、多年困窮の餘習未

六神通を得るとも、如し殺盜淫妄を斷ぜざる時は、則ち必ず魔道に落ちちて、永く菩提の正路を失す。此の四戒は百戒の根なり、故に別に之を明して、思犯無からしむ。無憶を戒と曰ひ、無念を定と曰ひ、莫妄を慧と曰ふ。又戒を捉賊と爲し、定を縛賊と爲し、慧を殺賊と爲す。又戒器完固にして、定水澄清なれば、慧月方に現す。此の三學は、實に萬法の源たり、故に特に之を明して、諸漏無からしむ。

靈山會上に豈に無行の佛あらんや、少林門下に豈に妄語の祖あらんや。

無徳の人、佛戒に依らず、三業を護らざることは、放逸懈怠にして、他人を輕慢し、是非を輕量するを根本と爲す。

一たび心戒を破れば、百過俱に生ず。

評に曰く、「此の如きの魔徒、末法熾盛にして、正法を惱亂す、學者之を詳かにせよ。」

若し戒を持せざれば、尙ほ疥癩野干の身をも得ず、況んや清淨菩提の果を冀ふべけんや。

戒を重んずること佛の如くなれば、佛常に焉に在り。須らく草繫、鷲珠以て先導と爲すべし。

生死を脱せんと欲せば、先づ貪欲及び諸の愛渴を斷ぜよ。

愛は輪廻の本たり、欲は受生の緣たり。佛云はく、「婬心除かずんば、塵出づべからず。」又云はく、「恩愛に一たび縛著すれば、人を率ゐて罪門に入る」と。渴は情愛の至切なるなり。

無礙清淨の慧、皆禪定に因つて生ず。

凡を超えて聖に入り、坐脱立亡するもの、皆禪定の力なり。故に云く、聖道を求めんと欲せば、此れを離れて路なし。

心定にあるときは、則ち能く世間生滅の諸相を知る。

虚隙の日光、織埃擾擾たり。清潭の水底、影像昭昭たり。

境を見て心の起らざるを不生と名く、不生を無念と名く、無念を解脱と名く。

戒や定や解や、一を擧すれば三を具す、是れ單相にあらず。

道を修し滅を證するは、是れ亦眞に非ず、心法本寂、即ち眞滅なり。故に

戒や定や解や、一を擧すれば三を具す、是れ單相にあらず。道を修し滅を證するは、是れ亦眞に非ず、心法本寂、即ち眞滅なり。故に

だ去らず、長者の態度備はらざるを云ふ。

婬を帯びて云云。此の義楞嚴六に詳かに出づ。

三無漏學。戒定慧のこと。

「小乘は」より「思犯なし」に至るまで、溫陵の解語。

「婬は清淨」以下「正路を失す」までは智覺禪師垂誡の語。

六神通。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通なり。

無憶。思犯なきこと。

靈山。釋尊說法の地、少林寺は達磨大師面壁坐禪の所。

三業。身、口、意の三所に就て起す所作なり。殺盜淫等は身業、妄語綺語等は口業、貪瞋痴慢等は意業なり。

疥癩。惡病なり。野干は狐に似て小なり、色は青黄、群行して夜鳴くこゝ狼の如しこ、獸の名。

草繫。大莊嚴論經に出づ、昔比丘あり、草野に於て賊のたりに掠奪せられ、且生草を以て繫がる、比丘、身を脱せん

とするに、草を傷けんことを恐れ、炎熱の下に裸體にして立つ、偶遊獵の王のために助けらる。草木を毀傷せざるは佛戒なり、王之感じて佛門に入る。鷲珠は大藏一覽

三にあり、古一比丘あり、珠師の家に到る、偶一鷲來りて誤りて珠玉を呑む、珠師之を知らずして比丘を責む、比丘は驚の害せられんことを恐れ黙して之を語らず、珠師又鷲を追はんとして過つて之を死に致す、而して後始めて比丘告ぐるに實を以てせり、不殺生成は戒の第一なり。

佛云く。楞嚴卷六にあり。

座。迷妄の世界のこと。

曰く、「諸法本來より、常自ら寂滅相」と。

眼は自らを見ず、見眼は妄なり。故に妙首

は思量し、淨名は杜默す。此れより下には、

散じて細行を擧す。

貧人來つて乞へば、分に随つて施與す。同體の

大悲、是れ眞の布施なり。

自他の一たるを同體と曰ふ。空手にして

來り空手にして去る、吾が家の活計。

人あり來つて害せんに、當に自ら心を攝すべし、

嗔恨を生ずること勿れ。一念の嗔心起れば、百

萬の障門開く。

煩惱無量なりと雖も、嗔慢を甚だしと爲す。

涅槃に云く、「塗割兩ながら無心。曠は冷雲

中の霹靂の火を起し來るが如し。

若し忍行無くば、萬行成らず。

②又云く。正法念經に出づ。

③此の語は圓覺經の文なり。辨

音章の偈に、「辨音汝當に知る

べし、一切諸菩薩無礙清淨云

云。」

④坐脱立亡。坐禪しながら死し

立ちながら死すること、即ち

生死に於て自由自在を得ること。

⑤故に云く。以下の文、禪源集

の上の六丁にあり。

⑥此の語は遺教經に出づ。

⑦境。眼、耳、鼻、舌、耳、意の

六識の對象なるもの。

⑧此の語は法華經方便品に出

づ。

なす。是に於て文殊、維摩に

問ふて曰く、「我等各自に説き

已る、仁者當に説くべし、何

等が是れ菩薩入不二の法門。」

維摩默然たりき。悉くは維

摩經卷八入不二法門品に出

づ。

⑨同體。妻の愛は夫の愛さな

り、子の病は親の苦さなる、

是れ同體なり。

⑩空手。餘物を蓄積せぬこと。

⑪塗割兩無心。華嚴經論に、尸

利種多なるもの、佛を害せん

として、火坑毒食を設く、而

も害することを得ず、乃ち過

を悔いて號泣す。佛告けて曰

く、「汝憂怖すること勿れ」と、

即ち偈を説き給ふ云云と。塗

は栴檀香水を塗ること、指

し、割は刀を加ふることを云

ふ、此の異なる二人に對し

ても、佛は愛憎なしと。

⑫此の語は法空經に出づ。

行門無量なりと雖も、慈忍を根源と爲す、忍心は幻夢の如く、辱境は

龜毛の如し。

本真心を守るは、第一の精進なり。

若し精進心を起さば是れ妄、精進するに非ず。故に云く、「莫妄想莫妄

想。」懈怠といふは、常々に後を望む、是れ自棄の人なり。

持咒といふは、現行は制し易し、自ら行じて違すべし。宿業は除き難し、

必ず神力を借る。

魔登が得果は信に誣ひず。故に神咒を持せずして、魔事を遠離する者

には是の處あること無し。

禮拜といふは敬なり伏なり、眞性を恭敬し、無明を屈伏す。

身口意清淨なるときは、則ち佛出世す。

念佛といふは口にあるを誦と曰ひ、心にあるを念と曰ふ。徒に誦して念を失すれば、道に於て益な

し。

阿彌陀佛六字の法門は、定んで輪廻を出づるの捷徑なり。心則ち佛境界に縁すれば、憶持して忘ぜ

ず、口則ち佛の名號を稱すれば、分明て亂れず、是の如く心口相應するを名づけて念佛と曰ふ。

評に曰く、「五祖云く、『本真心を守るは、十方の諸佛を念ずるに勝れり。』六祖云く、『常に
 念ずれば、生死を免れず、我が本心を守れば、即ち彼岸に到る。』又云く、『佛は性中
 に向つて作す、身外に向つて求むること莫れ。』又云く、『迷人は佛を念じて、生を求む、悟人
 は自ら其の心を浄うす。』又云く、『大抵は衆生、心を悟つて自ら度す、佛、衆生を度すること
 能はず、云云。』如上の諸徳は直に本心を指す、別に方便なし、一方は一法を將ち、便は諸根
 に返る。』理實に是の如し。然れども、迹門實に極樂世界あり、阿
 彌陀佛四十八の大願あり、凡そ念ずること十聲する者は、此の
 願力を承けて、蓮胎に往生し、徑に輪廻を脱す。三世の諸佛、異
 口同音、十方の菩薩、同じく往生せんことを願ふ。又況んや古今
 往生の人、傳記昭昭たり、願はくは諸行者、慎んで錯つて認む
 こと勿れ。之を勉めよ之を勉めよ。」

梵語に阿彌陀、此には無量壽と云ふ、亦無量光と云ふ、十方三
 世第一の佛號なり。因名は法藏比丘、世自在王佛に對す。
 四十八願を發して云はく、「我れ作佛の時、十方無央數世界の諸
 天人民より以て蜻飛蠕動の流に至るまで、我が名を念ずること

- ⑤五祖。弘仁大滿禪師をいふ。
- ⑥六祖。慧能大鑑禪師をいふ。
- ⑦生。往生淨土の略。
- ⑧方便。淨名疏に云く、「巧に諸法を用ひて機に隨つて物を利用す、故に方便と云ふ。」又演義に云く、「方は所謂方法、便は所謂便宜。」
- ⑨迹門。本門に對す、方便垂迹の門なり。
- ⑩念ずること十聲。觀無量壽經に説く十念往生是れなり。
- ⑪因名。因地の修行をなしつつありし時の名。因地は又因位

十聲する者は、必ず我が刹中に生ぜん、是の願を得ずんば、
 終に成佛せじ、云云」と。先聖云く、「唱佛一聲、天魔膽を喪
 す、除鬼簿と名づく、蓮は金池より出づ。」又懺法に云く、
 「自力他力、一遲一速、海を越えんと欲するもの、樹を種えて船
 を作るは遅なり、自力に比す。船を借りて海を越ゆるは速なり、
 佛力に比す。」又曰く、「世間の稚兒、水火に迫られ、高聲に大い
 に叫ぶときは、則ち父母之を聞きて急ぎ走つて救援す。人臨命
 終の時、高聲に念佛するが如きんば、則ち佛神通を具して、決
 定して來つて爾を迎ふ。」是の故に大聖の慈悲は、父母に勝れり、
 衆生の生死は、水火よりも甚だし。人有りて云ふ、自心淨土、淨土生ずべからず、自性彌
 陀、彌陀見るべからずと。此の言是に似て非なり。彼の佛は貪なく嗔なし、我れも亦貪嗔
 無からん乎。彼の佛は地獄を變じて蓮花と作すこと、掌を返すよりも易し。我れは則ち
 業力を以て常に自ら地獄に墮ちんことを恐る、況んや變じて蓮花と作さんをや。彼の佛は
 無盡世界を觀ること目前に在るが如し、我れは則ち壁を隔つる事、猶ほ知らず、況んや十
 方世界を見ること目前の如くならんをや。是の故に人人、性は則ち佛なりと雖も、而も行

- ⑫刹。梵語、譯して田、土、國等と云ふ、國土のこと。
- ⑬蓮は金池。阿彌陀經に云く、「池底は純ら金沙を以て地に布く、乃至池中の蓮花の大き車輪の如し、云云。」
- ⑭懺法五部九卷に出づ。
- ⑮自稱す、未だ佛果を得ざる菩薩の地位なり。
- ⑯世自在王佛。法藏比丘の師佛なり、比丘此の佛の前に於て四十八願を建立せり。無量壽經に出づ。

は則ち衆生なり、其の相用を論ずれば、天地懸隔す。圭峯云く、「設ひ實に頓悟すとも、終に須らく漸行すべし」と。誠なるかな是の言や。然れば則ち語を寄す、自性彌陀といふ者に、豈に天生の釋迦、自然の彌陀あらんや。須らく付量すべし、人豈に自ら知らざらんや。臨命終の時、生死の苦際、定んで自在を得るや否や。若し是の如くならずんば、一時の貢高を以て却て永劫の沈墮を致すこと莫れ。又馬鳴・龍樹は悉く是れ祖師なり、皆明かに言教を垂れて、深く往生を勸む。我れ何人ぞや、往生せんと欲せざる。又自ら云ふ、西方此を去ること遠し、夫れ十萬①「十惡」八千②「八邪」と。此れは鈍根の爲に相を説くなり。又云ふ、西方此を去ること遠からず、即心「衆生」是佛「彌陀」と。此れは利根の爲に性を説くなり。教に權實あり、語に顯密あり、若し解行相應する者は、遠近俱に通ず。故に祖師門下にも、亦或は阿彌陀佛と喚ぶ者③「惠遠」、或は主人公と喚ぶ者④「瑞岩」有り。

①圭峯。五燈會元卷二に曰く、「終南山圭峯宗密禪師は果州西充の人姓は何氏云云」と、原人論其他多くの著あり。禪を遂州道圓に參じ、華嚴を清涼澄觀に學び、大いに教禪の一致を唱ふ。

②馬鳴。西天の第十二祖、大乘起信論、大莊嚴論、佛所行讚等の著あり、盛んに大乘佛教を鼓吹す。龍樹は西天の第十四祖、大智度論百卷、十住毘婆娑論十七卷、中觀論四卷、十二門論一卷等の著あり、八宗共に祖師と仰ぐ。

③十惡。殺生、偷盜、邪淫、兩舌、惡口、綺語、妄語、貪欲、瞋恚、邪見。八邪とは邪見、邪思惟、邪語、邪業、邪精進、邪定、邪念、邪命。

④惠遠。廬山の白蓮社に一百廿三人と共に念佛を修す。

聽經は經耳の緣、隨喜の福あり。幻軀は盡くることあり、實行は亡ぜず。此れは智學を明す、①金剛を食するが如きんば、七寶を施すに勝れり。②壽師云く「聞いて信ぜざるも、尙ほ佛種の因を結ぶ、學んで成せざるも、猶ほ人天の福を益す」と。看經若し自己上に向つて工夫を做さずんば、③萬藏を看盡すとも猶ほ益無し。

此れは愚學を明す、④春禽晝啼き、秋蟲夜鳴くが如し。⑤密師云く、「字を識り經を見るも、元悟を證せず、文を銷し義を釋するは、唯だ貪味⑥見を熾んにす」と。

學未だ道に至らずして、見聞を銜耀して、徒らに口舌辨利を以て相勝つものは厠屋に⑦丹牒を塗るが如し。

別に末世の愚學を明す、學は本性を修す、全習人の爲にす、是れ誠に何の心ぞや。

出家の人の⑧外典を習ふは、刀を以て泥を割くが如し、泥用ふる所なくして刀自ら傷る。

①瑞岩。師彦禪師は岩頭全齋に嗣法し、台州丹丘の瑞岩山に住す、一生常に座して自ら喚んで曰く、「主人公」と、亦自ら應諾す、乃ち曰く、「慳々着、他時人の瞞を受くること勿れ」と。

②金剛を食す。金剛は身中に入るも肉身に雜らずして、遂に體外に穿出す。凡夫の佛經を聽くも亦斯の如し、迷妄に雜穢せずして、因緣熟すれば菩提の華を開く。

③壽師。永明智覺延壽禪師は法眼下の天台德韶に嗣ぐ、宗鏡錄百卷其の他の著あり。

④萬藏。藏は藏經の意、一切藏經のこと。

⑤春禽。張無盡が僧堂記に、「春禽晝啼き、秋蟲夜鳴く、風氣の使ふ所、會て意謂なし」と。

⑥密師。圭峯宗密禪師、上記の語は其の著禪源略證に出づ。

門外の長者子、還つて火宅の中に入る。

家を出て僧となる、豈に細事ならんや。安逸を求むるに非ず、温飽を求むるに非ず、利名を求むるに非ず、生死の爲なり、煩惱を斷ぜんが爲なり、佛の慧命を續かんが爲なり、三界を出でて衆生を度せんが爲なり。

謂つべし、衝天の大丈夫と。

佛云はく、「無常の火、諸の世間を燒く。」又云はく、「衆生の苦火、四面俱に燒く。」又云はく、「諸煩惱賊、常に人を殺さんと伺ふ」と。道人宜しく自ら警護して、頭燃を救ふが如くすべし。

身に生老病死あり、界に成住壞空あり、心に生住異滅あり、此れ無常の苦火、四面俱に焚く者なり。謹んで參玄の人に白す、光陰虚しく度ることを勿れと。

世の浮名を食りて、功を枉げて形を勞し、世利を求めんことを營めば、業火に薪を加ふ。

世の浮名を食るもの、人の詩あり、云く、「鴻天末に飛んで迹を沙に留む、人黄泉に去つて名家に在り。」世利を求むることを營む者、人の詩あり、

云く、「百花を采り得て蜜と成して後、知らず辛苦誰が爲にか甜き。」功を枉げて形を勞するもの、水を鑿つて彫刻す、不用の巧なり。業火に薪を加ふるもの、色香を麁弊して、火の具を致す。

名利の衲子は草衣の野人に如かず。

金輪を唾して雪山に入る、千世の尊、不易の軌則なり。末世の羊質、虎皮の輩、廉恥を識らず、風を望んで勢に隨ひ、陰かに媚びて寵を取る、噫夫れ懲なら也夫。

心、世利に染むものは、權門に阿附し、風塵に趨走して、返つて笑を俗人に取る。此れ衲子、羊質を以て此の多行を證す。「懲なる也夫」の三字を以て之を結ぶ、此の三字の文は、莊子に出づ。

佛云はく、「云何が賊人我が衣服を假りて、如來を裨販して種種の業を造る。」

末法の比丘、多般の名字あり、或は烏鼠僧、或は啞羊僧、或は秃居士、或は地獄滓、或は被袈裟賊。噫其の所以は此れを以てなり。

如來を裨販するといふは、因果を撥し、罪福を排し、身口を沸騰

丹。丹は赤色、體は説文に「美丹なり」とあり。

外典。佛學を内典と云ふに對し、他の諸種の學問を外典と云ふ。

門外の長者子。法華經譬喻品に出づ、三界を火宅に喩ふ。

三界。迷界の三種、欲界、色界、無色界。

遺教經に出づ。

遺教經に出づ。

遺教經に出づ。

頭燃を救ふ。又頭然とも書く、二解あり。一、頭上の火を救ふが如くせよとの意、天台補注第十四に見ゆ。二、頭を救ふ、然ば助辭と見る、大論十三に出づ、云く、「野干ありて人家に入る、人あり、其の耳を切り取る、又他の人あり、其の尾を取り、又其の牙を取る、野干思へらく、將に頭をも取らるべしと、則ち勇

を鼓して隙を伺ひ、漸くに脱するを得、以て其の頭を救ひ得たりと。」

羅隱が蜂の詩に、「不レ論平地與三山尖、無限風光盡被レ占、採得百花成蜜後、不レ知辛苦爲レ誰甜。」

色香云云。法華經譬喻品に、「麁弊の色香味觸を食ふ、こと勿れ、若し食着して愛を生ぜば、則ち爲に燒かる、云云」

金輪。四輪王の最尊なり。金輪王、銀輪王、銅輪王、鐵輪王。今は釋尊の王位を捨てて出家せられたるを云ふ。

羊質虎皮。揚子法言に、「文有つて質無きものを羊質虎皮の輩と云ふ」と。

風塵に趨走す。晋の潘岳は性輕躁にして世利に趨る、賈謐に詔事し、毎に其の出づるを候ひ、塵を望んで拜せり、

して迭に愛憎を起す、惑と謂つべし。僧を避け俗を避くるを烏鼠と曰ひ、舌法を説かざるを啞羊と曰ひ、僧形にして俗心なるを禿居士と曰ひ、罪重うして遷らざるを地獄滓と曰ひ、佛を賣つて生を營むを被袈裟賊と曰ふ。被袈裟賊を以て此の多名を證す。此の二字にて之を結ぶ、此の二字の文は老子より出づ。

於戲、佛子一衣一食、農夫の血と織女の苦に非ずといふことなし、道眼未だ明かならずんば、如何が消得せん。

傳燈に「一道人道眼未だ明かならず、故に身木菌と爲りて、以て信施を還す」と。

故に曰く「披毛戴角底を知らんと要すや、即今虚しく信施を受くるものはなり。人あり、未だ飢えずして食し、未だ寒からずして衣る、是れ誠に何の心ぞや。都べて目前の樂みは便ち是れ身後の苦なることを思はず。」

智論に「一道人五粒の粟にて牛身を受く。生きては筋骨を償ひ、死しては皮肉を還す。虚しく信施を受くれば、報應響の如し。」

故に曰く「寧ろ熱鐵を以て身に纏ふとも、信心の人の衣を受けされ、寧ろ

是れ詔諛の甚だしきものなり。

① 莊子第六卷山木篇に出づ。

② 楞嚴六に出づ。

③ 烏鼠。蝙蝠のこと、外形は僧に似て内心は俗に同じ、之を蝙蝠の鳥の如く亦獸の如きに喩ふ。百喻因緣經に出づ。

④ 啞羊僧。大智度論に出づ。

⑤ 禿居士。涅槃經卷之三に出づ。

⑥ 以此の二字。老子經五十七章に出づ。

⑦ 木菌と云ふ。傳燈卷二に出づ、「毘羅國に長者あり、梵摩淨徳と云ふ、一比丘を尊信供養す。而も此の比丘道眼明ならず、死して即ち長者の家に木菌となりて生じ、以て其の信施を償ふ云云」と。

⑧ 此の語は慈受深禪師の示衆。

⑨ 智論。具に大智度論、龍樹の著にして百卷あり。

ろ 羊銅を以て口に灌ぐとも、信心の人の食を受けされ、寧ろ鐵鑊を以て身に投ずとも、信心の人の房舎等を受けされ」と。

梵網經に云く「破戒の身を以て、信心の人の種種の供養乃至種種の施物を受けされ、菩薩だも若し是の願を發せざるときは、則ち輕垢罪を得。」故に曰く「道人は食を進むるを毒を進むるが如くにし、施を受くるを箭を受くるが如くにす。弊厚く言甘きは、道人の畏るる所なり。」

食を進むるは毒を進むるが如しとは、其の道眼を喪はんことを畏るるなり。施を受くること箭を受くるが如しとは、其の道果を失せんことを畏るるなり。

故に曰く「修道の人は、一塊の磨刀の石の如し、張三も也た來り磨し、李四も也た來り磨す、磨し來り磨し去りて、別人の刀快にして、自家の石漸く消す。然れども人有りて、更に他人の我が石上來り磨せざることを嫌ふ。實に惜むべしと爲す。」

此の如き道人は、平生の所向、只だ温飽にあり。故に古語に亦之れ有り、曰く、「三途の苦は、未だ是れ苦ならず、袈裟

① 此語は梵網經に出づ、第三十

六不發誓戒。

② 洋銅。洋は鑄の意。

③ 此の語は法眼宗の永明延壽禪師小參にあり。

④ 磨刀の石。石を僧に比し、刀を施主に比す。僧に供養するは刀を磨するなり、僧の徳を減じ、施主の光を加ふ。

⑤ 張三李四。張、李は支那に最も多き姓氏なり、三四は猶ほ我が國の三郎四郎の如し、誰れも彼れも云ふほどのこと。

⑥ 古語。傳燈十五、洞山の章に出づ。

⑦ 三途。三惡趣に同じ、火途、血途、刀途の稱。地獄、畜生、餓鬼に當る。

⑧ 滴水。傳心法要に云く、「佛、阿難に告げ給ふ、汝千日惠を學せんより、一日道を學せんに若かず、若し道を學せずん

下に人身を失する、始めて是れ苦なり」と。

古人云く、「今生に未だ心を明めずんば、滴水も也た消し難し、此れ袈裟下に人身を失する所以なり。佛子佛子、之を憤し之を激せよ。」此の章は始め一の「於戲」に起り、終り一の古語に結ぶ、中間に許多の「故に曰」の字を細釋す、亦一段の文法なり。

咄哉此の身九孔、常に百千の癰疽、一片の薄皮を流ふ。又云く、「革囊に糞を盛る、膿血の聚、臭穢鄙んずべし。之を貪惜すること勿れ、何に況んや百年の將養、一息に恩に背くをや。」

上來の諸業、皆此の身に由る、聲を發して叱咄す、深く警あり。此の身は諸愛の根本、之を虛妄と了ずるときは、則ち諸愛自ら除く、其の耽着するが如きんば、則ち無量の過患を起す。故に此に於て特に之を明して、以て修道の眼を開く。

評に曰く、「四大主なし、故に一に四寇を假ると爲す。四大恩に背く、故に一に四蛇を養ふと爲す。我が虚妄を了ぜざるが故に、佗人の爲に也た之を噴し之を慢す、佗人も亦虚妄を了ぜざる

ば滴水も消し難し。」

②癰疽。醫書に曰く、「癰は六腑不和の生ずる所、疽は五臟不調の致す所、陽の陰に滯るときは癰を生じ、陰の陽に滯るときは疽を生ず」と。

③革囊。四十二章經に曰く、「天神、玉女を佛に獻じ、佛意を壞せん」とす。佛の云く、革囊の臭穢、爾ち來つて何爲るものぞ、去れ吾れ用ひず。」

④金光明經に出づ。

⑤四大。地水火風の四なり、萬物は此の四によりて成る。

⑥四蛇。大經二十四に云く、「四大の毒蛇之を一箇中に盛る云云」と。又涅槃經に出づ。

⑦二鬼の一屍を争ふ。大智度論に出づ。要は内身は四大假和合によりて成るものにして、實體なきことを説けるものなり。

⑧寶殿。佛殿のこと。

が故に、我が爲に也た之を噴し之を慢す。二鬼の一屍を争ふが若し、一屍の體たるや、一には泡聚と曰ひ、一には夢聚と曰ひ、一には苦聚と曰ひ、一には糞聚と曰ふ。徒速に朽つるのみに非ず、亦甚だ鄙陋なり。上の七孔は常に涕唾を流し、下の二孔は常に尿管を流す。故に須らく十二時中、身器を潔淨にして以て衆數に參ずべし。凡そ行履不淨の者をば、善神必ず背き去る。因果經に云く、「不淨の手を將つて經卷を執り、佛前に在つて涕唾するものは必ず當に廁蟲の報を獲べし」と。文殊經に云く、「大小便の時、木石の如くにして、慎んで語言作聲すること勿れ、又壁に畫し字を書すること勿れ、又痰を吐いて廁中に入るること勿れ。」又云く、「廁に登りて洗淨せざるものは、禪牀に坐することを得ざれ、寶殿に登ることを得ざれ。」律に云く、「初め廁に入る時、先づ須らく彈指三下して以て在穢の鬼を警むべし、默して神呪を誦すること各七遍、初め入廁の呪を誦して曰く、『唵狼嚙陀耶莎訶。』次に洗淨の呪を誦して曰く、『唵賀曩密唎帝莎訶。』右手に瓶を取り、左手に「無名指を用ふ」之を洗ふ、淨水旋旋に之を傾けて、著實に洗淨す。次に洗手の呪を誦して曰く、『唵主迦囉野莎訶。』次に去穢の呪を誦して曰く、『唵室利曳婆醯婆嚩賀。』次に淨身の呪

①彈指。指を以てはじくこと。彈指に二種あり、一に驚覺彈指、二に不淨彈指之れなり、一は寮中又は廁中等に入るこき、豫め其の人を驚覺せしむるため、二は不淨なるものを見、又は廁より出でたるまき其の不淨を除くため。

②唵狼。原本には此の以下五個の呪文には梵字を附しあれども、編輯上の都合により省く。

を誦して曰く、「唵跋折囉憍迦吒婆嚩賀」と。此の五神咒は大威徳あり、諸の惡鬼神聞けば必ず手を拱く。若し如法に誦持せざるときは、則ち七恒河の水を用つて、洗ふて金剛際に至ると雖も、亦身器清淨なることを得じ。」又云く、「洗淨には須らく冷水を用ふべし、洗手には須らく、皂角を用ふべし、又木屑灰泥も亦通ず。若し灰泥を用ひざるときは、則ち觸水其の手背に淋ぐとも、垢穢尚ほ存す。禮佛誦經すれば必ず罪を得云云」と。此れ登廁洗淨の法、亦是れ道人日用の行實なり。故に略經語を引いて并せて此に附す。

罪有れば 懺悔す、業を發すれば即ち慚愧す、丈夫の氣象有り。又過を改めて自ら新にすれば、罪心に随つて滅す。

懺悔といふは其の前愆を懺し、其の後過を悔す。慚愧といふは慚を内に責め、愧を外に發す。然して心本空寂なれば、罪業寄るところ無し。

道人は宜しく應に 心を端しうして、質直を以て本と爲すべし。一瓢一衲 旅泊にも累なし。

佛云はく、「心は直絃の如し。」又云はく、「直心是れ道場」と。若し此の身に耽着せざるときは、則ち必ず旅泊にも累なし。

凡夫は 境を取り、道人は心を取る。心境兩ながら忘じて、乃ち是れ眞

法。

境を取るものは 鹿の空華を趣ふが如し、心を取るものは 猿の水月を捉ふるが如し。心境殊なりと雖も、病を取ることは則ち一なり。此れは合せて凡夫と 二乗とを論ず。

天地尚ほ空す秦の日月、山河にも見ず漢の君臣。

聲聞は林中に冥坐すれども、魔王に捉せらる、菩薩は世間に遊戯すれども、外魔見れず。

聲聞は静を取つて行となす、故に心動ず、心動ずるときは則ち鬼見る。菩薩は性自ら空寂なり、故に迹無し、迹無きときは則ち外魔見れず。此れは合せて二乗と菩薩とを論ず。

三月遊ぶに懶し花下の路、一家愁ひ閉づ雨中の門。

凡そ人臨命終の時、但だ 五蘊皆空と觀じて、四大無我、眞心無相、不去不來、生ずる時性亦生ぜず、死する時性亦去らず、湛然圓寂、心境一如。但だ能く是の如く直下に頓了すれば、三世の爲に拘繫せられず、便ち是れ出世自由の人なり。若し諸佛を見て隨ひ去るに心なく、若し地獄を

① 皂角。さいかちの實にて作れる一種の洗粉、實は藥用莢は物を洗ふに用ふ。

② 懺悔。懺は梵語懺摩の略、悔過を譯す、更に悔の字を加へたるは、梵漢兼舉せるなり。

③ 此の語は遺教經に出づ。

④ 直心是道場。維摩經に出づ。

⑤ 境。心識の對象となる一切萬法のこと。

⑥ 鹿の空華を趣ふ。楞伽經に曰く、「群鹿渴のために逼られ、春時の鏡を見て水への想をなし、迷亂馳趣して水に非ざるを知らず云云」と。

⑦ 猿の水月を捉ふ。賢愚經に曰く、「暗夜に衆獼猴有りて、樹井の傍に於て忽ち月影を見り、更に便ち遞相して井に下り、月を捉へんとするが如し、其の所得を欲して終に得べからず云云」と。天地云云の句は人境兩俱奪をいふ。

⑧ 二乗。聲聞乘と緣覺乘なり、共に小乗の行者。

⑨ 此の語は黃檗希運禪師の傳心法要に出づ。三月は菩薩、一家は聲聞。

⑩ 五蘊。色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊のこ。蘊は積集の義。一切諸法を此の五に分類す、但し有爲法に限る。

⑪ 此の句は無業國師の語なり。泥塗。梵語なり、那落迦とも

見て怖畏するに心なく、但だ自ら無心なれば法界に同じ、此れ即ち是れ要節なり。然れば則ち平常は是れ因、臨終は是れ果。道人須らく眼を著けて看るべし。

死を怕れて老年に釋迦に親む、如し此の時に向つて自己を明めば、百年の光影頭を轉じて非ならん。

凡そ臨命終の時、若し一毫毛も凡聖の情量盡さず、思慮未だ忘ぜざらんば、驢胎馬腹裏に向つて托質し、泥犁鑊湯中に煮爍せられん。乃至依然として再び螻蟻蚊虻と爲らん。

白雲云く、「設ひ一毫毛凡聖の情念をして淨盡せしむるとも、亦未だ驢胎馬腹の中に入ることを免れず。二見星飛んで、散じて諸趣に入る。」
烈火茫茫として、寶劍門に當る。

評に曰く、「此の二節は特に宗師の無心合道の門を開いて、權に教中念佛求生の門を遮る。然れども根器同じからず、志願も亦異なり、各各是の如し、兩ながら相妨げず。願はくは諸道者、平常に分は随つて、各自に力を勞し、最後刹那に疑悔を生ずること莫れ。」
禪學の者本地の風光、若し未だ發明せざるときんば、則ち孤峭玄關何れよりか透らんと擬す。往々に

云ふ、地獄、冥府など譯す、鑊湯は火鼎に沸騰せる湯なり、地獄の苦を云ふ。
白雲。白雲守端禪師は楊岐方會禪師に嗣法す。
二見。斷見、常見、又は有見、無見など指す、但し茲は凡聖の情念を指せるなり。寶劍は二見を截斷するをいふ。
斷滅空。一切空蕩蕩として虚無なりと偏見。

斷滅空を以て禪と爲し、無記空を以て道と爲し、一切俱に無を以て高見と爲す。是れ冥然たる頑空にして、病を受くること幽し矣。今天下の禪を言ふ者多くは此の病に坐在す。

向上の一關、足を措くに門なし。雲門云く、「光透脱せざるに、兩種の病あり、法身を透過するも、亦兩種の病あり、須らく一一透得して始めて得べし。」

芳草の路に行かずんば、落花の村に至り難し。

宗師にも亦多病あり。病耳目に在るものは、瞠眉怒目、側耳點頭を以て禪と爲す、病口舌にある者は、顛言倒語、胡喝亂喝を以て禪と爲す、病手足にある者は、進前退後、東を指し西を畫するを以て禪と爲す、病心腹にある者は、玄を窮め妙を究め、情を超え見を離るゝを以て禪と爲す。實に據つて論ずれば、是れ病に非ずといふことなし。
父母を殺す者は、佛前に懺悔す、般若を謗するものは、懺悔するに路なし。

空中に影を撮るも妙とするに非ず、物外に蹤を追ふも豈に俊機なら

無記空。無慧の定なり、此れ但だ冥冥として揀擇する所なきなり。
雲門云く。五燈會元卷十五に曰く、「上堂云く、光透脱せざるに兩般の病あり、一切處明かならず、面前に物有り、是れ一、又一切法空なりと透得すれども、隱隱地に箇の物あるに似て相似たり、亦是れ光透脱せざるなり。又法身にも亦兩般の病あり、法身に到ることを得るも、法執忘ぜざるがために、己見猶ほ存して法身邊に坐在す、是れ一、たごへ法身を透得し去るも放過せば、即ち不可なり、手細に點檢し將ち來らば、甚麼の氣息がある、亦是れ病なり」と。
病耳目以下以て禪と爲すに至る文は、禪門寶訓の下巻に出づ。
瞠眉怒目。一原本には「瞠眉

んや。

本分の宗師は、此の句を全提す。木人唱拍し、紅爐の點雪の如く、亦石火電光の如し、學者實に擬議すべからず。故に 古人師恩を知つて曰く、「先師の道徳を重んぜず、只だ先師の我が爲に説破せざることを重んず。」

道はじ道はじ恐らくは紙墨に上せん、箭江月の影を穿つ須らく是れ射鵰の人なるべし。

大抵學者は先づ須らく詳かに宗途を辨ずべし。昔馬祖一喝するや百丈耳聾し、黄檗舌を吐く。這の一喝は便ち是れ拈花の消息、亦是れ達磨初來底の面目なり。吁此れ臨濟宗の淵源なり。

法を識るものは懼る、聲に和して便ち打たん。杖子一枝節目なし、慇懃に分付す夜行の人。

昔馬祖一喝するや、百丈大機を得、黄檗大用を得。大機とは圓應を義と爲し、大用とは直截を義と爲す。事は傳燈録に見えたり。

大凡そ祖師の 宗途五あり。曰く臨濟宗、曰く曹洞宗、曰く雲門宗、曰く滄仰宗、曰く法眼宗。

臨濟宗

本師釋迦佛より ①三十三世に至り、六祖慧能大師下直傳、曰く南嶽懷讓、曰く馬祖道一、曰く百丈懷海、曰く黄檗希運、曰く臨濟義玄、曰く興化存獎、曰く南院首顙、曰く風穴延沼、曰く首山省念、曰く汾陽善昭、曰く慈明楚圓、曰く楊岐方會、曰く白雲守端、曰く五祖法演、曰く圓悟克勤〔曰く徑山宗杲〕禪師等。

曹洞宗

六祖下傍傳、曰く青原行思、曰く石頭希遷、曰く藥山惟儼、曰く雲巖曇晟、曰く洞山良价、曰く曹山耽章、曰く雲居道膺禪師等。

努目」に作る。

②僧あり、雲門に問ふ、「父を殺し母を殺しては、佛前に向つて懺悔す、佛を殺し祖を殺しては何れの處に向つてか懺悔せん。」門云く、「露。」

③古人。洞山良价禪師なり。會元十三洞山の章に出づ。

④馬祖一喝。百丈侍立する次

で、祖繩床角の拂子を目視す、師曰く、「此の用に即するか此の用に離るか。」祖曰く、「汝向後兩片皮を聞きて、何を將つてか人の爲にせん。」師、拂子を取つて堅起す。祖曰く、「此の用に即するか此の用に離るか。」師拂子を奮處に挂く。祖、威を振つて一喝す。師直に得たり三日耳聾するこゝを。他日黄檗、百丈の此の話を擧するを聽きて、覺えず舌を吐く。事は傳燈卷六に詳かなり。

②拈花。世尊一日靈鷲山に於て説法の時、梵王金波羅華を獻す。世尊高座上より此の花を拈出して一語なし、大衆其の意を會せず。只だ迦葉のみあつて破顔微笑す。

③宗途五あり。以上記する所のものは禪の五家を稱し、之に後世臨濟下より楊岐、黄龍の二分派を生じたるものを加へて七宗と云ふ。中峯録に云ふ、五家は其人を五家にす、其道を五家にするに非ず。

④三十三世。世尊より迦葉、阿難等を経て廿八傳して達磨に至り、更に六傳して慧能大師に至る。西天の四七、東土の二三と云ふ、即ち是れなり、達磨は西天の第廿八祖にして其の東土の第一祖として重ねて數ふ、故に三十四祖と云ふ。然れども、實は三十三祖たり、但し西天には釋尊を除き、迦葉を第一祖とするなり。

⑤臨濟義玄。姓は刑氏、曹州南華の人、幼にして出家、初な尼尼を究め、深く經論を探る。後黄檗に參じて三頓の棒を喫し、高安大愚の許に至りて、黄檗の深旨を領す、即ち黄檗の印可を得。後鎮州城南南漳沱河の畔に住し、大に宗風を擧ぐ、臨濟は其の住院の名なり、依つて後世此の法系に屬するものを臨濟宗と云ふ。師の家風極めて峭峻なり、爲めに臨濟將軍の稱あり、門下は興化、三聖等の英俊を打出す。南院首顙は慧顙と作すべし、原本の誤なり。

⑥洞山良价。姓は俞氏、會稽の人、幼にして出家、諸方に歴參し、後雲巖曇晟に參じて其の衣鉢を嗣ぐ、洞山普利院に住して門下常に數百の衆を擁す、此の法脈を嗣ぐものを曹

雲門宗

馬祖傍傳、曰く天王道悟、曰く龍潭崇信、曰く徳山宣鑑、曰く雪峯義存、曰く雲門文偃、曰く雪竇重顯、曰く天衣義懷禪師等。

滄仰宗

百丈傍傳、曰く滄山靈祐、曰く仰山慧寂、曰く香嚴智閑、曰く南塔光涌、曰く芭蕉慧清、曰く霍山景通、曰く無著文喜禪師等。

法眼宗

雪峰傍傳、曰く玄沙師備、曰く地藏桂琛、曰く法眼文益、曰く天台德韶、曰く永明延壽、曰く龍濟紹修、曰く南臺守安禪師等。

洞宗云ふ。曹洞の名は六祖大師住院の地、曹溪の曹と洞山の洞の二字を取りて名づけたるものなりと、又一説には洞山の嗣曹山本寂禪師が、師の宗風を繼承して、大に家聲を擧ぐ、即ち其の曹の一字と洞山の洞をとりて斯く稱せりとも云ふ。五位は師の唱出せる所たり、其の宗風綿密、依つて曹洞土民の稱あり。

雲門文偃。支那姑蘇嘉興の人、姓は張氏、初め睦州に参じ、後雪峯義存に詣りて大事を了す、詔州雲門山光泰院に移りて、宗乘を擧揚す、天下の後秀競ふて其の門に趨る、師の宗旨を擧するや、妙唱古今に絶し、幽玄機微に入る、すなはち雲門天子の稱あり、雲門宗は師の法系なり。

滄山靈祐。福州長谿の人、姓は趙氏、十五にして出家、初

め律を學び、又大小乗の諸教を究む、後百丈に参じて其の宗風を嗣ぐ。弟子に仰山慧寂あり、今の廣東省廣州府の人、能く師の宗風を受けて師資唱和、共に手に携へて家聲を揚ぐ、滄仰の二宗是れより起る。

法眼文益。支那餘杭の人、姓は魯氏、幼にして出家、諸教を探る、長じて羅漢桂琛に参じ、苦修多年、遂に其の蘊奥を盡す、報恩院、清涼寺等に住し、盛んに化を揚ぐ、學者常に門下に輻湊す、嗣法の弟子六十餘員を打出す、師の門下是れを法眼宗と云ふ。

以下五家の家風、多く人天眼目によつて之を述ぶ。

臨濟家風

赤手單刀にして佛を殺し祖を殺し、古今を玄要に辨じ、龍蛇を主賓に驗む。金剛の寶劍を操つて、竹木の精靈を掃除し、獅子の全威を奪つて、狐狸の心膽を震裂す。臨濟宗を識らんと要すや。

青天に霹靂を轟かし、平地に波濤を起す。

曹洞家風

權に五位を開いて、善く三根を接す、横に寶劍を抽いて、諸見の稠林を斬り、妙に弘通に協つて、萬機の穿鑿を截る。威音那畔、滿目烟光、空劫以前、一壺の風月。曹洞宗を識らんと要すや。

佛祖未生空劫の外、正偏有無の機に落ちず。

雲門家風

劍鋒路有り、鐵壁門なし、露布の葛藤を掀翻し、常情の見解を剪却す。迅雷思量するに及ばず、裂爛寧ろ溼泊を容れんや。雲門

は一要、二要、三要なり。

主賓。臨濟に四賓主の語あり、賓中賓、賓中主、主中賓、主中主、是れなり。

金剛の寶劍。臨濟曰く、「或時の一喝は金剛玉寶劍の如く、或時の一喝は賸地金毛の獅子の如く云云。」所謂四喝是れなり。

五位。洞山良价の唱出せるもの、正中偏、偏中正、正中來、兼中至、兼中到是れなり。曹山曰く、「正位は空界に屬し、本來物無し、偏位は色界に屬し、萬の形像有り、云云。」

三根。上中下の三種の根機。威音。威音王如來の略、古佛の名なり、法華經常不輕品に出づ、威音王以前は天地未分以前の義。那畔とは又那邊とも云ふ、這邊に對す、彼方の義。

宗を識らんと要すや。

拄杖子躡跳して天に上り、蓋子裏に諸佛說法す。

瀉仰家風

師資唱和、父子一家、脇下に字を書して、頭角崢嶸、室中に人を驗して、獅子の腰折る。四句を離れ、百非を絶す、一槌粉碎す。兩口有つて一舌なし、九曲珠通ず。瀉仰宗を識らんと要すや。斷碑古路に横はり、鐵牛少室に眠る。

法眼家風

言中に響有り、句裡に鋒を藏す、鬪體常に世界に于てし、鼻孔家風に磨觸す。風柯月渚、真心を顯露し、翠竹黃化、妙法を宣明す。法眼宗を識らんと要すや。風斷雲を送つて嶺に歸り去り、月流水に和して橋を過ぎ來る。

別に臨濟の宗旨を明す

大凡そ一句中に三玄を具し、一玄中に三要を具す、一句は無文綵の即、三玄三要是有文綵の即。權實は玄、照用は要。

三句

第一句、喪身失明。第二句、未だ口を開かざるに錯。第三句、糞箕掃帚。

三要

一要、照即大機。二要、照即大用。三要、照用同時。

三玄

體中玄、三世一念等。句中玄、徑截言句等。玄中玄、良久棒喝等。

四料揀

奪人不奪境、下根に待す。奪境不奪人、中根に待す。人境兩俱奪、上根に待す。人境俱不奪、出格の人に待す。

四賓主

賓中賓、學人鼻孔無し、問有り、答あり。

國譯禪家龜鑑

住壞空の四にして、世界の生成より破滅に至るまでの四大時期なり、壞劫の甘小劫終りて、世界全く空に歸し、更に次の成劫に至るまでの間を云ふ。

露布。祖庭事苑第六に曰く、「詔表を封せざるを露布」と。

脇下に字を書す。會元第九に曰く、「瀉山、上堂して曰く、老僧百年後、山下に向つて一頭の水牯牛を作らん、左脇下に五字を書して、瀉山僧某甲と、恁麼の時に當り、喚んで瀉山僧の作さば又是れ牛牯牛、喚んで水牯牛を作さば、又是れ瀉山僧、畢竟喚んで其麼と作さば即ち得ん云云。」

九曲珠。東坡が詩の註に、「九曲の寶珠を得る有り、之を穿つとを得ず、孔子教へて以て脂を線に塗りて蠶をして通ぜしむ」と。又事苑第五に見え

人。問ふ、「如何なるか是れ第三句。」師云く、「棚頭に傀儡を弄するを看取せよ、抽牽都來裏に人有り」と。

四料揀。臨濟録上卷に、師晚參、衆に示して曰く、「有る時は奪人不奪境、有る時は人境兩俱不奪、有る時は人境俱不奪」と。

人。境。人とは主觀なり、心と云ふも自と云ふも同じ、境とは客觀にして物なり、一切萬法なり。臨濟録註に、「人は心意識を謂ひ、境とは一切の文字言句並に山河大地等を謂ふ」と。

四賓主。臨濟録上卷に云く、「主客相見するが如きんば便ち言論往來あり、或は物に應じて形を現じ、或は全體作用し、或は機權を把つて喜怒し、或は半身を現じ、或は獅子に乗り、或は象王に乗る云云。」

り。賓中主、學人、鼻孔有り、主有り
法あり。主中賓、師家鼻孔無し、問の
在る有り。主中主、師家鼻孔あり、妨
げず奇特なることを。

四照用

先照後用、人の在る有り。先用後照、
法の在る有り。照用同時、耕を驅り
食を奪ふ。照用不同時、問有り答有り。

四大式

正利、少林面壁の類。平常、禾
山打鼓の類。本分、山僧不會の類。
貢假、達磨不識の類。

四喝

金剛王寶劍、一刀揮つて一切の情解を
斷つ。踞地の獅子、言を發し氣を吐け

鼻孔。眼さ云ふに同じ、即ち
鼻孔の有無は宗旨の眼の有
無なり。

四照用。人天眼目上卷に出
づ、云く、一日衆に示して云
く、「或る時は先照後用、有る
時は云云」云。

耕を驅り。人天眼目の上に、
「照用同時、耕夫の牛を驅り、
飢人の食を奪ひ、骨を敲き髓
を取り、痛の針錐を下す」と
あり。

四大式。此の語は人天眼目を
はじめ他書に未だ見えざる所
なり、尙ほ下に出づる八棒と
共に著者の唱出せるものか。

少林面壁。達磨大師、梁武帝
に見えて機契はず、去つて嵩
山の少林寺に面壁九年す。
禾山打鼓。碧巖第四十四則に
備問ふ、「如何なるか是れ眞
過、」三曰く、「解打鼓、云云」
とあり。

山僧不會。僧あり、百丈に問
ふ、「四句を離れ百非を絶して
請ふ師某甲に西來意を直指せ
よ。」師云く、「山僧這裏に到つ
て却つて不會。」

達磨不識。碧巖第一則に出
づ、梁武帝、達磨大師に問ふ、
「如何なるか是れ聖諦第一
義、」磨云く、「廓然無聖、」帝云
く、「朕に對するものは誰ぞ、」
磨云く、「不識。」

四喝。臨濟錄勘辨に、師、僧
に問ふ、「有る時の一喝は金剛
王寶劍の如く、ある時の一喝
は踞地金毛獅子の如く、ある
時の一喝は探竿影草の如く、
ある時の一喝は一喝の用を作
さず、汝作麼生か會す。」僧疑
議す。師便ち喝す。

探竿影草。探影は外より屋内
へ差し入れて其の様子を探る
竹竿の類、影草は隠れ蓑にし
て、共に盗人の用ふるものな

ば、衆魔腦裂す。探竿影草、其の有無師承の鼻孔を探る。一喝
一喝の用を作さず、上の三玄四賓主等を具す。

八棒

令に觸れて玄に返し、接掃して正に從ひ、玄に靠けて正に復る。
苦責は罰棒、宗旨に順ふは賞棒、虚實あるは辨棒、盲枷は瞎棒、
凡聖を掃除するは正棒。

此等の法、特に臨濟の宗風のみに非ず、上諸佛より下衆生に至る
まで、皆分上の事なり。若し此れを離れて法を説かば、皆是れ妄
語。

臨濟の喝、徳山の棒、皆無生を徹證す、透頂透底、大機大用、自在無
方、全身出沒し、全身に擔荷して、退いて、文殊普賢大人の境界を守る。
然れども實に據つて論ぜば、此の二師も亦、偷心の鬼子なることを免れず。
凜凜たる吹毛鋒鏑を犯さず、燦燦たる寒光珠水に媚び、寥寥たる
雲散して月天に行く。

大丈夫は佛を見、祖を見るを冤家の如くす。若し佛に着いて求めば、

り、其他異説あり、されど
何れも物を探るに用ふる道具
なるは一なり。

八棒。臨濟錄、人天眼目等
に見えず。禪苑蒙求下卷に、
楊岐の八棒なるもの見ゆれど
も、註脚を缺くを以て知るを
得ず。

徳山の棒。徳山宣鑑禪師は龍
潭崇信の嗣なり。能く棒を行
じて來機を接す。五燈會元卷
七徳山の篇に、小參、衆に示
して曰く、「今夜答話せず、問
話するものは三十棒。」時に僧
有り、出でて禮拜す。師便ち
打つ。此の類の如し。

無生を徹證す。不生不滅の本
來の面目を徹底證見するな
り。
文殊普賢大人。文殊は智、普
賢は行、共に是れ有力の大人
なり。此の智行兼備へて、
初めて眞の大人と謂つべし。

佛に縛せられ、若し祖に着いて求めば、祖に縛せられん。求むること有るは皆苦なり、如かじ無事ならんには。

佛祖は冤の如しとは、上の無風起浪を結ぶ。求むることあるは皆苦なりとは、上の當體便是を結ぶ。如かじ無事ならんにはとは上の動念即乖を結ぶ。此に到つて天下の人の舌頭を坐斷す、生死の迅輪、庶幾ど停息せん。危を扶け亂を定む、丹霞の木佛を燒き、雲門の狗子に喫せしめ、老母佛を見ざるが如きんば、皆是れ邪を摧き正を顯はす底の手段なり。然れども畢竟如何。

常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。

神光不昧、萬古の微猷此の門に入り來らば、

知解を存すること莫れ。

神光不昧とは、上の昭昭靈靈を結ぶ。萬古の微猷とは、上の本不生滅を結ぶ。知解を存すること莫れとは、上の不可守名生解を結ぶ。門といふは、凡聖出入の義あり、荷澤の所謂知の一字衆妙の門といふが如し。吁、名狀不得に起つて、莫存知解に結ぶ、一篇の葛藤、一句に都て破す。然して始終一解中に萬行を擧す、世典の三義の如し。知解の二字は佛法の大害、故に時に擧げて之を終ふ。荷澤の神會禪師、曹溪の嫡子たることを得ざることは此れを以てなり。因つて頌に曰く、「斯くの如く擧唱して宗旨を明す、笑殺す。西來の碧眼僧。」然れども畢竟如何。「孤輪獨り照して江山靜かなり、自ら笑ふ一聲天地驚く。」

① 偷心の鬼子。偷心はぬすみ心なり、所求の心のやまざるなり。鬼子は人を罵る語、餓鬼小僧なぞの如し。

② 吹毛。支那に於ける名劍の名、刃に向つて毛を吹けば、悉く斷つ、故に此の名を得たりと。

③ 新豐和尚云く、「祖佛の言教を見るこそ、生冤家の如くにして、始めて參學の分あり、若し道ひ得ずんば、即ち祖佛に瞞ぜらん」と。

④ 以下は臨濟和尚の語、同語録に出づ。

⑤ 丹霞木佛。丹霞天然は石頭に嗣ぐ、寒日に木佛を燒いて暖を取る。院主見て之を責む。曰く、「燒いて舍利を取る」と。詳しく禪林類聚に見ゆ。

⑥ 雲門狗子。會元雲門の章に曰く、擧す、世尊初め生下して一手は天を指し、一手は地を

指し、周行七步、四方を日顧して云く、「天上天下唯我獨尊」と。師曰く、「我れ當時若し見ば一棒に打殺して狗子に與へて喫却せしめん云云。」

⑦ 老母佛を見ず。會元に曰く、「昔城東に老母あり、佛と同生にして佛を見るを欲せず、佛の來るを見る毎に、便ち迴避す、然も如此なりと雖も、東西を回顧すれば、總に是れ佛、遂に手を以て面を掩へば、十指掌中に於て總に是れ佛云云」と、大藏一覽の五、三十八丁に見えたり。

⑧ 神光不昧。此の句は平田普岸和尚の語なり、會元の四に出づ。

⑨ 上。卷頭なり。昭昭靈靈等の句、本書の最初に出づ。

⑩ 荷澤神會禪師は六祖の傍傳の法嗣たり。師の語に云く、「空寂の體の上、自ら本智有りて

能く知る、知の一字衆妙の門

⑪ 世典の三義。中廡に、程子曰く、「其の書始めは一理を言ひ、中は散じて萬事となり、末復た合して一理となる」と、此の謂なり。

⑫ 曹溪。六祖大鑑惠能禪師のこと、曹溪は其の住居の地名。

⑬ 西來碧眼僧。達磨大師のこと。

跋

右の編は乃ち曹溪の老和尚退隱師翁の著す所なり。噫二百年來師法盛衰して、禪教の徒、各異見を生ず。教を宗とする者は、唯だ糟粕に耽り、徒に自ら沙を算へて、五教の上に直指人心自らをして悟入せしむるの門あることを知らず。禪を宗とするものは、自ら天真を恃んで修證を撥無して、頓悟して後始めて即ち發心して萬行を修習するの意を知らず。禪教混溢して、沙金分つこと罔し、圓覺の所謂本來成佛と説くを聞いては、本迷悟なしと謂つて、因果を撥置するときは則ち便ち邪見と成る。又無明を修習するを聞いては、真能く妄を生ずと謂つて、眞常の性を失するときは、則ち亦邪見と成る者是れなり。嗚呼殆い哉、斯の道の傳はらざるること何ぞ是の若く其れ甚たしきや。綿綿涓涓として、一髮に千鈞を引くが如し、幾乎ど地に落ちて從ふこと無し。頼に我が師翁の西山に住すること二十年、牛に鞭つて暇あれば、五十本の經論語録を覽て、間に日用中參決要

① 禪教。禪は即ち教外別傳の禪宗、教は即ち教内の諸宗。
 ② 沙を算す。證道歌に「海に入りて沙を算す、徒らに自ら困す云云」あり。
 ③ 五教。釋尊一代の教説を五種に判別したるもの、小乗教、大乘始教、終教、頓教、圓教是れなり。是れは華嚴宗の判釋に依る、他の宗旨にも五教の名あるものあり、之と異なり、今は之を省く。但し今云ふ五教とは、是等の別を云ふに非ずして御一代の言教を指すなり。
 ④ 午に鞭つ。作務するなり、心田を耕すなり。
 ⑤ 五十本。或は五卷或は十卷。

切の語句あるときは即ち輒ち之を録して、時に室中の二三子に與へて、詢然として之を誨ふ、一へに羊を牧するの法の如し。過ぎたるは之を抑へ、後れたるは之を鞭ちて驅つて大覺の門に入らしむ、老婆心、微困なることを得たる是の如く其れ切なり。二三子の鈍根なるを奈せん、返つて法門の高峻なるを以て病と爲す。師翁其の迷蒙を、惑むが爲に、各語句下に就いて註を入れて之を解し、編次して之を釋す。鈎鎖連環、血脉相通、萬藏の要、五宗の源、極めて此に備はれり。言言見諦し、句句朝宗す、向の偏なる者をば之を圓にし、滯る者をば之を通ず、謂つべし禪教の龜鑑、解行の良藥なりと。然して師翁常に與に這般の事を論ずるに、一言半句と雖も、劍双上の事を弄するが如し、紙墨に上さんことを恐る、豈に此れを以て方外に流通して、己が能に誇衒せんことを欲せんや。門人白雲禪子魯願之を寫し、門人碧泉、禪徳の義天之を校す。門人大禪師の淨源、門人大禪師大常、門人青霞道人法融等、稽首再拜して曰く「未曾有なり」と。遂に同志六七人と鉢囊の中に儲ふる所を傾けて、梓に入れて流通して以て師翁訓蒙の恩を報ず。大機龍藏、汪洋渺として淵海の如し。龍珠を探

① 萬藏。一切藏經、即ち釋尊一代所説の經文なり。
 ② 五宗。禪の五派、臨濟宗、曹洞宗、雲門宗、潯仰宗、法眼宗、是れなり、又五家とも云ふ、是に臨濟下の楊岐、黃龍の二分派を加へて七宗と稱す。
 ③ 劍双上の事。苟もせざるを。劍双の前には僅かに過つては喪身失命す、是を以て喻となす。
 ④ 大機龍藏。大機は祖師の大機大用より發せられたる言句の類。龍藏は佛一代權説終説の一切藏經。
 ⑤ 龍珠を探り。河上の翁の子、川に没して千金の珠を得たり。翁曰く「珠は驪龍頷下にあるもの云云」云。莊子列禦寇篇に出でたり。珠を探り珊瑚を採る者、水練の達者ならざるべからず。上の淵海の句に對す。
 ⑥ 撮要の功。佛經語録中の肝要

り、珊瑚を采る者と言ふと雖も、孰か從つて之を求めん、海に入ること陸の如くするの手段に非ずんば、頗る望涯の嘆を免れず。然るときは則ち撮要の功、發蒙の惠、山の高きが如く、海の深きが如し。設ひ若し萬骨を碎き、千命を粉にすとも、如何ぞ一毫を報じ得んや。千里の外に、之を見之を聞くことあつて、驚かず疑はず、真に所謂千歲の下も一子雲耳。

時 萬曆己卯春

曹溪の

宗遂四溟隱峰惟政拜手口訣、因つて爲に謹んで跋す、

なるものを撮り出したる功。
 ①發蒙。蒙昧を啓發するなり。
 ②一子雲。昔揚子雲一書を著して「太玄」云ふ、人皆之を笑ふ、子雲が言はく「世の我を知らざるこそ害なし、後世に揚子雲なるものあつて必ず之を好しとせん」と。

③萬曆己卯。朝鮮李氏昭の敬王代にして宣祖十三年なり、我が朝正親町天皇の天正七年に相當す。而して萬曆は明の十三代神宗の年號なり。
 ④宗遂。遂は經なり、又嗣の義なり、嗣法をいふ、四溟は蓋し山の名なりと古抄にあり。

禪家龜鑑

曹溪退隱述

有一物於此從本以來、昭昭靈靈、不會生、不會滅、名不得、狀不得。

一物者何物。古人頌云、古佛未生前、凝然一相圓、釋迦猶未會、迦葉豈能傳、此一物之所以不會生、不會滅、名不得、狀不得也。六祖告衆云、吾有一物、無名無字、諸人還識否、神會禪師即出曰、諸佛之本源、神會之佛性、此所以爲六祖之藁子也、懷讓禪師自嵩山來、六祖問曰、什麼物、伊麼來、師罔措、至八年方自肯曰、說似一物即不中、此所以爲六祖之嫡子也。三教聖人、從此句出、誰是舉者、惜取眉毛。

佛祖出世、無風起浪。

佛祖者世尊迦葉也、出世者大悲爲體度衆生也、然以一物觀之、則人人面目、本來圓成、豈假他人添脂著粉也、此出世之所以起波浪也、虛空藏經云、文字是魔業、名相是魔業、至於佛語亦是魔業、是此意也、此直舉本分、佛祖無功能。

乾坤失色、日月無光。

然法有多義、人有多機、不妨施設。

法者一物也。人者衆生也。法有不變隨緣之義。入有頓悟漸修之機。故不妨文字語言之施設也。此所謂官不容針。私通車馬者也。衆生雖曰圓成。生無慧目。甘受輪轉。故若非出世之金鑊。誰刮無明之厚膜也。至於越苦海而登樂岸者。皆由大悲之恩也。然則恒沙身命。難報萬一也。此廣舉新熏。感佛祖深恩。

王登寶殿野老謳歌。

強立種種名字。或心或佛或衆生。不可守名而生解。當體便是。動念卽乖。

一物上強立三名字者。教之不得已也。不可守名生解者。亦禪之不得已也。一擡一搯。旋立旋破。皆法王法令之自在者也。此結上起下。論佛祖事體各別。

久旱逢佳雨。他鄉見故人。

世尊三處傳心者。爲禪旨。一代所說者。爲教門。故曰。禪是佛心。教是佛語。

三處者。多子塔前分半座。一也。靈山會上舉拈花。二也。雙樹下椰示雙趺。三也。所謂迦葉別傳禪燈者。此也。一代者。四十九年間。所說五教也。人天教。一也。小乘教。二也。大乘教。三也。頓教。四也。圓教。五也。所謂阿難流通教海者。此也。然則禪教之源者。世尊也。禪教之派者。迦葉阿難也。以無言至於無言者。禪也。以有言至於無言者。教也。乃至心是禪法也。語是教法也。則法雖一味。見解則天地懸隔。此辨禪教二途。不得放過草裏橫身。

是故若人失之於口。則拈花微笑。皆是教迹。得之於心。則世間麤言細語。皆是教外別傳禪旨。

法無名。故言不及也。法無相。故心不及也。擬之於口者。失本心王也。失本心王。則世尊拈花。迦葉微笑。盡落陳言。終是無物也。得之於心者。非但銜談善說法要。至於鶩語深談。實相也。是故寶積禪師。聞哭聲。踊悅身心。寶壽禪師。見靜拳。開豁面目者。以此也。此明禪教深淺。

明珠在手。弄去弄來。

吾有一言。絕慮忘緣。兀然無事坐。春來草自青。

絕慮忘緣者。得之於心也。所謂間道人也。於戲其爲人也。本來無緣。本來無事。飢來卽食。困來卽眠。綠水青山。任意逍遙。漁村酒肆。自在安眠。年代甲子。總不知。春來依舊草自青。此別欲一念回光者。

將謂無人。賴有一箇。

教門惟傳一心法。禪門惟傳見性法。

心如鏡之體。性如鏡之光。性自清淨。卽時割然。還得本心。此秘重得意一念。

重重山與水。清白舊家風。

評曰。心有二種。一本源心。二無明取相心也。性有二種。一本法性。二性相對性也。故禪教者。同迷守名生解。或以淺爲深。或以深爲淺。遂爲觀行大病。故於此辨之。

然諸佛說經。先分別諸法。後說畢竟空。祖師示句。迹絕於意地。理顯於心源。

諸佛爲萬代依憑。故理須委示。祖師在卽時度脫。故意使玄通。迹祖師言迹也。意學者意。

地也。

胡亂指注，臂不外曲。

諸佛說弓，祖師說弦，佛說無礙之法，方歸一味，拂此一味之迹，方現祖師所示一心，故云庭前柏樹子話，龍藏所未有底。

說弓曲也，說弦直也，龍藏龍宮之藏經也，僧問趙州，如何是祖師西來意，州答云，庭前柏樹子，此所謂格外禪旨也。

魚行水濁，鳥飛毛落，方語云，蹤跡猶在。

故學者先以如實言教，委辨不變隨緣二義，是自心之性相頓悟漸修兩門，是自行之始終，然後放下教義，但將自心現前一念，參詳禪旨，則必有所得，所謂出身活路。

上根大智，不在此限，中下根者，不可躐等也，教義者，不變隨緣，頓悟漸修，有先有後，禪法者，一念中不變隨緣，性相體用，元是一時離即離非，是即非即，故宗師據法離言，直指一念，見性成佛耳，放下教義者，以此。

明歷歷時雲藏深谷，深密密處日照晴空。

大抵學者須參活句，莫參死句。

活句下薦得，堪與佛祖爲師，死句下薦得，自救不了，此下特舉活句，使自悟入。要見臨濟，須是鐵漢。

評曰：話頭有句意二門，參句者徑截門活句也，沒心路沒語路，無摸捺故也，參意者

圓頓門死句也，有理路有語路，有聞解思相故也。

凡本參公案上，切心做工夫，如雞抱卵，如猫捕鼠，如飢思食，如渴思水，如兒憶母，必有透徹之期。

祖師公案，有一千七百則，如狗子無佛性，庭前柏樹子，麻三斤，乾屎橛之流也，雞之抱卵，暖氣相續也，猫之捕鼠，心眼不動也，至於飢思食，渴思水，兒憶母，皆出於真心，非做作底心，故云切也，參禪無此切心，能透徹者無有是處。

參禪須具三要，一有大信根，二有大憤志，三有大疑情，苟闕其一，如折足之鼎，終成廢器。

佛云，成佛者，信爲根本，永嘉云，修道者先須立志，蒙山云，參禪者不疑言句，是爲大病，又云，大疑之下必有悟。

日用應緣處，只舉狗子無佛性話，舉來舉去，疑來疑去，覺得沒理路，沒義路，沒滋味，心頭熱悶，時，便是當人放身命處，亦是成佛作祖底基本也。

僧問趙州，狗子還有佛性也無，州云，無，此一字子宗門之一關，亦是摧許多惡知惡覺底器仗，亦是諸佛面目，亦是諸祖骨髓也，須透得此關，然後佛祖可期也，古人頌云，趙州露刃劍，寒霜光燄燄，擬議問如何，分身作兩段。

話頭不得舉起處承當，不得思量卜度，又不得將迷待悟，就不可思量處，思量心無所之，如老鼠入牛角，便見倒斷也，又尋常計較安排底是識情，隨生死遷流底是識情，怕怖惶惶底是識情，今人不知是病，只管在裏許頭出頭沒。

話頭有十種病。曰：意根下卜度。曰：揚眉瞬目處探根。曰：語路上作活計。曰：文字中引證。曰：舉起處承當。曰：颺在無事匣裏。曰：作有無會。曰：作真無會。曰：作道理會。曰：將迷待悟也。離此十種病者，但舉話時略抖擻精神，只疑是箇甚麼。

此事如蚊子上鐵牛，更不問如何若何，下嘴不得處，棄命一攢，和身透入。

重結上意，使參活句者，不得退屈。古云：參禪須透祖師關，妙悟要窮心路絕。

工夫如調絃之法，緊緩得其中，勤則近執着，忘則落無明，惶惶歷歷，密密綿綿。

彈琴者曰：緩急得中，然後清音普矣。工夫亦如此，急則動血囊，忘則入鬼窟，不徐不疾，妙在其中。

工夫到行不知行，坐不知坐，當此之時，八萬四千魔軍，在六根門頭伺候，隨心生設，心若不起，爭如之何。

魔者樂生死之鬼名也，八萬四千魔軍者，乃衆生八萬四千煩惱也。魔本無種，修行失念者，遂派其源也。衆生順其境，故順之；道人逆其境，故逆之。故云：道高魔盛也。禪定中，或見孝子而斫股，或見猪子而把鼻者，亦自心起見，感此外魔也。心若不起，則種種伎倆，翻爲割水吹光也。古云：壁隙風動，心隙魔侵。

起心是天魔，不起心是陰魔，或起或不起，是煩惱魔，然我正法中，本無如是事。

大抵忘機是佛道，分別是魔境，然魔境夢事，何勞辨詰。

工夫若打成一片，則縱今生透不得，眼光落地之時，不爲惡業所牽。

業者無明也，禪者般若也，明闇不相敵理，固然也。

大抵參禪者，還知四恩深厚麼？還知四大醜身，念念衰朽麼？還知人命在呼吸麼？生來值遇佛祖麼？及聞無上法，生希有心麼？不離僧堂守節麼？不與隣單雜話麼？切忌鼓扇是非麼？話頭十二時中，明明不昧麼？對人接話時，無間斷麼？見聞覺知時，打成一片麼？返觀自己，捉敗佛祖麼？今生決定續佛慧命麼？起坐便宜時，還思地獄苦麼？此一報身，定脫輪迴麼？當八風境，心不動麼？此是參禪人日用中點檢底道理。古人云：此身不向今生度，更待何生度。此身。

四恩者：父母、君、師、施主恩也。四大醜身者：父之精一滴，母之血一滴者，水大之濕也，精爲骨，血爲皮者，地大之堅也，精血一塊，不腐不爛者，火大之暖也，鼻孔先成，通出入息者，風大之動也。阿難曰：欲氣龜濁，腥臊交遘，此所以醜身也。念念衰朽者，頭上光陰，刹那不停，面自皺而髮自白，如云：今既不如昔，後當不如今，此無常之體也。然無常之鬼，以殺爲戲，實念念可畏也。呼者出息之風也，吸者入息之風也，人命寄托，只在出入息也。八風者：順逆二境也。地獄苦者，人間六十劫泥犁一晝夜，鑊湯爐炭劍樹刀山之苦，口不可形言也。人身難得，甚於海中之鍼，故於此惑而警之。

評曰：上來法語，如人飲水，冷暖自知。聰明不能敵業，乾慧未免苦輪，各須察念，勿以自謾。

學語之輩，說時似悟，對境還迷，所謂言行相違者也。

此結上自謾之意，言行相違，虛實可辨。

若欲敵生死，須得這一念子爆地一破，方了得生死。

爆打破漆桶聲，打破漆桶，然後生死可敵也。諸佛因地法行者，只此而已。

然一念子爆地一破，然後須訪明師，決擇正眼。

此事極不容易，須生慚愧始得道。如大海轉入轉深，慎勿得小為足。悟後若不見人，則醍醐上味翻成毒藥。

古德云：只貴子眼正，不貴汝行履處。

昔仰山答滄山問云：涅槃經四十卷，總是魔說。此仰山之正眼也。仰山又問行履處，滄山答曰：只貴子眼正云。此所以先開正眼，而後說行履也。故云：若欲修行，先須頓悟。

願諸道者，深信自心，不自屈，不自高。

此心平等本無凡聖，然約人有迷悟凡聖也。因師激發，忽悟真我與佛無殊者，頓也。此所以不自屈，如云：本來無一物也。因悟斷習，轉凡成聖者，漸也。此所以不自高，如云：時時勤拂拭也。屈者，教學者病也。高者，禪學者病也。教學者不信禪門，有悟入之秘訣，深滯權教，別執真妄，不修觀行，數他珍寶，故自生退屈也。禪學者不信教門，有修斷之正路，染習雖起，不生慚愧，果級雖初，多有法慢，故發言過高也。是故得意修心者，不自屈，不自高也。

評曰：不自屈，不自高者，略舉初心。因該果海，則雖信之一位也。廣舉菩薩果，徹因源，則五十五位也。

迷心修道，但助無明。

悟若未徹，修豈稱真哉。悟修之義，如膏明相賴，目足相資。

修行之要，但盡凡情，別無聖解。

病盡藥除，還是本人。

不用捨衆生心，但莫染汚自性。求正法是邪。

捨者求者，皆是染汚也。

斷煩惱名二乘，煩惱不生名大涅槃。

斷者能所也，不生者無能所也。

須虛懷自照，信一念緣起無生。

此單明性起。

諦觀殺盜姪妄，從心上起，當處便寂，何須更斷。

此雙明性相。

經云：不起一念，名為永斷無明。又云：念起即覺。

知幻即離，不作方便，離幻即覺，亦無漸次。

心為幻師也，身為幻城也，世界幻衣也，名相幻食也。至於起心動念，虛妄言真，無非幻也。又無始幻，無明皆從覺心生，幻幻如空花，幻滅名不動，故夢瘡求醫者，寤來無方便，知幻者亦如是。

衆生於無生中，妄見生死涅槃，如見空花起滅。

性本無生故無生涅槃也。空本無花故無起滅也。見生死者如見空花起也。見涅槃者如見空花滅也。然起本無起滅本無滅於此二見不用窺詰是故思益經云諸佛出世非為度衆生只為度生死涅槃二見耳。

菩薩度衆生入滅度又實無衆生得滅度。

菩薩只以念念為衆生也。了念體空者度衆生也。念既空寂者實無衆生得滅度也。此上論信解。

理雖頓悟事非頓除。

文殊達天真普賢明緣起解似電光行同窮子此下論修證。

帶姪修禪如蒸沙作飯帶殺修禪如塞耳叫聲帶偷修禪如漏卮求滿帶妄修禪如刻蠶為香縱有多智皆成魔道。

此明修行軌則三無漏學也。小乘稟法為戒粗治其末大乘攝心為戒細絕其本然則法戒無身犯心戒無思犯也。姪者斷清淨殺者斷慈悲盜者斷福德妄者斷真實也能成智慧縱得六神通如不斷殺盜姪妄則必落魔道永失菩提正路矣。此四戒百戒之根故別明之使無思犯也。無憶曰戒無念曰定莫妄曰慧又戒為捉賊定為縛賊慧為殺賊又戒器完固定水澄清慧月方現此三學者實為萬法之源故特明之使無諸漏也。

靈山會上豈有無行佛少林門下豈有妄語祖。

無德之人不依佛戒不護三業放逸懈怠輕慢佗人輕量是非而為根本。

一破心戒百過俱生。

評曰如此徒末法熾盛惱亂正法學者詳之。

若不持戒尙不得疥癩野干之身況清淨菩提果可冀乎。

重戒如佛佛常在焉須草繫鷲珠以為先導。

欲脫生死先斷貪欲及諸愛渴。

愛為輪迴之本欲為受生之緣佛云姪心不除塵不可出又云恩愛一縛著率人入罪門。

渴者情愛之至切也。

無礙清淨慧皆因禪定生。

超凡入聖坐脫立亡者皆禪定之力也故云欲求聖道離此無路。

心在定則能知世間生滅諸相。

虛隙日光纖埃擾擾清潭水底影像昭昭。

見境心不起名不生不生名無念無念名解脫。

戒也定也慧也舉一具三不是單相。

修道證滅是亦非真也。心法本寂乃真滅也。故曰諸法從本來常自寂滅相。

眼不自見見眼者妄也。故妙首思量淨名杜默此下散舉細行。

貧人來乞隨分施與同體大悲是真布施。

自他為一曰同體空手來空手去吾家活計。

有人來害，當自攝心，勿生嗔恨，一念嗔心起，百萬障門開。

煩惱雖無量，嗔慢爲甚，涅槃云：塗割兩無心，嗔如冷雲中霹靂起，火來。若無忍行，萬行不成。

行門雖無量，慈忍爲根源，忍心如幻夢，辱境若龜毛。

守本真心，第一精進。

若起精進心，是妄，非精進，故云：莫妄想，莫妄想，懈怠者常常望後，是自棄人也。持咒者現業易制，自行可違，宿業難除，必借神力。

魔登得果信不誣矣，故不持神咒，遠離魔事者，無有是處。禮拜者敬也，伏也，恭敬真性，屈伏無明。

身口意清淨，則佛出世。

念佛者在口曰誦，在心曰念，徒誦失念，於道無益。

阿彌陀佛六字法門，定出輪迴之捷徑也，心則緣佛境界，憶持不忘，口則稱佛名號，分明不亂，如是心口相應，名曰念佛。

評曰：五祖云：守本真心，勝念十方諸佛。六祖云：常念佗佛，不免生死，守我本心，卽到彼岸。又云：佛向性中作，莫向身外求。又云：迷人念佛求生，悟人自淨其心。又云：大抵衆生悟心自度，佛不能度衆生。云云。如上諸德，直指本心，別無方便，方將一法，便逗諸根，理實如是，然迹門實有極樂世界，阿彌陀佛有四十八大願，凡念十聲者，承此

願力，往生蓮胎，徑脫輪迴，三世諸佛，異口同音，十方菩薩，同願往生，又況古今往生之人，傳記昭昭，願諸行者，慎勿錯認，勉之勉之。

梵語阿彌陀，此云無量壽，亦云無量光，十方三世第一佛號也，因名法藏比丘，對世自在王佛，發四十八願云：我作佛時，十方無央數世界諸天人民，以至蜎飛蠕動之流，念我名十聲者，必生我刹中，不得是願，終不成佛。云云。先聖云：唱佛一聲，天魔喪膽，名除鬼簿，蓮出金池，又懺法云：自力他力，一遲一速，欲越海者，種樹作船，遲也，比自力也，借船越海，速也，比佛力也，又曰：世間稚兒，迫於水火，高聲大叫，則父母聞之，急走救援，如入臨命終時，高聲念佛，則佛具神通，決定來迎，爾是故大聖慈悲，勝於父母也，衆生生死，甚於水火也，有人云：自心淨土，淨土不可生，自性彌陀，彌陀不可見，此言似是而非也，彼佛無貪，無嗔，我亦無貪，嗔乎？彼佛變地獄作蓮花，易於返掌，我則以業力，常恐自墮於地獄，況變作蓮花乎？彼佛觀無盡世界，如在目前，我則隔壁事，猶不知，況見十方世界，如目前乎？是故人人性則雖佛，而行則衆生，論其相用，天地懸隔，圭峯云：設實頓悟，終須漸行，誠哉是言也，然則寄語自性彌陀者，豈有天生釋迦，自然彌陀耶？須自付量，人豈不自知，臨命終時，生死苦際，定得自在否？若不如是，莫以一時貢高，却致永劫沈墮，又馬鳴龍樹，悉是祖師，皆明垂言教，深勸往生，我何人哉，不欲往生，又自云：西方去，此遠，夫十萬十惡，八千八邪，此爲鈍根說相也，又云：西方去，此不遠，卽心衆生，是佛彌陀，此

為利根說性也，教有權實，語有顯密，若解行相應者，遠近俱通也，故祖師門下，亦有或喚阿彌陀佛者，惠遠，或喚主人公者，瑞岩。

聽經有經耳之緣，隨喜之福，幻軀有盡，實行不亡。

此明智學，如食金剛，勝施七寶，壽師云：聞而不信，尚結佛種之因，學而不成，猶益人天之福。

看經若不向自己上做工夫，雖看盡萬藏，猶無益也。

此明愚學，如春禽晝啼，秋蟲夜鳴，密師云：識字看經，元不證悟，銷文釋義，唯熾貪嗔邪見。學未至於道，街耀見聞，徒以口舌辨利相勝者，如廁屋塗丹牒。

別明末世愚學，學本修性，全習為人，是誠何心哉。

出家人習外典，如以刀割泥，泥無所用，而刀自傷焉。

門外長者子，還入火宅中。

出家為僧，豈細事乎，非求安逸也，非求溫飽也，非求利名也，為生死也，為斷煩惱也，為續佛慧命也，為出三界度眾生也。

可謂衝天大丈夫。

佛云：無常之火，燒諸世間，又云：眾生苦火，四面俱焚，又云：諸煩惱賊常伺殺人，道人宜自警悟，如救頭燃。

身有生老病死，界有成住壞空，心有生住異滅，此無常苦火，四面俱焚者也，謹白參玄人。

光陰莫虛度。

貪世浮名，枉功勞形，營求世利，業火加薪。

貪世浮名者，有人詩云：鴻飛天末，迹留沙，人去黃泉，名在家，營求世利者，有人詩云：采得百花成蜜後，不知辛苦為誰甜，枉功勞形者，鑿冰彫刻，不用之巧也，業火加薪者，龜弊色香，致火之具也。

名利衲子，不如草衣野人。

唾金輪入雪山，千世尊不易之軌則，末世羊質，虎皮之輩，不識廉恥，望風隨勢，陰媚取寵，噫，其懲也夫。

心染世利者，阿附權門，趨走風塵，返取笑於俗人，此衲子以羊質證此多行，以懲也夫，三字結之，此三字文出莊子。

佛云：云何賊人，假我衣服，裨販如來，造種種業。

末法比丘有多般名字，或烏鼠僧，或啞羊僧，禿居士，或地獄滓，或被袈裟賊，噫，其所以此。

裨販如來者，撥因果，排罪福，沸騰身口，迭起愛憎，可謂惑也，避僧避俗，曰烏鼠，舌不說法，曰啞羊，僧形俗心，曰禿居士，罪重不遷，曰地獄滓，賣佛營生，曰被袈裟賊，以被袈裟賊證此多名，以此二字結之，此二字文出老子。

於戲佛子，一衣一食，莫非農夫之血，織女之苦，道眼未明，如何消得。

傳燈，一道人道眼未明，故身為木菌，以還信施。

故曰：要識披毛戴角底麼？即今虛受信施者是，有人未飢而食，未寒而衣，是誠何心哉？都不思目前之樂，便是身後之苦也。

智論：一道人五粒粟受牛身，生償筋骨，死還皮肉，虛受信施，報應如響。

故曰：寧以熱鐵纏身，不受信心人衣；寧以洋銅灌口，不受信心人食；寧以鐵錘投身，不受信心人房舍等。

梵網經云：不以破戒之身，受信心人種種供養，乃種種施物，菩薩若不發是願，則得輕垢罪。

故曰：道人進食如進毒，受施如受箭，弊厚言甘，道人所畏。

進食如進毒者，畏喪其道眼也；受施如受箭者，畏失其道果也。

故曰：修道之人，如一塊磨刀之石，張三也來磨，李四也來磨，磨來磨去，別人刀快而自家石漸消，然有人更嫌，佗人不來，我石上磨，實為可惜。

如此道人平生所向，只在溫飽。

故古語亦有之，曰：三途苦未是苦，袈裟下失人身，始是苦也。

古人云：今生未明心，滴水也難消，此所以袈裟下失人身也。佛子佛子，憤之激之，此章始起於一於戲，終結於一古語，中間細釋許多故曰字，亦一段文法也。

咄哉！此身九孔常流，百千癰疽，一片薄皮，又云：革囊盛糞，膿血之聚，臭穢可鄙，無貪惜之，何況

百年將養，一息背恩。

上來諸業皆由此身發聲叱咄，深有警也。此身諸愛根本，了之虛妄，則諸愛自除，如其耽着，則起無量過患，故於此特明之，開修道之眼也。

評曰：四大無主，故一為假，四冤，四大背恩，故一為養，四蛇，我不了虛妄故，為佗人也。嗔之慢之，佗人亦不了虛妄故，為我也。嗔之慢之，若二鬼之爭一屍也，一屍之為體也，一曰泡聚，一曰衆魔，一曰苦聚，一曰糞聚，非徒速朽，亦甚鄙陋，上七孔常流涕唾，下二孔常流屎尿，故須十二時中，潔淨身器，以參衆數，凡行履不淨者，善神必背去，因果經云：將不淨手執經卷，在佛前涕唾者，必當獲廁蟲報。文殊經云：大小便時，狀如木石，慎勿語言作聲，又勿畫壁書字，又勿吐痰入廁中，又云：登廁不洗淨者，不得坐禪牀，不得登寶殿，律云：初入廁時，先須彈指三下，以警在穢之鬼，默誦神咒各七遍，初誦入廁咒，曰：唵，根嚕陀耶莎訶，次誦洗淨咒，曰：唵，賀曩蜜嚩帝莎訶，右手執瓶，左手用無名指洗之，淨水旋旋傾之，著實洗淨，次誦洗手咒，曰：唵，主迦囉，野莎訶，次誦去穢咒，曰：唵，室利曳婆醯，娑嚩賀，次誦淨身咒，曰：唵，跋折囉，惱迦吒娑嚩賀，此五神咒有大威德，諸惡鬼神聞必拱手，若不如法誦持，則雖用七恒河水，洗至金剛際，亦不得身器清淨，又云：洗淨須用冷水，洗手須用皂角，又木屑灰泥亦通，若不用灰泥，則觸水淋其手背，垢穢尚存，禮佛誦經必得罪，云云，此登廁洗淨之法，亦是道人日用行實，故略引經語并附于此。

有罪即懺悔，發業即慚愧，有丈夫氣象，又改過自新，罪隨心滅。

懺悔者懺其前愆，悔其後過，慚愧者慚責於內，愧發於外，然心本空寂，罪業無寄，道人宜應端心以質直為本，一瓢一衲，旅泊無累。

佛云：心如直絃，又云：直心是道場，若不耽着此身，則必旅泊無累。

凡夫取境，道人取心，心境兩忘，乃是真法。

取境者如鹿之趁空華也，取心者如猿之捉水月也，境心雖殊，病則一也，此合論凡夫二乘。

天地尚空，秦日月山河不見，漢君臣。

聲聞宴坐林中，被魔王捉，菩薩遊戲世間，外魔不見。

聲聞取靜為行，故心動，心動則鬼見也，菩薩性自空寂，故無迹，無迹則外魔不見，此合論二乘菩薩。

三月懶遊花下路，一家愁閉雨中門。

凡人臨命終時，但觀五蘊皆空，四大無我，真心無相，不去不來，生時性亦不生，死時性亦不去，湛然圓寂，心境一如，但能如是，直下頓了，不為三世所拘繫，便是出世自由人也，若見諸佛無心隨去，若見地獄無心怖畏，但自無心，同於法界，此即是要節也，然則平常是因，臨終是果，道人須著眼看。

怕死老年親釋迦，如向此時明自己，百年光影轉頭非。

凡人臨命終時，若一毫毛凡聖情量不盡，思慮未忘，向驢胎馬腹裏托質，泥犁鑊湯中煮爍，乃至依前再為螻蟻蚊虻。

白雲云：設使一毫毛凡聖情念淨盡，亦未免入驢胎馬腹中。

二見星飛散入諸趣，烈火茫茫寶劍當門。

評曰：此二節特開宗師無心合道門，權遮教中念佛求生門，然根器不同，志願亦異，各各如是，兩不相妨，願諸道者，平常隨分各自勞力，最後剎那莫生疑悔。

禪學者本地風光，若未發明，則孤峭玄關擬從何透，往往斷滅空以為禪，無記空以為道，一切俱無以為高見，此冥然頑空，受病幽矣，今天下之言禪者，多坐在此病。

向上一關措足無門，雲門云：光不透脫，有兩種病，透過法身，亦有兩種病，須一一透得始得。

不行芳草路，難至落花村。

宗師亦有多病，病在耳目者，以瞠眉怒目，側耳點頭為禪，病在口舌者，以顛言倒語，胡喝亂喝為禪，病在手足者，以進前退後，指東畫西為禪，病在心腹者，以窮玄究妙，超情離見為禪，據實而論，無非是病。

殺父母者，佛前懺悔，謗般若者，懺悔無路。

空中撮影，非為妙，物外追蹤，豈俊機。

本分宗師，全提此句，如木人唱拍，紅爐點雪，亦如石火電光，學者實不可擬議也，故古人知師

恩曰：不重先師道德，只重先師不為我說破。

不道不道，恐上紙墨箭穿江月影，須是射鵝人。

大抵學者先須詳辨宗途，昔馬祖一喝也，百丈耳聾，黃檗吐舌，這一喝便是拈花消息，亦是達磨初來底面目，吁此臨濟宗之淵源。

識法者懼和聲便打，杖子一枝無節目，慙慙分付夜行人。

昔馬祖一喝也，百丈得大機，黃檗得大用，大機者圓應為義，大用者直截為義，事見傳燈錄。

大凡祖師宗途有五，曰臨濟宗，曰曹洞宗，曰雲門宗，曰滌仰宗，曰法眼宗。

臨濟宗

本師釋迦佛至三十三世，六祖慧能大師下直傳，曰南嶽懷讓，曰馬祖道一，曰百丈懷海，曰黃檗希運，曰臨濟義玄，曰興化存獎，曰南院首顛，曰風穴延沼，曰首山省念，曰汾陽善昭，曰慈明楚圓，曰楊岐方會，曰白雲守端，曰五祖法演，曰圓悟克勤，曰徑山宗杲，禪師等。

曹洞宗

六祖下傍傳，曰青原行思，曰石頭希遷，曰藥山惟儼，曰雲巖曇晟，曰洞山良价，曰曹山耽章，曰雲居道膺，禪師等。

雲門宗

馬祖傍傳，曰天王道悟，曰龍潭崇信，曰德山宣鑑，曰雪峯義存，曰雲門文偃，曰雪竇重顯，曰天衣義懷，禪師等。

滌仰宗

百丈傍傳，曰滌山靈祐，曰仰山慧寂，曰香嚴智閑，曰南塔光涌，曰芭蕉慧清，曰霍山景通，曰無著文喜，禪師等。

法眼宗

雪峰傍傳，曰玄沙師備，曰地藏桂琛，曰法眼文益，曰天台德韶，曰永明延壽，曰龍濟紹修，曰南臺守安，禪師等。

臨濟家風

赤手單刀殺佛殺祖，辨古今於玄要，驗龍蛇於主賓，操金剛寶劍，掃除竹木精靈，奪獅子全威，震裂狐狸心膽，要識臨濟宗麼。

青天轟霹靂，平地起波濤。

曹洞家風

權開五位，善接三根，橫抽寶劍，斬諸見稠林，妙協弘通，截萬機穿鑿，威音那畔，滿目烟光，空劫已前，一壺風月，要識曹洞宗麼。

佛祖未生空劫外，正偏不落有無機。

雲門家風

禪家龜鑑

劍鋒有路，鐵壁無門，掀翻露布葛藤，剪卻常情見解，迅電不及思量，裂焰寧容湊泊，要識雲門宗麼。

拄杖子跨跳上天，蓋子裏諸佛說法。

馮仰家風

師資唱和，父子一家，脇下書字，頭角崢嶸，室中驗人，獅子腰折，離四句絕百非，一槌粉碎，有兩口無一舌，九曲珠通，要識馮仰宗麼。

斷碑橫古路，鐵牛眠少室。

法眼家風

言中有響，句裡藏鋒，觸體常于世界，鼻孔磨觸家風，風柯月渚，顯露真心，翠竹黃花，宣明妙法，要識法眼宗麼。

風送斷雲歸嶺去，月和流水過橋來。

別明臨濟宗旨

大凡一句中具三玄，一玄中具三要，一句無文綵，卽三玄三要有文綵，卽權實玄，照用要。

三句

第一句，喪身失命，第二句，未開口，錯第三句，糞箕掃帚。

三要

一要，照卽大機，二要，照卽大用，三要，照用同時。

三玄

體中玄，三世一念等，句中玄，徑截言句等，玄中玄，良久棒喝等。

四料揀

奪人不奪境，待下根，奪境不奪人，待中根，人境兩俱奪，待上根，人境俱不奪，待出格人。

四賓主

賓中賓，學人無鼻孔，有問有答，賓中主，學人有鼻孔，有主有法，主中賓，師家無鼻孔，有問在，主中主，師家有鼻孔，不妨奇特。

四照用

先照後用，有人在，先用後照，有法在，照用同時，驅耕奪食，照用不同時，有問有答。

四大式

正利，少林面壁類，平常，禾山打鼓類，本分，山僧不會類，貢假，達磨不識類。

四喝

金剛王寶劍，一刀揮斷一切情解，踞地獅子，發言吐氣，衆魔腦裂，探竿影草，探其有無，師承鼻孔，一喝不作，一喝用具，上三玄四賓主等。

八棒

禪家龜鑑

觸令返玄，接掃從正，靠玄復正，苦責罰棒，順宗旨賞棒，有虛實辨棒，盲枷瞎棒，掃除凡聖正棒。

此等法，非特臨濟宗風，上自諸佛，下至衆生，皆分上事，若離此說法，皆是妄語。

臨濟喝德山棒，皆徹證無生，透頂透底，大機大用，自在無方，全身出沒，全身擔荷，退守文殊普賢大人境界，然據實而論，此二師亦不免偷心鬼子。

凜凜吹毛，不犯鋒銜，爍爍寒光，珠媚水，寥寥雲散，月行天。

大丈夫見佛見祖，如冤家，若着佛求，被佛縛，若着祖求，被祖縛，有求皆苦，不如無事。

佛祖如冤者，結上無風起浪也，有求皆苦者，結上當體便是也，不如無事者，結上動念即乖也，到此坐斷天下人舌頭，生死迅輪，庶幾停息也，扶危定亂，如丹霞燒木佛，雲門喫狗子，老母不見佛，皆是摧邪顯正，底手段，然畢竟如何。

常憶江南三月裏，鷓鴣啼處百花香。

神光不昧，萬古微猷，入此門來，莫存知解。

神光不昧者，結上昭昭靈靈也，萬古微猷者，結上本不生滅也，莫存知解者，結上不可守名生解也，門者有凡聖出入義，如荷澤所謂知之一字，衆妙之門也，吁起於名狀不得，結於莫存知解，一篇葛藤，一句都破也，然始終一解中，舉萬行，如世典之三義也，知解二字，佛法之大害，故時舉而終之，荷澤神會禪師，不得爲曹溪嫡子者，以此也，因而頌曰，如斯舉唱明宗旨，笑殺西來碧眼僧，然畢竟如何。

孤輪獨照江山靜，自笑一聲天地驚。

禪家龜鑑終

跋

右編乃曹溪老和尚退隱師翁所著也。噫！二百年來，師法益喪，禪教之徒，各生異見，宗教者，唯耽糟粕，徒自算沙，不知五教之上，有直指人心，使自悟入之門。宗禪者，自恃天真撥無修證，不知頓悟後，始即發心，修習萬行之意。禪教混溢，沙金罔分，圓覺所謂聞說本來成佛，謂本無迷悟，撥置因果，則便成邪見。又聞修習無明，謂真能生妄，失真常性，則亦成邪見者是也。嗚呼！殆哉！斯道不傳，何若是其甚也！綿綿涓涓，如一髮引千鈞，幾乎落地無從矣。賴我師翁住西山一十年，鞭牛有暇，覽五十本經論語錄，間有日用中參決要切之語句，則輒錄之，時與室中二三子詢詢然誨之，一如牧羊之法，過者抑之，後者鞭之，驅入於大覺之門，老婆心得徹困，若是其切也。奈二三子鈍根也，返以法門之高峻為病，為師翁惑其迷蒙，各就語句下入註而解之，編次而釋之，鈎鎖連環，血脈相通，萬藏之要，五宗之源，極備於此。言言見諦，句句朝宗，向之偏者圓之，滯者通之，可謂禪教之龜鑑，解行之良藥也。然師翁常與論這般事，雖一言半句，如弄劍刃上事，恐上紙墨，豈欲以此流通方外，誇術己能也哉！門人白雲禪師魯願寫之，門人碧泉禪德義天校之，門人大禪師淨源，門人大禪師大常，門人青霞道人法融等，稽首再拜曰：未曾有也。遂與同志六七人，傾鉢囊中所儲，入梓流通，以報師翁訓蒙之恩也。大機龍藏，汪洋渺若淵海，雖言探龍珠采珊瑚者，孰從而求之，非入海如陸之手段，頗不免望涯之嘆。然則撮要之功，

發蒙之惠，如山之高，若海之深，設若碎萬骨粉千命，如何報得一毫哉！千里之外，有見之聞之，不驚不疑，敬之讀之，以為寶玩，則真所謂千歲之下一子雲耳。

時萬曆己卯春

曹溪宗遂四溟隱峰惟政拜手口訣，因為謹跋

昭和五年三月十五日 印刷
昭和五年三月二十日 發行

國譯禪學大成奧付

編者

國譯禪學大成編輯所
代表者 宮裡祖泰

發行者

東京市神田區錦町一丁目十六番地
宮下軍平

不許
複製

印刷者

東京市神田區表猿樂町二丁目五番地
藤本茂人

印刷所

東京市神田區表猿樂町二丁目五番地
藤本印刷所

發行所

東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三〇九番

二松堂書店

